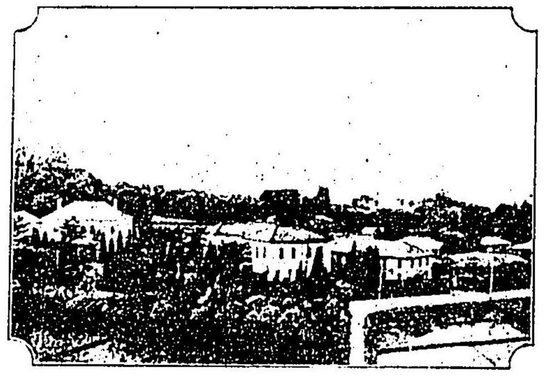
文學士 坂本健一編著

歷史叢書

伊太利亞史

早稻田大學出版部藏版



早稲田大學

歴史叢書發行の趣旨

本校出版部は史學專攻の諸名家に囑し『歴史叢書』の名の下に於て左の諸歴史を出版せんとす其の趣旨とするところは世界的觀念の發達てふ國民教育の一大主眼を貫徹するに就て稗益するところあらしめ且つ諸專門學科就中政治、經濟法律、文學の諸科を研究するの基礎として必要なる歴史的智識の普及を計らんとするにあり二十世紀の日本國民は特に世界を知らざるべからず史的智識に基づかざる空論妄斷は遂に有害無益のものたらずんばあらず世間有識の士幸ひに余輩と感を同ふし『歴史叢書』出版の舉を贊助せられなば實に余輩の幸福のみにあらざるなり

希臘史	パチエライ、オヴ、ロース	浮田和民編
羅馬史	松平康國編	浮田和民編
英國史	長田一忠編	松平康國編
佛蘭西史	文學士 白石眞編	長田一忠編
獨逸史	法學博士 高田早苗校	高田早苗編
露西亞史	文學士 坂本健一編	山本利喜雄編
伊太利亞史	文學士 坂本健一編	山本利喜雄編
西班牙葡萄牙史	文學士 村川堅固編	坂本健一編
荷蘭白耳義史	文學士 坂本健一編	坂本健一編
北歐	文學士 高桑駒吉編	高桑駒吉編
土耳古波留汗史	ドクトル、オヴ、フィロソフィー 長瀨鳳輔編	長田忠一編
米國	文學士 小崎弘道編	小崎弘道編
中央亞細亞史	文學士 矢野仁一編	矢野仁一編
印度史	文學士 河合弘民編	河合弘民編
清國殖民史	パチエライ、オヴ、ロース 松平康國編	松平康國編
近世憲法史	パチエライ、オヴ、ロース 大内暢三譯	大内暢三譯
英國十九世紀史	パチエライ、オヴ、ロース 松平康國編	松平康國編
歐州十九世紀史		
世界近世史		

伊太利亞史のはしに

わが伊太利亞史一篇を撰むは早稻田大學の歴史叢書の一に充つる爲なり。されば其趣旨は卷頭に曰へるが如く世界的觀念の發達に裨益せしめ、歴史的知識の普及を計らんといふ計畫に含まるゝものなり。既に叢書の一なり。その撰修の體裁容量、略先出の諸書に倣ひ、既定の制限に準せしを以て、特に此一篇の爲に贅説を爲すの要莫し。唯陳言二三はしかきと爲す耳。

現下西歐の諸强の國を建つる皆整々たる歴史あり。伊太利亞に至りては獨り然らず。大陸の諸强地を劃して境を分つ、もと定境あるなし。伊太利亞に至りては半島の形勝、天の自ら一國を爲すに似たり。玆に伊太利亞史といふは半島の史歟、王國

の史歟。わが此書を撰するに當りて惑ふ所以なり。地を以てすれば羅馬大帝國は一面の意に於て伊太利亞史の一部たる可きも、現下の伊太利亞王國より見れば奈破崙前殆んど史莫しと斷言す可し。故に此種の論議を措きて、羅馬帝國の後今伊太利亞王國の新興に至るまで半島に興亡せし史蹟を一括して伊太利亞史と爲すは編纂の便の爲、世俗のなすに從ふに外ならず。

伊太利亞の名の起るところ詳ならず。希臘羅馬の人は之をヲチヌスの女婿イタルス王の古傳說に附會す。曰く

Oenotri coluere viri; nunc fama, minores
Italiam dixisse ducis de nomine gentum.—Æn. i. 532.

然も他の一說にはチラニア語キツルス(牛の義)より出でたりと爲すを以て、本文採りて牧野の義なりと曰へり。邦人の海外の

地名を呼ぶ轉訛多きも、此國を呼んでイタリアと爲すの最も正しきは喜ぶ可し。之に漢字に宛つるに至りては以他里・以他利・伊達利等あれども意大里亞最も當れり。但世間伊太利の字を用る既に久しきを以て、此書暫く伊太利亞と爲せる耳。

此書の撰修に當りて最も困みたるは、撰者の不學はいふまでもあらず、座右參考引用の書最も尠きに在りき。その據るところ、實に僅に、ハントの『伊太利亞史』、シスモンヂの『伊太利亞共和史』、マキアヱリの『フィレンゼ史』、ハリットの『エヲチア共和史』、オルシの『近世伊太利亞』、リヒトソンの『最近伊太利亞』等數部にして、之に參するにシモヅの『文藝復興』、コックスの『墺地利家』、ブルレの『最近世史』、ミュラーの『歐羅巴政史』、ファイフの『近世歐羅巴史』、セイニボーの『歐羅巴政史』等若干部を以てし、また間々『大英百科

全書』、『政治家年鑑』等を參照したるのみ。その杜撰の罪はもとより辭するによし莫し。殊に憾多きは撰者が伊太利亞語に熟せずして、伊太利亞の史籍を用る能はざりしに在り。

此書の撰修は去る明治三十四年春宿痾を湘南に養ふの時に始まり、後事を以て撥み、秋に入りてまた筆を執り、昨三十五年一、二月の交に至りて稿を脱して直ちに出版部の手に委す。舊臘に至り出版部遽に上梓のことを言ふを以て事急にして訂正削修に遑あらず、校正をだも人に委するの已むを得ざるに出づ。もと不文に加ふるに事情斯の如し。辭意の適否をいふに及ばず、必ず伊太利亞發音に據るを期せし地名人名の如きも尚ほ或は英に訛し、獨に轉ぜるものなきを必せず。魯魚焉馬の誤はも校正者の責たりと雖も、撰者が草稿の亂雜なるに由れりとせば、またこゝに自ら責を引かざるを得ず。

噫、伊太利亞半島、胡爲ぞ其名の顯著にして其史の晦暗なる。千三百年來の史、之を讀んで慘たり、之を撰して憎たらざるを得ず。今にして半島王國の地中海上に新興の氣を揚ぐるに遭ふ。また快ならずや。ただ深く憾む、此一史、所謂歴史的知識普及の功甚尠くして、世界的觀念の發達に裨益するところ莫からんを。

明治癸卯紀元節の日

東京佳戸川畔にて

坂本蠡舟

Dall' Alpi allo Stretto fratelli Siam tutti!
Sui limiti Schiusi, sui troni distrutti
Piantiamo i comuni tre nostri color;
Il *verde*, la Speme tant' anni pasciuta,
Il *rosso*, la gioia d'averla compiuta,
Il *bianco*, la fede fraterna d'amor……

——Giovanni Berchet.

アルプスより海に抵るまで皆同胞、
僧王命を革めて四海安し、
大空に翻たり、我三色の旗、
緑は是多年志望の熟せしを表し、
紅は是志業茲に成るの歡を證し、
白は是同胞相愛の意を示す、

伊太利亞史目次

第一章　伊太利亞半嶋……一頁
第二章　羅馬皇帝、羅馬教皇と諸外蠻……八
第三章　諸市府の勃興……三五
第四章　ゲルフ黨の强盛……六〇
第五章　ギベリン諸公……八四
第六章　諸强の角逐……一一九
第七章　外强の侵寇、獨立の滅亡……一五二
第八章　屈辱二百五十年……一九四
第九章　奈破崙時代……二三八
第十章　復舊と反亂……二四四

第十一章　新思潮と憲法……二六五
第十二章　千八百四十八、九年の役……二八四
第十三章　ヴィクトリオ・エマヌエレ王とカヴール伯……三〇九
第十四章　伊太利亞の統一……三二二
第十五章　羅馬、ヴェネチア問題……三四八
第十六章　最近三十年の概況……三六三
第十七章　近世の文學・美術……三八七

伊太利亞

アドリア海
リグリア海
チレニア海
地中海
羅馬附近圖
1:1 000 000
ナポリ附近
1:1 250 000
ヴェネチア附近圖
1:625 000
1:5 000 000
by S.Kozaki

伊太利亞史

坂本健一編

第一章　伊太利亞半島

興亡の數。半島の地勢、山川。北伊太利亞の形勝。氣候、産物。人民。伊太利亞の名。

古今東西起仆興亡の蹟を討れば、何れか奇にして巧ならざる。渺たる一都城を以て興り、赫々たる大帝國の盛名を竹帛に垂れし羅馬は實に伊太利亞半嶋の一黒子點に過ぎず。而して半島伊太利亞王國の起りしは羅馬に後るゝ千百年。其蹟奇ならずとせんや。歐南の地、地中海に斗出して半島を作すもの三。西に西班牙あり、東に希臘ありて、伊太利亞其中に出づ。希臘の文明歐州に於て最も夙く開け羅馬之を傳承して大に興り、後西班牙始めて盛なりしに、今や風雲二千年、昌隆の

運復興して伊太利亞王國起り、希臘も亦獨立せり。其數豈巧ならずや。事蹟の奇を觀んとするは史に徵せざるを得ず。運數の巧を說かんには亦史を繙きて其來由を察す可し。茲に『半島』自然の形勝を說きて、その史に入るの緒を解かむ。

伊太利亞半島は歐南三大半島の一にして、其中に居り、西北より東南に向て斜に地中海に斗出し、東北はアドリアの海、東南はイオニアの海、西南はチレニアの海に圍繞せられ、獨り西北は彎曲新月の如きアルプスの連山疊峯に抱擁せらるゝ一帶の平野を以て大陸に連續す。其形極南カラブリアのスパルチヱント(Spartivento)海角を趾と爲し、アプリアのレヴカ(Leuca)岬を踵と爲し、そのガルガノ(Gargano)崎を以て刺馬輪に當つ可き騎用の高踵長靴に似て、北境の山麓より最南の海角に至るまで延長大約三百里、幅員は北方の廣地に於て百三十五里、中部にありては四十五六里、最南最狹の地カラブリアのエウフェミア(Eufemia)・スキラチェ(Squillace)兩灣の間に至りては僅に六七里に過ぎず。沿海の長總て八百餘里。南端僅に五十餘町。メッシナ(Messina)の峽水を隔てゝシチリア島と相望めり。勇躍一飛之を略して直に南に臨まば、地中海上の東西を通じて南北の勢茲に迫り、亞非利加の山煙波の間に指す可し。是實に嘗て羅馬の加達額と覇を爭ひて海の南北を併呑せし鍵關たり。

若し更に半島蜿蜒の地勢に就きて形勝を擧げん歟。北にロムバルヂアの豐沃の野を擁きて、雲に高きアルプスの疊山連峯波濤の如く横さまに北門の關固を爲し、その西南の脈を受けしアペンニヂ一帶の連峯はゼノヴ(Genova)灣を擁して迂曲して東南に走り、南するに從つて脈波漸く廣く、漸く分るゝに從て峯嶺漸く低く、縱に半島の脊梁を爲して山勢地勢與に南に盡く、其峰容巒姿またアルプスの峻峭崎嶇なきも、尙北方の饒野が自ら大陸的伊太利亞たるに對して、自ら別に半島伊太利亞の地たる東南地方の爲に第二の長城たるを失はず。然も不幸にして半島の事變は屢北方の風動に因りて生じ、ポー(Po)河の流域は常に半島の命運を左右する爭戰の區となりぬ。これ所謂德に在りて險に在らざるもの歟。蓋し地勢既に南北に長くして峯巒脊梁に亘れるが故に、長江大河素より少く、地幅尙蹙まらざる北方に於て源をアルプスのモンテ・ヂソ(Monte Viso)に發し、アルプス・アペンニヂ兩山の水を會してアドリアの海に入るポーの本支諸流及びチロルより南流してポー河の北に沿ひて東せるアヂゼ(Adige)ありて、北方の沃野を開き、急流激湍多く土砂を流し

て、古今桑蒼の變多く、昔日良港たりしラヱンナ(Ravenna)、アンコナ(Ancona)は後世内地の都市と爲り、ヱチチア(Venetia)の鹹湖の長堤を爲せる外、南に下りては羅馬の盛時に著はれしチベル(Tiber)の流今微に、アルノ(Arno)河の稍〻大なるあるのみ。故に舳艫相望んで洋上より至る者は云はず、苟も半島の命を制せんとする者は、先づ北方ポー河谷の沃土を略するを以て急と爲し、アルプスの山は洵に天下の險なりと雖も、古來英雄多く馬を嶺上に立てゝ南下せり。試に西南濱海の地より此連山の間に超ゆ可き險隘を數へんに、コル・ヂ・テンダ(Col di Tenda)、コル・ヅ・セネヴレ(Col du Genevre)、コル・ヅ・チェニス(Col du Cenis)、大小サン・ベルナルド(San Bernard)、シムプロン(Simplon)、サン・ゴタルド(San gothard)、サン・ベルナルヂノ(San Bernardino)、スプリュゲン(Splügen)、ブレンネル(Brenner)、ステルヰオ(Stelvio)、セメリング(Semmering)の十二路ありて、皆由つて以て此富饒の天府に入るを得可し。從つて縱橫貫通せるポー河の諸流は角逐の防線守境となりて、ミンチオ(Mincio)河邊のペスキエラ(Peschiera)、マンツア(Mantua)はアヂゼ河畔のヴロナ(Verona)、レニャゝ(Legnago)と四角同盟を爲して東北の重鎭を爲し、トリノ(Trino)、アレッサンドリア(Alessandria)は西北より入る諸敵の衝に

當れり。是半島南北形勢の大要なり。

若し天然を論ずれば、南海に斗出せる半島なれば、氣候の温暖にして快晴多きは言を俟たざるに似たりと雖も、地勢に南北の別存するが如く、寒熱また此差異を脫せず。北方の野は三方に峻嶺を繞らして大陸的氣候に近く、ミラノ(Milano)の夏はナポリ(Napoli)の暑に劣らず、ボロニャ(Bologna)の暑は半島第一と稱せらるゝも、冬はミラノのナポリより寒さ十度。降雨多く、濃霧屢〻起り、積雪深く、溝渠屢〻凝結する。北方より漸く南して所謂半島伊太利亞に入れば、雪は雨りて一晝夜を保たず、ナポリ以南霜を見ず、無花果、橙、檸檬、巴旦杏、棗子を產す。然ども此天然の寒暖を左右するものは、冬月アペンネより吹颪す外山颪(Tramontana)、南亞非利加より吹き來る重風(Sirocco)にして、南方沼澤多き地は秋に至りて瘴癘の氣深く、腥紅熱の人を害するを尠からず。ピエモンテ、ロムバルヂア、アドリア海隅諸地の米穀、アルプス諸山ツスカニア(Tuscania)、エルバ(Elba)の銅鐵、オトラント(Otranto)、バリ(Bari)の綿、カラブリアの甘草滿那は、葡萄、橄欖、蠶絲と共に今伊太利亞產物の主要なるものなりと雖も、時に盛衰あり、世に治亂ありて、民人生業の隆否亦之に伴へば、羅馬附近ツスカニア

沿海の地の如き嘗て戰亂の爲に荒蕪に歸して自然の恩澤に背きたれば、必ずしも古今を通論する能はず。言語文章亦然り。南方原希臘の移植の民多くして、羅馬大帝國の文化亦此古國を祖述したりしかば、帝國の盛時以降、文は羅甸文を用ひしも、語は尙希臘語を用ひ、後漸く羅甸語を用ふるに至りしは當時の實情なりき。南方の民情專ら優柔無斷にして、北方の人氣自ら勇敢果決なるは、もと南北風氣の差に出で、中世の廢德不倫多き、輓近刷新の思潮旺なるは古今隆替の時世に伴へるなり。況んや都府の盛衰、戶口の增減、政區の變遷の如きは實に史乘の事變を爲すもの、將に述べんとする歷史に覩る可し。

抑『伊太利亞』の名稱はもと牧野の義にして、上世にありて今の下カラブリア地方の稱呼なりしが、羅馬加達額の役起りて、ルビコン河畔に及び、後遂にアルプス山南半島の總稱となりしものにして、始より一定の區劃あるにあらず、盛衰隆替に從ひて版圖或は廣く、或は狹し。若し今を以て論ずればシチリアも半島王國領、サルヂニア素より然り。若し古を以て論ずれば半島の地と雖も半ば伊太利亞の名莫けむ。故に今暫く伊太利亞半島を限りて、略、其自然の形勝を述べ、以て半島史の端を解きしは、史變多くは此半島を本地となして起りしを以て耳。請ふ所謂伊太利亞史に入らむ。

第二章　羅馬皇帝、羅馬教皇と諸外蠻

（四百七十六年乃至千百三十五年）

羅馬季世の伊太利亞。チドアケル。テオドリク。ロムバルドの侵略。ロムゴバルド王國。東羅馬皇帝と羅馬教皇。フランク皇帝。サラケン人の侵略。帝王の僭亂。オットー皇帝。北伊太利亞の諸市。南伊太利亞の北人。グレゴリヨ七世對ハインリヒ皇帝。ヂルムスの會盟。

伊太利亞半島史は何の時に始まる。半島は嘗て羅馬皇帝の幾内たりきと雖も、其國民の史上に起りしは、羅馬帝國の滅後に在り、一國として興りしは更に一千三百年の後世に在りとせば、先を討ね源に溯り、五世紀の末造、北狄の侵略に筆を起すといへども、最近世百年興隆の運は、其前千百年間の衰亂の世と相對して半島の歴史を兩分し得可し。而して斯の如き半島の歴史は創業を以て起らず、衰亂を以て昉まり、蠻野未開を以て始まらずして、却つて古羅馬大帝國奢奢の頽勢に端を發するに由りて、自他諸國史の開卷と趣を異にせるを免れず。

昔者羅馬府の起るや、上世半島に割據せし諸民衆は爲に征服せられ、諸市府は降屈し、田園團圃は奴僕隷屬の耕耘に委せられ、四方の民は皆羅馬府民權を得しも、後羅馬帝國の衰ふるや、殷盛富豐なる都城は唯二三千の貴族右門が豪奢を衒ひ、一代の榮華、生前の富貴を貪るの地となり、綱紀解頽、事務荒廢するも顧みず。貴種漸く謝し名族漸く減ずるや、外蠻賤族四方より紛々として群起し、皆爭つて滿城の富貴を貪り、益奢安に耽る。ミラノ、ゼロナ、ボロニヤ、カプアの諸大市城亦軌を一にして皆小羅馬の面目を備へ、市政は議院制と爲り右族豪家は隷僕を頤使して宮殿に安臥し、工匠商賈は爲に利を營み富を積みて集屯し、俘浪の遊民其間に坐食し、半島の南北を通じて一理財の道莫く、一殖産の地ある莫く、勞働は賤族の業と爲り、嘗て專ら伊太利亞人の當りし兵馬の道も、優惰奢安の風起ると共に今や全く廢れ、僅に强健勇武なる外蠻を懐柔買收して臥榻の傍に置き以て防備の道を得たりと爲し、地方の園圃悉く賤奴强蠻の手に委したれば、國民は唯利を是求めて實勢主權の去るを顧みず。假令トラヤヌス、アントニヌス諸皇帝の世、羅馬太平康安の日ありしといふも、唯治平のみ、苟安に過ぎず。富增し强加ふるところ無し。野人相逐ふて都

雅の俗に趨れば、都雅の民益〻懶怠不德に陷りて、美名空しく存して、實力日に益〻減ず。而して此衰に乘じて其蓄積集藏せる天府沃土を剽略せん爲に蜂屯蟻集するは亦新興の諸蠻なり。かくて攻者と守者と皆當昔の外夷四蠻にして、國民監視せざる寶庫は新來の賊を防ぐに由なく、來者年と共に繁く多くして剽略殆んど至らざる無く、各得るところ漸く少くして相爭ひ、羅馬帝室の尊は其蓄積の空匱とともに地を攘ひ、二百年の喪亂板蕩を經て、羅馬開府の始祖と帝祖の名を一身に兼ね得たるロムルス・アウグスツス皇帝廢せられて、復帝室推戴の名を要せず。伊太利亞半島は其他の西羅馬帝領とコンスタンチノポリスの朝廷に歸し、西羅馬帝國斯に滅亡してゼノ(Zeno)皇帝は東西兩帝國統一の美名を得しも、半島統治の實權は故帝室傭兵の總監ヘルヽ人オドアケル(Odoacer)の掌裡に歸せり。時に基督紀元四百七十六年にして、我　雄略天皇の御宇二十年に當り、伊太利亞半島の史は實に此に起れり。

オドアケルまたオドワケルといふ。此に於て部下兵衆の主たるのみならず、羅馬皇帝の半島攝政として伊太利亞王を兼ね、國中の地三分の一を部下の衆に班ちて耕耘せしめ、伊太利亞爲に小康を得ること十有七年。然るに是より先、東羅馬帝國の東北邊を擾りし東ゴト(Goth)は遂に皇帝を脅して伊太利亞侵略の許可を得、ゴト王テオドリク(Theodoric)黑海の濱ダニウス河畔より起り、四百八十九年半島に至り、連りにオドアケルの軍を破り、四百九十三年之を斬りて代りて半島に君臨し、公然一王朝を搬めて、また東羅馬皇帝の統轄を受けず、兵權をゴト人に與へ、貨權を伊太利亞人に假し、政廳を分ちて施政の公平を圖り、一時歐南新興諸國の主盟を以て威を地中海の西半に奮ひしが、奈何せん、北方の强族は南方の鄕俗に適せず、異教の猜忌は兩民族の和平を妨げ、テオドリク王殂落して、ゴトの强漸く銷磨せり。時に東羅馬に君臨せし英主ユスチニアヌス(Justinianus)皇帝、此機を察知し、將軍ベリサリウス(Belisarius)を遣して西征せしむ。初めゴトの衆少くして、半島の南半に及ばざりしかば、南部伊太利亞、シチリア島は歡んで皇師を迎へ、ナポリ陷りて、アブリア、カラブリアは東方の帝室に歸し、次で宿將ナルセス(Narses)ベリサリウスに代りてトチラ(Totila)、テイアス(Teias)二王に勝ち五百五十三年伊太利亞の東ゴト王朝終に滅び、半島は再び羅馬帝國の版圖に復し、コンスタンチノポリスの朝廷は羅馬

若くはラヴェンナに外藩王(エキサルク)(Exarch)、ビザンチオン帝國の州藩王の稱)を置きて之を統治せしめ、ナルセスを以て之に任ず。テオドリク王朝を掀めてより茲に至りて實に六十年なり。

伊太利亞半島は羅馬帝國の末造以來年と共に困弊せしが、近くゴト族の戰役によりて州郡愈荒廢し民人益疲勞せしに、一亂終りて外藩王の治僅に十五年にして、またロムバルド(Lombards)族の侵略に遭へり。ロムバルドは即ちロムゴバルド(Longobard)にしてチュトン種の一蠻族、善く長槍を用るを以て此稱ありといひ、或は長髯の美なるによりて名くといふ。初め北歐に起り、オデル、エルベ兩河の間に居り、後漸くダニウス河邊に下り、ナルセス將軍に從つてダニウス河南アドリア海に至る地を經略し、ゴトの別種ゲピデ(Gepidae)を防ぐ可き皇命を受け、今や東ゴト滅びて伊太利半島の北門防備なく藩王の力微なるに乘じ、其族酋アウドイン(Audoin)衆を將てパンノニアを横ぎりて西征の途を開き、其子アルボイン(Alboin)は驍勇善く鬪ひ、年少にしてゲピデの王子を斬り、次でアウドインに代りて衆を總べ、突厥種の西侵の鋒を避けて西に遁れ來りしアヴル(Avars)族を併せ、ゲピデ王グニムンド(Gunimund)を殺して、其女ロサモンド(Rosamond)を納れて、前に妃と爲さんことを約せしフランク王クロヰス(Clovis)の公主に代へ、乃父の遺志を紹ぎて伊太利亞に迫らんとす。偶伊太利亞外藩王ナルセス、事を以て帝譴に觸れ、羅馬帝室ロムゴバルドを刺嗾せしかば、アルボインは全族の男女老幼を擧げ、日耳曼スキチアの浮浪ノリクム(Noricum)パンノニアの土民を併せて西し、五百六十八年四月アルプスのユリアヴ嶺を超てフリウリ(Friuli)に入れり。時に新藩王ロンギヌス(Longinus)の治未だ久しからずして威武ナルセスに若かず、民兵疲羸して討攘の力無く、アキレイア(Aquileia)は門を開きて潰えヰチェンザ(Vicenza)、ヱロナ(Verona)、トレント(Trento)諸市は風を望んで靡き、當時リグリア(Liguria)の都城たりしミラノ陷りて僧正オノラッスはゼノヴに遁れ、アルボインは此に伊太利王の位に即き、兵を派してピアチェンザ(Piacenza)、パルマ(Parma)、モデナ(Modena)を降さしめ、進みてパヰア(Pavia)を圍むこと三年、衆を縱ちてツスカニア(Tuscania)を荒殘して羅馬に抵り、パヰア陷るに及びて入りて此に都す。斯くて東にはヱネチアの皇領あり、グラド(Grado)島のアキレイア法師長の隱匿所となれるあり、西にはアペンニネ山陰にクグクア諸市のミラ大僧正

の難を避けたるゼノワありて、皆下らざるも、北伊太利亞の沃土は一朝にして殆んどアルボインの旗下に屬し、ロムバルヂア(Lombardia)の名は終に長く後世に殘るに至れり。然れども雄略久しからず。五百七十三年六月アルボインはヱロナに於て妃ロサモンドの爲に弑せられ、衆バヂアに會して勇將クレフィス(Clephis)を擁立せしが、クレフィス殘忍にして、亦其下に弑せられ、諸將諸市城に割據して內互に權勢を爭ひしも、外同族の武を輝かして皇領を侵略し、ロムゴバルド主なきを十年に亘れり。東羅馬皇帝チベリウス其亂離の狀を聞きて恢復を志し、北の方フランクを誘ひて伊太利を伐たしむ。ロムゴバルド乃ち五百八十四年クレフィスの遺子アウタリス(Autharis)を撰び立てゝ王と爲し、フランクのシルデベルト(Childebert)を屈し、進んでスポレッム(Spoletum)、ベネヱンツム(Beneventum)、レギウム(Rhegium)に抵り、大にロムゴバルドの武威を宣揚せり。

此に於て半島の形勢を見るに、コンスタンチノポリス朝廷の外藩王は尙ラヱンナを本據と爲してポー河よりアンコナに至るアペンニネ山東の地を領し、威會、ロマニヤ(Romagna)及びペンタポリス(五城市、(Pentapolis)、リミニ(Rimini)、ペサロ(Pesaro)、ファノ(Fano)、シニガリア(Sinigaglia)、アンコナ(Ancona)の沿海の五市を總稱して斯く名く)に行はれ、アマルフィ(Amalfi)、ナポリ、ガエタ(Gaeta)諸公、羅馬府、サルヂニア(Sardinia)、コルシカ(Corsica)シチリア諸島は尙羅馬皇帝を陽尊し、嘗てフンのアッチラ大王の侵略を蒙りてパヅア附近の殘塊に遭ひ、アドリア海頭鹹湖の諸小嶼に遁れ、近くアルボインの侵伐、アキレイアの陷落に由りて更に移民の數を增したるヱネチアの民は最も篤く皇帝に歸服せりと雖も、何れも皆半島北方の沃土を掩有して新にスポレッム、ベネヱンツム兩公國を併呑せるロムゴバルド王國の强大に敵せざるなり。然るに北伊太利亞の强國たるロムゴバルドの衆は僅に一部の人士を除くの外、悉く非基督敎徒にして、基督敎徒を蔑惡し、靈域を侮蔑し、敎會寺刹を毀ち、羅馬の僧正は威信地を拂ひて皇帝指命の一僧官と爲り、命を藩王に聽くと雖も、皇帝、藩王皆僧正をも羅馬をも保護するの實力なく、唯僅にフランク人を煽搖してロムゴバルドを制肘せしめんとするのみ。昔は大帝國の首都たりし羅馬府の命運最も危し。此時に至り五百九十年グレゴリョ(Gregorio)撰ばれて羅馬敎皇と爲れり。敎皇(Papa)は素師父の義にして、後僧正の目と爲りしが、更に轉じて獨り羅馬の聖彼寺、寺の法嗣

にのみ限らるゝに至りき。蓋し羅馬にして若し尙皇帝の在るあらば此緇衣の英俊は寺院の門を出る能はずして敎皇自立の大地歩を作る能はざりしならんに、今や伊太利亞の形勢上の如く、世は俊傑を待つに際してグレゴリヨ出でしかば、敎界の元首權器を擁するの端こゝに發しぬ。グレゴリヨは先づ南の方スポレッム公と和を結びて後顧の憂を斷ち、次に北の方アウタリスの嗣ロムゴバルド王アジルゝフ(Agilulf)の南下を防ぎ、藩王爲す無く皇帝援けざる間に、自ら智勇を用て敎皇を半島政敎の中心と爲し、故アウタリス王の妃、アジルゝフ王妃テオデリンダ(Theodelinda)等に倚りて頻りに基督敎をロムゴバルドに宣傳弘通して伊太利亞人との交を篤くせしめ、一時殆んど其間の和平を致せり。然るに六百六十二年東羅馬皇帝コンスタンス(Constans)二世は朝臣の心を失ひ、西に奔りてタレンツム(Tarentum)に上陸し、ベネヱンツム公ロモアルド(Romoald)の領地を侵せしも、ロムゴバルド王グリモアルド(Grimoald)の來り救ふに會ひて利を失ひ、轉じて羅馬府に入り、留るを十有二日、亟も此舊都の爲に利を圖らず、却つて聖マリアの禮拜堂と變ぜし古萬神廟の銅屋以下諸種の珍寶貨財を奪ひ、シチリア島に奔りて其地に殺さる。斯くて西羅馬帝國滅亡以來ゴト、ロムゴバルドの攻略により、さては東羅馬皇帝の怠慢羅馬新敎皇の智勇によりて、將に絶へなんとして猶纔に一縷の命脈を維存せる羅馬伊太利亞と東方帝國との關係は後幾ならずして遂に斷絶するに至れり。即ち七百十八年東羅馬皇帝レオ(Leo)三世基督敎會の實踐せる聖母聖徒の像崇拜を禁じて、東方に毀像崇像兩派の大紛擾起りしかば、皇帝の威令及び難き伊太利亞にては、敎皇の威望敎界に重くして反抗の氣運旺に、敎皇グレゴリヨ二世は連りに皇帝と協議せしも、其効なく七百二十九年ロムゴバルドの眞主リウドプランド(Liudprand)の基督敎に改宗するや、敎皇は斷然皇帝と絶ちしが、リウドプランド羅馬領を蠶侵しラヱンナを拔くに至りて、敎皇はヱネチア人と連合して兵を會して之を克復し、轉に東皇帝が引きて以てロムゴバルドに當らしめんと謀りしフランクに通ぜんと欲し、ラヱンナ人は藩王を殺し所在の民衆皆敎皇に勸めて皇帝に背かんと競ひ起ち、グレゴリヨ三世法統を嗣ぎて遂にフランク公シャルゝマルテル(Charl Martel)と同盟を約し、東羅馬の水師海上颶風に遭ひて四散漂蕩して藩王を救ふ能はず、藩王は遁れて伊太利亞半島は茲に長く羅馬皇帝の手を離れたりしが、羅馬は猶ロムゴバル

ド侵略の禍を免れ得ざるなり。

七百四十四年ロムゴバルド王リウドプランド殂落し、子ラキス(Rachis)嗣ぎ、父王が教皇に返附したる諸地方を攻略せしかば、教皇ザカリア(Zacharia)の爲に挫かれ再び侵地を復せられ、加ふるに聖領侵掠の罪に由りてモンテ・カシノ(Monte cassino)寺内に緇衣の身となりて世を終れり。依て七百五十一年ラキスの弟アストルフ(Astolph)位に即きて兵を興して羅馬を伐ち、ナルニ(Narni)に抵りて使者を教皇に遣はし府中の蓄積を得、若しロムゴバルドと同盟を爲さゞるあらば各人に一ソルヂの税を課せんと威喝せしむ。時の教皇ステファノ(Stephano)三世、前皇の轍によりて商議を以て之を挫んとせしも効なく、敵兵府外に陣するに及び、圍を冒して外フランクに奔りて救を乞ふ。是より先フランク公シャルヽ、マルテルは教皇より能くロムゴバルドの禍を除かば推して羅馬の領主と爲すべしといはれしも、未だ招に應ずるの遑なくして薨じ、公子ピピン(Pipin)代り立ちてザカリア教皇の聖諾を得てメルヰング王朝のシルデリク(Childeric)三世を廢して自らフランク王と爲りしかば、此に七百五十四年ステファノ教皇の錫を飛ばして羅馬の急を告るに至りて、直ちに

大軍を興してアルプスの嶮を超え、アストルフ王をパヰアに圍み、其侵略せし諸王領諸公國の城地を教皇に献ぜんと約せしめて北に還る。然も其去るやアストルフ王約に背きて復羅馬を攻めしかば、ピピン王再び南伐して復パヰアを圍む。時にコンスタンチノポリスのコンスタンチヌス・コプロニムス(Constantinus Copronymus)皇帝の使者陣中に至りて、軍費を賠償してピピン王が徇略せし舊の皇領を復せんことを求めしも、ピピン王應ぜず、七百五十六年アストルフ王を屈するや、諸王領コマキオ(Comacchio)『五城市(ペンタポリス)』を得て羅馬教皇に上り、自ら羅馬府及教皇より羅馬緒紳(パトリシウス)の尊號を享けたり。かくて皇帝は空名を存するも毫も半島君臨の實なく、フランク王は羅馬の事に干與すと雖ども、身アルプス山外に在れば、此所領は實に今を距ること三十年前千八百七十一年)に至るまで連綿たりし教皇領土の基を開きしものにて、教皇俗權を有する此に起れり。

パヰア和約の後幾ならずしてロムゴバルド王アストルフ暴かに殂落し、内訌忽ち起りしが、デシデリウス(Desiderius)遂に位を得たり。デシデリウスの二王女はピピン王の二王子カルロマン(Carloman)カール(Carl)に嫁せしも、カールは子なきを以て

之を去り、兄カルロマンの薨後王國を簒ひしかば、カルロマンの妃は二王子とともに半島に遁れてデシデリウス王に投ず。デシデリウス乃ちロマニヤを荒して羅馬に迫る。教皇アドリアヌス援をフランク王カールに乞ふ。七百七十四年カール王兵を將て伊太利亞に入りエロナを取り、羅馬に入り、パヰアを陷れてデシデリウスの一族を捕へて領土を收め、更生祭を羅馬に擧行し、羅馬ロムゴバルドの舊法を存し、スポレト、プリウリ、ベチエントー諸公を安堵し、王子ピピンを留後の代官として、七百八十一年國に還る。ロムゴバルド王朝は始より此に至り總て二十一王、二百六裘葛を經て遂に滅びぬ。夫のコンスタンチヌス皇帝が『獨り羅馬府のみならず、西羅馬帝國の諸州縣は悉く羅馬教皇に讓る可し』と曰へりとの、有名なる僞說は蓋し此際に作爲せられしものなり。

七百九十五年レオ三世羅馬教皇に撰ばるゝや、府內朋黨相爭ひて穩ならず、教皇はアルプスを超にて北し、保庇をフランク王カールに求む。カール王乃ち伊太利亞に幸し羅馬聖院、聖彼得懺悔院を教皇に委托し、羅馬府旗を縉紳に授け、八百年基督降誕の祭日、聖彼得教會に於て王は教皇より黃金冠を受けて羅馬フランク人萬歲の歡呼に迎へられて羅馬皇帝の位に即き、西羅馬帝國滅亡以後三百廿五年を經て東西皇帝また對立し、伊太利亞は新羅馬帝國の版圖に入れり。此カール大帝即ち世に所謂シャールマンニュ(Charlemagne)なり。然れども半島に於ける大帝の領地は實にアルプス山よりテラチナ(Terracina)を限りてベネヱンツム公國は之に朝貢するも他は各自立の實を有し、ガエタ、ナポリの諸市府、シチリア、サルヂニア諸島、カラブリア、アプリアの邊陲は依然東方の皇帝を奉戴し、サラケン(Saracens)人はコルシカ、サルヂニアに寇し、ヱネチア服せずして王子ピピン之を征して水師を失ひ、憂憤病を爲して薨じ、四方諸州敢て動かざるは唯一時大帝の威望に服せるに過ぎず。故に八百十四年一月廿八日大帝崩じで皇子路易帝位を嗣ぐや、伊太利亞代王ピピンの庶子ベルナルド(Bernard)兵を起して爭ひ、八百十八年破れ誅せられて半島はフランク帝國に併せられしも、帝國の動搖已まず、八百四十三年ヱルドン(Verdun)條約によりて三大國に分裂するに至りて、北は北海より南は伊太利亞に至る狹長なる領土は羅馬皇帝の尊號とともに路易の長子ロタール(Lothar)帝に傳はり、次で八百五十年皇子路易二世國を承けてロムバルヂアの事を領知せり。

伊太利亞半島は戰亂に馴るゝを既に久しくして漸く君王の統治を甘んぜずして自尊獨立の氣風を生じ、彈丸黑子の地に據りて各自鷸蚌の利を爭ひ、却つて外人をして漁夫の益を占めしむるを慮らず。ナポリのベネヱンツムと爭ふや、當時亞非利加、西班牙、クレタ島を略して八百廿八年以來シチリアに據れるサラケン人を引きて助となせしより諸市諸州多く之に倣ひ、サラケン人之に乘じて南伊太利亞に寇し、アプリア、カラブリアを荒し、一たびカプアに破れしも、更に進略を試み、八百四十九年には羅馬府外に迫り、ナポリ、アマルフイ、サレント(Salento)諸市府同盟を結ぶに至りて、ガエタを退きしも、なほバリ(Bari)を取りてアドリア海を制し、鎭兵をガリリアノ(Galiglano)に屯して南方を剽略す。羅馬皇帝路易二世乃ち諸市の乞に依て來り救ひてバリを圍みしも、水師に非れば効なきを視て、サラケン人とイリリアに相拒げる東羅馬皇帝の將バシル(Basil)の水師に悪援を求め、八百七十一年海陸合擊してバリを陷る。而も帝威行はれず、バシルは幽死し、サラケン人はナポリ諸公に導かれて益猖獗を極めて羅馬殆んど危く、八百七十五年帝崩ぜしかば、敎皇ジョヴニ(Giovanni)八世、新に大器を傳承せしシャルゝ禿帝の援を求めしも帝動かず

已を得ずして貢賦をサラケン人に約して禍厄を免るゝを得たり。而も希臘人は此亂離の間に乘じてサラケン人の諸城を復し、ロムバルヂアを蠶侵し、北の方サレルヌム(Salernum)に及びて政廳をバリに置き、緡紳(パトリシウス)を司宰と爲し、後名を改めてカタバン(Catapan)といひ、千四十三年に至るまで東皇帝を奉じき。

初カール大帝(シャルゝマンニュ)の四方を經略併呑するや、統一の業に急にして新制を布かず、一に地方の舊習慣法を存守し、將吏を派遣して之に臨ましめ、在世の日四方の政令習法既に區々たりしかば、帝の崩ずるに當りて北伊太利亞には八君主ありて、爾後年を經るに從つて其侯伯僧侶各利害を異にして爭議紛々として起り、九世紀末に及びてフリウリ公、ツスカニア伯、ミラノ大僧正中に就きて最も勢權あり。八百七十七年シャルゝ禿帝崩じてバヴリアのカルロマン大統を繼ぎ、三年を經て其弟シュワビアのシャルゝ肥帝代り立ちてまたフランク帝國を統一せしが、その在位七年の間伊太利亞大に亂る。八百八十七年帝崩じて帝國また四分五裂し、伊太利亞には羅馬皇帝の正統絶へしを期として非獨逸帝說起り、國人皆以爲く「伊太利亞人は假令羅馬皇帝たるを得ざるも伊太利亞王たるを得可し」と。乃ち東フラ

ンク(日耳曼)が肥帝の甥アルヌルフ(Arnulf)を推撰して王と爲すや、フリウリ公ベレンガル(Berengar)はロムゴバルド人に推され、スポレト公グイド(Guido)はッスカニア伯以下の推すところとなりて位を爭ひ、八百九十四年グイド、皇帝及王位に即き、子ラムベルド(Lambert)を太子と爲す。アヌルフ王南下してベレンガルを助けしも暑熱を恐れて還りしが、グイド殂して、ラムベルド位を襲ふに至りて再び南征し、一兵を損せずして之を屈して、帝に即けり。而も幾ならずして八百九十八年ラムベルト殂し、翌八百九十九年アヌルフ崩じたれば、ッスカニア伯アダルベルト(Adalbert)は一たびベレンガルを立てしも、更らにブロヴンスの路易を招き、また之を廢し、二十年間に五帝相爭ひしも、實は皆外人にして伊太利亞人にあらず。加ふるに此頃北歐より起りて諸國を剽略せし北人(Norman)は羅馬の豐富を傳へ聞きて伊太利亞に入り詐謀を以てルナ(Luna)を、取り、ガリリアノ壘のサラケン人も亦羅馬を脅かさんとして、九百十六年教皇ジョブニ十世の爲めに破られ、ベレンガルは匈牙利のッラニア種マジャール(Magyars)族を招きて掠略を擅にし、ッスカニア伯の女にしてイヴレア(Ivrea)侯の未亡人たるエルメンガルデ(Ermengarde)貴族を糾合して之を

除き、ブルグンヂアのルドルフ一時王位を得しも、エルメンガルデ及ッスカニア侯グイドの異姓の同胞たるブロヴンス伯ユゴ(Hugo)親姻諸大家の後援を恃みて之を爭はん爲に九百二十六年ピサ(Pisa)に至る。時恰も教皇史上の最汚濁の世にして、賤婦マロジオ(Marozio)全府を左右し、自らユゴの妃となりしも、府民は拒みて納れず。ユゴ已むを得ずして聖アンゼロ城に治す。マロジオの子アルベリク(Alberic)之を逐ひ、其歿後子オクタヴアヌス府の執政と爲り、次で教皇と爲りてジョヴニ十二世と號し羅馬に君臨せしかば、ユゴ王は府外の地を掩有して暴威を逞うし、王權を弄して寇略の慾を恣にす。その姪イヴレア侯ベレンガル爲に禍に遭はんとせしも辛じて獨逸に遁れて志士を集め九百四十五年伊太利亞に入りてユゴを退け、子ロタールを立てゝ自ら宰相と爲り、次で九百五十年ロタールを弑して自立し、己の子の爲にロタールの美姫アデルヘイド(Adelheid)を納れんとして成らず、之を幽閉虐遇す。アデルヘイド乃ち奔りてカノッサ城に圍まれ、之を獨逸に訴ふ。オットー大王依て南征の師を興して至り、ベレンガルを破り、パヴアを取り、親らアデルヘイドを冊して妃と爲す。然れどもベレンガルは機を見て早く降りしかば誅を免がれ皇

帝の名によりて依然その舊地に君臨せり。時に九百五十一年なり。かくてオットー大王北に還り、父ハインリヒの遺業を紹ぎてマジャール人を征し、大に之をレヒフェルド(Lechfeld)に破りしが、此間にベレンガル逆威を奮ひ伊太利亞再び動亂すと聞へしかば、九百五十七年王子ルドルフを遣はしたるに、幾もなくして薨じたれば、九百六十二年二月大王親征して伊太利亞に入り、ベレンガルの職を奪ひ、ミラノに於て伊太利亞王の鐵冠を得、次で羅馬皇帝と爲り、伊太利亞帝王の亂此に一たび局を結び、爾後獨逸王は必ず伊太利亞王位にミラノに即き、羅馬皇帝の位に羅馬に即くの先蹤を爲せり。

抑十世紀に於けるフランク諸王の寛容政策は教會を腐敗せしめ、帝權を削殺し、僧侶人民、朋黨を結びて羅馬教皇の選擧を私するに至り、九百十四年ジョヴニ十世の情婦テオドラ(Theodora)其子ジョヴニ十一世を擧げしめ、ジョヴニ十一世の弟カメリノ(Camerino)のアルベリク事を用ひ、其子ジョヴニ十二世と爲る。而して羅馬帝、伊太利亞王の空名たるや久しきも、此空位をして伊太利亞諸公伯の手に歸せしめば、半島猶賴りて起る可かりしに、今や皇帝の名は其實に伴ふに至りしと共に主權は外人の手に歸し去れり。加るに皇帝オットーは教皇ジョヴニ十二世を廢し、レオ八世を擁立して羅馬を左右せしかば、羅馬府民の企圖は朋黨の志と皆水泡に歸せり。然れども帝は更に南方伊太利亞征服の爲に東羅馬のローマノス皇帝と兵を搏へ、次で和を議して皇子オットーの爲に、東羅馬の皇女テオフアノー(Theophano)を娶りしかば、九百七十三年オットー二世位に即きて後は南方伊太利亞の經略は意に任せず、クロトナ(Crotona)に破れて、東帝國の威强く、ベチエンツム公國は分裂し、夫のテオドラと教皇ジョヴニ十世との後胤羅馬の執政クレセンチウス(Crescentius)は巨萬の資を擁して聲望高く、オットー帝の不在に乘じて府民を煽動して自治政府を建設せり。九百八十三年オットー三世父に嗣ぎて帝位に即き、從兄弟を立てゝ教皇グレゴリヨ五世と爲す。クレセンチウス之を府外に逐ひジョヴニ十六世を立つ。九百九十六年帝復伊太利亞に入り、傅ゲルベルト(Gerbert)を立てゝシルヱステル(Silvester)二世と爲し、クレセンチウス及其黨十二人を聖アンゼロ城に捕へて之を誅し、その建搦せし自治政府を覆滅し、父帝よりは西帝國母后よりは東帝國の統治權を併せ得たりと號し、希臘の貴姫を納れて后と爲し、羅馬府に都して天下を統一せんとす。而も

禍は蕭牆に起り、千零二年帝年二十又五にして故クレセンチェンチウスの寡婦に毒弑せられ、雄圖中道にして空しく、羅馬府と羅馬教會はまた自治を復せり。

繇つて當時伊太利亞の內情を見るに、嘗てロムゴバルド人始めて此土に封建組織を施し、次でフランク人の入寇によりて此組織著しく發達し、カール大帝以後皇帝諸王紛爭の間に益〻盛んに、諸方に城壘堡塞起りしが、サラケン・ノルマン・マジャールの諸族剽略を逞うするに及びては、之を防ぐ爲に古壘破塞を修復再興し、工藝を勸めて富資を蓄積し、兵勇を養ひて自衛を忽にせず、諸公侯伯高僧兵食を足して內士民を統御し、外攻略の徒に備へしかば、北伊太利亞に於ける社會上下の組織は年と ともに解崩して、諸市村落領邑の自治獨立益〻發達し來りしが、今やオットー三世崩じて帝位を承くる者なくして其勢頓に揚れり。ロムバルヂアの貴族はイヴレア侯アルドイン(Ardoin)を推し、古都パヰアの民之に應じて、以て伊太利亞王と爲せば、ミラノは日耳曼王ハインリヒ二世を奉じて之と爭ひ、アルドインは僧院に隱れて千十五年に殂し、ハインリヒは峻厲にしてます〳〵敵心を激せしが、千二十四年殂するに臨み、子莫きを以てワイベリンゲン(Weibelingen)のコンラッド(Conrad)を擧げて後嗣と定む。伊太利亞國民黨は此を見て王冠を佛蘭西王ロベール(Robert)に捧げしも受けられず、更にポアト(Poitou)伯に呈せしも亦拒まれ、之に反してコンラッドはミラノ大僧正エリベルトに迎へられて伊太利亞王と爲り、僧正を奉ずる諸市は皆獨立し、ミラノは轉た強大と爲り、エリベルト僧正は領內の諸小貴族と戰ひ、始めてカロチョ(Carroccio 長竿頭に基督磔架の章ある二小白旗を飄へして車上に樹てたる神聖なる旗車)を用ひ、諸市亦之に倣ひ、僧正貴族の內訌紛爭各地に傳波し、千三十七年コンラド王は采邑は必ず父子相傳たる可しと宣裁せしより小貴族益〻自主獨立を企て、次でハインリヒ三世、帝コンラッドに代りて千四十六年伊太利亞に入るや羅馬に三教皇鼎立して相爭ひ、ミラノは戰塵の區となりしも、帝捨てゝまた顧みざりき。

北方伊太利亞諸市府獨立の氣斯く旺なる間に、南方伊太利亞は頻に北人(ノルマン)の侵略を蒙れり。千零十年浮浪の北人(ノルマン)はサレルノの一貴紳ガイマル(Gaimar)を助けてサラケン人と戰ひ、次で希臘の反賊メロ(Melo)に從て沿海を脅迫し、之を用ひて東方興隆の勢を削がんと志せるハインリヒ二世皇帝よりアプリア移住の許可を得しか

ば、北人(ノルマン)の衆は直ちにアヱルサ(Aversa)に據る。然るにカタバン・マニアケース(Maniak-es)は却て此北人を誘ひ、千三十年ローマノス皇帝の爲にサラケン人を伐たしめてシチリア島の大半を略取す。既にして北人(ノルマン)はカタバンと合はず、各貴紳を撰びて主將と爲し、忽ち去りてアプリアを降したり。羅馬教皇レオ九世はハインリヒ三世帝に撰拔せられ、僧職賣買、僧侶妻帶に關して嚴禁を布き、爲に教界の大波瀾を惹き起せし有爲の偉材なれば、北人(ノルマン)の憂斯く大なるを見て、ハインリヒ三世、コンスタンチヌス十世に請ひ、相助けて此强夷を攘はんと爲せしも、兩帝應ぜず。教皇依て親ら、伊太利亞、希臘、シュワビア聯合軍を組成して北人(ノルマン)を伐つ。千五十三年北人(ノルマン)の將キスカルド(Wiscard)之をチヂテラ(Civitella)に邀擊して勝ち、教皇を擒にし、アプリア、カラブリア、シチリア徇略の許可を得て、之を擧げば悉く教皇領と爲さんことを約し、次でキスカルドは征略の歩を進め、教皇ニコラス二世より伯爵を授けられ、キスカルドの弟ロゼル伯はシチリア島を降し、千七十一年パリ陷りて半島内の東帝國領終に亡び、シチリア王國の基源此に開けたり。

羅馬教皇レオ九世が教界の汚習弊風を刷新して教會の勢力を振興せん爲に賣職妻帶の禁を布きて物議紛出せしより、内訌已まずして終にグレゴリヨ七世に至り、一轉して教會、教皇と皇帝との反抗と爲れり。皇帝ハインリヒ三世殂落の際羅馬政令の大權を掌握せしは敏腕大略ある副法教師ヒルデブランド(Hildebrand)なり。ヒルデブランドはツスカニアのソアナ(Soana)の產、鋭意勵精悉く俗界君王の容喙干渉を謝絶し、宗教を以て人間世界無上の權勢を作らんと志し、僧侶にして妻を帶ぶるは姦せる者なり、官職采邑を君王に受くるは職位を賣買する者なりと爲し、悉く之を嚴禁せんとす。蓋しレオ九世の時既に此禁令に由りて僧侶の教皇に絕つ者、君王の教皇と背く者を生じたるも、尙ほ叙任令(investitura)によりて僧正僧徒の黄金位職を受け、献賦を上りて先世の官務を襲ぎ、法官教職皆領土采邑の授受と異らざりしが故なり。千七十三年ヒルデブランド教皇の位に即きてグレゴリヨ七世と號し、此汚穢濁辱の習風を慨し、千七十五年叙任令否定の宣を發したり。以爲く『俗界は教界よりも劣り、皇帝は教皇よりも賤し、見よ日耳曼王の羅馬皇帝と爲るは教皇の加冠に因るにあらずや』と。是に於て皇帝の黨は以爲く『教皇は皇帝管下の一教職に過ぎず、其廢立皆諸帝の意に任せしを以て證す可し』と。乃ち教俗

兩界の元首此に相爭ひしが、此時に方り教皇の威令は實に驚く可きものあり。西班牙半島は羅馬教會領として要求せられ、サルヂニアは服し、佛蘭西は屈し、英吉利には彼得錢(ピーターズペンス)の賦課ありて匈牙利、露西亞の邊陲に至る迄羅馬正教派僧侶の言行を重しと爲せるに、獨逸皇帝ハインリヒ四世獨り反抗し千七十六年ヲルムスの僧正會議にてグレゴリヨ教皇の免黜を宣言せしむ。教皇依て皇帝を破門し、聲援をサクゼンの叛徒に與へ、獨逸の諸侯又は帝若し幷年にして破門を赦されずば貶位と認む可しと議決せしかば、帝も遂に屈し、千七十七年一月伊太利亞に至り、降雪の裏に跣足にてカノサ宮門に立ちて食を斷ちて哀を請ふこと三日三夜、始めて謁を賜ひ赦を得たり。蓋し當時ッスカニア女伯マチルダ(Matilda)は資力を傾けて教皇を助けしも、ミラノ、ラヱンナ以下ロムバルヂアの諸市地方はグレゴリヨの峻厲嚴酷を惡みて、却つて皇帝を憐み、獨逸の不平黨はシュワビアのルドルフを擁して王と爲せば、皇帝はラヱンナのギベルト(Guibert)を立てゝ新教皇と爲し、教俗兩界の君主復相爭ふ。既にしてルドルフ敗死し、千八十年皇帝南征してマチルダの衆をマンチュアに擊破してフロレンヂア(Florenzia)(即ちフィレンゼ(Firenze))を脅かし、進んで羅馬を圍むこと三年。東羅馬帝國のアレキシオス帝は教皇が北人(ノルマン)を引きて助と爲すを視て、軍資を帝に贈りて聲援し、羅馬府は陷り、千八十四年基督復活祭前の日曜日を以てグイベルトは教皇クレメント三世の尊號を冒し、ハインリヒは其手より羅馬皇帝の冠を得たり。然れども剛愎なるグレゴリヨ七世は聖アンゼロの堅壘を嬰守して降らず。北人(ノルマン)の首魁キスカルド伯は東羅馬の皇師を破り至りてグレゴリヨを救ひ羅馬府に入り、府民の反抗を憤り火を市街に放ち、剽略を擅にし、千八十五年グレゴリヨ七世はサレルノに崩ぜしも爭抗尚ほ已まず。君牧師會は相次で幷ットリヨ(Vittorio)三世、ウルバノ(Urbano)二世を撰び、ウルバノ二世は陋劣にもマチルダ女伯と謀り、ハインリヒ帝の皇太子コンラッドを說服して伊太利亞王と爲して父帝に反かしめ、且恰も此際全歐基督教徒の心を震蕩したる十字軍の說教に由りて四民敬崇の心を煽舞して帝の造惡を數へ罪し、千九十九年ウルバノ教皇崩じ、パスカリス(Paschalis)二世代り、皇太子コンラッド薨ずるや、千百零四年其弟ハインリヒ皇子をして亦父帝に反かしむ。然も破倫の策功を收めず、千百六年皇帝ハインリヒ四世は皇子ハインリヒの虜と爲り、內憂外患を病みて崩じ、皇子後を繼ぎて帝王の

位を襲ひ、ハインリヒ五世の尊號を冒すや忽ち教皇擁護の方針を一變して、獨逸貴族を糾合し、大衆八萬を發して南伐し、プロンチャのマチルダに迎へられ、千百十一年羅馬に至り教皇、君牧師、貴族を虜にし、バスカリス二世に迫りて叙任權を解きて己を皇帝と爲さしむ。而も帝の去るや四方並び起り、ロタリオ公亂をサクセンに起し、獨逸不平の黨徒帝の專制に抗して屈せず、マチルダ女伯斃じてマンチュアよりピサ、ピサより羅馬府門に抵る大領邑は教皇領に歸し、帝は之を爭ひてツスカニアに入りて其地を掩有せしが、千百廿二年に到り、ヲルムス盟約成りて、教皇カリクツス、皇帝ハインリヒ相和し、皇帝は叙任權(インヴエスチナチユラ)を拋ちて僧侶の自由撰擧權を認諾し、教皇は獨逸教會の寺領を皇帝より受け、實際に於て國家教會たるを許可して帝王の權を認めたり。斯くて嘗てカール大帝、オットー大王、ハインリヒ三世が羅馬教會の上に加へし帝權は此に於て全く地に墜ち、教皇獨立の實擧り、教權隆昌の端發し、戰亂の間に自主自立の氣を養ひて相攻伐せる伊太利亞の諸市府が敵愾の心はやがて連合外に當るの因漸を爲せり。此會盟の後幾ならず、千百二十五年五月ハインリヒ五世皇帝はウトレヒト(Utrecht)に崩じぬ。

第三章　諸市府の勃興

(千百二十五年乃至千二百五十年)

諸市府の勃興。ゲルフ、ギベリン黨の起源。羅馬府民自立の企圖。フリードリヒ紅髯帝と北伊太利亞諸市府。兩教皇の對立。ミラノの沒落。紅髯帝の再征。ロムバルヂア同盟。クリスチヤン大僧正の南征。紅髯帝南征の失敗。諸市府自治の基礎成る。帝室の衰亂と伊太利亞。貴族と市府、及び其黨爭。ゼネチアの隆運。フリードリヒ二世、伊太利亞の抗爭三十年。

前後六十年に亘れる叙任令(インヴエスチナチユラ)問題の役は伊太利亞國內上下諸般の綱紀を壞り、諸公伯の或は皇帝に、或は教皇に歸叛向背する、皆各政教の利害より打算して一定の節無く、互に攻伐を恣にせる間に獨立自尊の念を生じ、市府士人の眼中には羅馬帝國なく、伊太利亞王國なく、唯市府の安危利害あるのみ。而して此等の市府には民庶の撰擧せし二員以上の執政(Consul)ありて、內裁斷を掌り、外兵馬を總ぶ。市兵は

各地方に旗手(Gonfaloniere)ありて之を統率し、上に基督の像を描きし白旗を樹てたる牛車カロチョには前方に祭壇ありて僧徒祈禱を爲し、後方に將座ありて、一軍の進退を號令し、兵衆は貴族門閥は騎兵、他は悉く歩卒たり。市政はコンシリオ・デ・クレデンザ(Consilio di Credenza 親任會議)と稱する小議會ありて、法政を議し財務を掌り、市門の關税を徵し、別に新法律案を議決する大議會ありと雖も、大事を裁決する最高權は市民に在りて存し、一旦緩急あれば警鐘を鳴らして公會場に集議し、執政、親任議員の選擧指定も亦此に決す。市民は又協戮して壘壁、濠塹、層樓、衛門を作り、沿海の諸市にては港灣、埠頭、運河、税關を造り、市吏の公宅、獄牢、寺院を營みて偉大壯美を誇れり。

蓋しロムゴバルドの北伊太利亞の地を略するや、沿海阪隅に據守して降らざりしもの、アドリア海頭のヱチチア、ポー河南のラヱンナ、リグリア山下のゼノヴ、アルノ河口のピサあり。此外羅馬、ガエタ、ナポリ、アマルフィ、バリの如きあり。或は一時之に降りしも時久しからずして自立し、皆城壘守衛を失はずして、古羅馬時代の文化其裡に蟠れ、資産あり、氣慨ある者四方より此等の城市に集りて、蠻夷の跳梁に抗敵し、東羅馬皇帝はコンスタンチノポリスに居りて、此等の古城市を目して伊太利亞州郡と認めて、藩王、公伯、カタバン等以下吏員を派せしも、武力資實の之に伴ふなかりしより漸く其自治に放任し獨立を默過し、唯皇傾の空名を存するを以て足れりと爲すに至る。就中ヱチチア、ガエタ、ナポリ、アマルフィは諸の他市に比して公然自立の面目を示せり。抑ヱチチアは四百五十二年フンのアッチラ大王が半島侵略以來バヴァ、ポチェンツァ、ヱロナ、トレヴゾン以下ヱチチア地方の諸市民難を海隅の洲渚に避けしより起り、宗教の差異に因りて東ゴト、ロムゴバルド諸族と敵峙して降らず。六百九十七年に至り諸嶼州間の猜忌を避くるため始めて府長(Doge)を置き、八百九年ピピン王と爭ふに及びてリアルト(Bialto)島に共和政治の府廳を開き、九百九十七年イストリア(Istria)、ダルマチア(Dalmatia)の小市を連合服屬し、ナレンタ(Narenta)、クロアチア(Croatia)の海盜を馴くし、爾後府長はヱチチア、ダルマチア公と稱せり。若しチベル河外の地に至りては上伊太利亞に比して外人の侵略を蒙ること少かりしも、尙は五百八十九年ロムゴバルドの入寇を受けて、此にペヂヱント大公國起れり。此公國はバヴァの王朝とは獨立して彼の傾倒覆滅の禍を受けず、善く

フランク諸帝に當りしが、八百三十九年内訌起りて分裂し、ベチエント・サレルモ・カプアの三共和國と爲れり。初めナポリ・アマルフィ・ガエタは地中海上の要津にして東方貨物の歐州に入るもの、多く其途に上りしに、北人の剽略によりて皆衰頽し、ヱチチア・ピサ・ゼノヴ等之に代りて起る。かくて後ヱチチアは尙ほ西方皇帝に歸服せず、伊太利亞の諸地方と分離して東羅馬のアレキシオスコムネーノス (Alexios Comnênos) 皇帝と連合し、水師を興してアドリア海上に遊弋し、ギスカルド伯の侵略を防ぎ、ピサの艦隊は十一世紀の始めサルヂニア島裡のサラケン族を逐攘して此土に殖民を掠め、更に百年の後バレアル (Balear) 島を取れり。千九十九年十字軍の起るに及び伊太利亞沿海諸市は東方の貨物を轉輸して、ライン河に由りて、販路を歐羅巴大陸に開き、蓄積豐富益繁昌を來たせしが、十二世紀に入りて、ヱチチア・ピサ・ゼノヴの三市府はレバント灣ボスポロス海峽の海上權を失ひ、就中ピサは殆ど一百五十年間最も勢力を逞うしたりしは當代の遺物に徵するも想見するに餘りあり。然りと雖も沿海内地の市府が斯く勃興して、其大者は小者を併せ、小者は連衡同盟して大者に當り、幾ならずして所謂自由獨立を唱へし府民市人は寡頭專制の僭主政治の下に屈するに至る。情勢の經路將に說かんとするところに觀る可し。

千百二十二年、ヂルムス會盟ありて羅馬教皇は皇帝の管下を脫せしも、伊太利亞半島は北强の風動を免るゝ能はず。ッスカニア女伯マチルダは晩年ハインリヒ皇帝に抗敵せんためにバイエルン公エルフ (Welf) と結婚す。女伯斃じ、帝崩じて後、エルフは獨逸撰侯と與にサクゼン公ロタールを奉じて皇帝と爲さんとす。羅馬教皇亦之を助く。然るにホヘンスタウフェン家はフリードリヒ皇帝ハインリヒ四世の駙馬と爲りてシュワーベン(シュワゼア)公に封ぜられし以來、つねに皇帝を助けて教皇の敵たりしかば、今やロタール帝を承認せず。シチリア王ロゼル (Roger) 二世はアナクレト (Anaclet) を立てゝ教皇と爲し、時の教皇インノチェンツ (Innocenzo) 二世に敵峙す。ホヘンスタウフェン家は素ワイブリンゲン (Weiblingen) 村より起りしを以て、伊太利亞にて轉訛して、其黨をギベリン (Ghibelin) 黨と呼び、エルフの與徒をゲルフ (Guelf) 黨と名く。中世有名なる兩黨此に起る。而してロタール帝は伊太利亞に入りインノチェンツ教皇より帝冠を得、ロゼルを伐ち、還りてバイエルンに崩

じ、シヴーベン公フリードリヒ一世の子にして同二世の同胞たるコンラッド皇位を襲ぐ。シチリアの北人其間に蜂起して教皇インノチェンツォを虜にして之と連りて新帝に抗す。帝よりて婚を東羅馬皇帝マニュエルに通じて教皇に當る。

時にブレッシア(Brescia)に雄辯の僧アルノルド(Arnold)あり、僧侶の奢侈、教皇の俗權を弄するを憤り古羅馬の自由を説くアベラルド(Abelard)の門下に出で、頻に自主獨立の説を鼓吹して民庶を煽動し、ロムバルヂアを風靡し、千百四十六年放逐せられてチュリヒに遁れしも數年を出でずして復羅馬に還りて改革を唱ふ。府民其説に感じ其言に聽きて教皇政治を排斥し議院を組織して古羅馬の共和政を復せんと志し、カール大帝の先例によりて、コンラッド帝を羅馬緒紳(パトリシオト)と爲して、その保護を請ふ。教皇之を恐れ、頻に書を帝に致して府民の亂を鎮めんとを請ふ。適帝多事にして伊太利亞を顧るに遑なかりしかば羅馬府民は國人ジョルダノ(Giordano)を擧げて緒紳と爲し、アルノルドを謀主と爲す。既にしてコンラッド帝崩じ、千百五十二年フランクフォルト(Frankfort)の獨逸議會は皇姪フリードリヒ紅髯(バルバロッサ)(Friedrich Barbarossa)を撰び立てゝ位に即かしめ、紅髯帝は伊太利亞半島を目して臣僕と爲し、其意に逆ふものを謀反の徒と爲し、ギベリン黨を助けてゲルフ黨を鎮壓せんとす。蓋し此時北伊太利亞諸市の形勢を見るにミラノは實に半島ゲルフ黨の本據にして、トルトナ(Tortona)、クレマ(Crema)、ベルガモ(Bergamo)、ブレッシアは、ピアチェンザ、パルマを連合し、パヴィアはクレモナ(Cremona)、ノヴァラ(Novara)と連衡して雄を之に競ひ、ヴェロナ、パッヴァ、ヴィチェンザ、トレヴィソ、マンチュアは皆對峙して相降らず、トリノはピエモンテの諸市を率ゐてサヴォイア伯に抗し、封侯の大なるものにはモントセラト(Montserrat)侯、アスチ(Asti)皇あり、ポー河南にはボロニャ大に興りて西、モデナ(Modena)、レチオ(Reggio)を制し、東フェラ(Ferra)、ラヴェンナ、ファエンザ(Faenza)、フォルリ(Forli)、リミニを從へ、ッスカニアにはフィエソレ(Fiesole)荒廢してフィレンゼ興り、ピストイア(Pistoia)、アレッゾ(Arezzo)、サン・ミニアト(San Miniato)、ヴォルテラ(Volterra)、ルカ(Lucca)、コルトナ(Cortona)、ペルジア(Perugia)、シエナ(Siena)の諸市と合從し、皆城を高くし塹を深くし兵食を補足して一び得たる自由獨立を維持せんことを力む。千百五十四年紅髯帝伊太利亞に征き、大に諸公伯をロンカリア(Roncaglia)に會せしに、年久しく皇帝の威威を見ず、專ら各自の紛爭に馴れし北伊太利亞の諸市府は自立の氣旺にして皇帝問題を提起し、ロディ(Lodi)、

コモ(Como)はミラノの不法を此會盟に訴へ、パヰアも亦その同盟トルトナの爲に窘迫せらるゝを云ひ、帝もミラノが皇軍に資糧宿舍を給せざるを憤りて、アスチ、キエリ(Chieri)を壞ち、トルトナを燒きて民衆をミラノに奔らし、パヰアにてロムバルヂア王の鐵冠を戴き、進みて羅馬に至りしも入府を拒まれ、府外に於て教皇アドリアヌス四世より皇帝の黃金冠を受け、アルノルドを死に處せしめ、スポレトを略奪して北に還り、諸市は自由を失はざりしも、羅馬府民自立の企圖は水泡に歸し、ミラノ、パヰアのゲルフ、キベリン兩黨の爭亂は尙ほ熄まざりき。

斯くて羅馬府民復古の志酬ひずして、古都城は政教兩界の君皇に屈せしも、兩皇各無上の主權を掌握せんの意あれば、爭は此に免れ難し。教皇は皇帝が女伯マチルダの遺領を併すを聽るさず、インノチェンツオ二世の先蹤を追ひて、北人王(ノルマン)キリアムと結托して之に教皇領を護らしめ、東羅馬帝と連和して皇帝より自立せんと企て、千百五十九年アドリアヌス教皇の崩ずるや、羅馬教會はアレッサンドロ三世を、獨逸帝黨はキットリオ四世を立てゝ教皇と爲し、兩教皇は互に敵黨を破門と宣し、基督教國は兩教皇の下に分裂し、ロムバルヂア諸市の亂其間に起る。獨に紅髯(バルバロッサ)帝の南征するやミラノは之に屈せず。パヰアはもとロムゴバルド王國の舊都にして、固より帝王の黨なれば、他のミラノの隆盛を忌める諸市と皇師を助けて、千百五十八年ミラノを圍み其糧道を絕つ。府中大に苦み貴族ブランドラテ(Blandrate)其間に立ちて調停を試み、九月七日ミラノは皇帝を入れず、自ら執政を撰ぶも、帝權を認め貢賦を輸す可しと約し、トルトナ、クレマ二市亦之を諾せしに、數週の後ロンカリアの伊太利亞會議は更に皇帝の利を伸べしよりミラノ府民憤慨して復干戈を執りて起ち、再びボロニヤに開きし會議はミラノを帝領と宣せり。時恰も千百五十九年の春なり。紅髯(バルバロッサ)帝乃ちクレモナ人の言を納れてクレマを圍みしに、クレマ善く防ぎ戰ひて降らず、渺たる小城池を以て大軍に抗敵すること六ヶ月の久しきに亘り、千百六十年一月城中食盡きて始めて降りしも、皇師之が爲に老ひ、ミラノは稍陷落の期を緩め得たり。然れども大勢遂に挽へさず、長圍三年の後、千百六十二年三月ミラノ終に降り、首魁幸に誅殺を免れしも、城池は荒壞せられ、其名は沒せられたり。而して北方の帝威斯く旺盛なるのみならず、南の方シチリア國內に訌亂起りしかば、伊太利亞半島復羅馬教會の爲に勤め、教皇アレッサンドロ三世の爲に義を唱ふる者莫く、教皇位

を保つ能はずして西北佛蘭西に出奔せり。

勢此の如きを見て紅髯帝(バルバロッサ)は伊太利亞は悉く帝威に服せりと爲し、ミラノ陷落の翌千百六十三年兵勇を從へず、貴族を從へて半島を巡幸せしに、エロナは堺隈の井チェンツ、バッア、トレ井ソと同盟して帝に背く。帝大に怒き、兵をパヂア、クレモナ、ロヂ、コモ等ギベリン派の諸市に徵して之に當らしめんとせしも、自由獨立の氣風大に揚りて諸市命に應ぜず。帝已むを得ずして北に還る。適〻教皇ヰットリオ四世崩じクレマのギド(Guido)繼ぎて法統を傳へバスカリス三世と爲るとともに、伊太利亞派のアレッサンドロ教皇は佛蘭西より歸りて羅馬に入りしかば、半島悉く帝に叛く。帝よりて千百六十六年十月新募の兵を率ゐてグリソン(Grisons)の山路より出で〻南征し、從來ロマニヤ、ツスカニアの反抗少かりしを信じて中央伊太利亞に至れば、此にも自由自立の氣熾にして、東羅馬皇帝マヌエル、コムネーノス(Manuel Comnênos)アンコナに勝ち、紅髯帝(バルバロッサ)從つて之を圍みしも功無く、進んで羅馬に向ふ。エロナ堺隈の同盟諸市府は帝の來り攻めずして直ちに南に向て横ぎり去るを見て、千百六十七年四月上旬クレモナ、ベルガモ、プレッシア、マンチュア、フェラヽの使節ポンチダ(Pontida)に會して、擅に帝師に加はりてミラノ府を破毀したるクレモナ市率先首唱してミラノ府の復興を說き、此月二十七日工を起し數週にして新ミラノ府を興し十二月に至り諸市ロムバルヂア同盟を組織し、エネチア、プラッェンツァ、バルマ、モデナ、ボロニヤ等皆これに應ず。帝此間に羅馬軍を破りて火を府中のサンタ、マリア堂に放ち教皇アレッサンドロを走らせしも、八月天暑く熱酷くして陣中疾疫行はれ、數週を出でずして諸公將師騎步多く斃れたれば、且退き且戰ひて初志伸びず、千百六十八年三月殘兵を率てアルプスのチェニス峽より國に還る。よりてロムバルヂア同盟の勢益〻揚りて伊太利亞を風靡し新にタナロ(Tanaro)、ボルミダ(Bormida)兩河合流の地を相して一市を搬め、教皇の尊號を採りてアレッサンドリアと名け、諸方の民を此に移殖して、以てギベリン黨の本據パヂアを控制す。蓋し紅髯帝(バルバロッサ)は前代諸帝と異りて最も心を伊太利亞の制御に用ひ、力を費し財を靡し、日耳曼人の名利一に此に繫ると爲せしも、屢〻志を失ひしかば、今や國人は征旅に倦みて帝の意に從はず、加ふるに國中事多くして南下の遑莫し。帝乃ち大宰相マインツ、大僧正クリスチャンを攝政と爲して伊太利亞に遣はす。クリスチャン、ロムバルヂアに至りて事の成り難き

を看破し、尚ギベリン黨の多きツスカニアに入り、東方貿易の競手たるゼノワ、ピサ兩共和府の交好を圖ると號し、千百七十三年七月ピサの執政を捕へて獄に投じ、又フィレンゼの執政を捕へ、甘言を以てルッカ、シエナ、ピストイアの執政、ツスカニア、ロマニヤ、オムブリアの貴族を誘ひ、其衆を併せて翌千百七十四年四月アンコナを攻む。アンコナはロムバルヂア同盟中の最南に在りて、市民一萬二千、海角に據り通商の利を以て富殷の名あり、今クリチャンの圍を受けて城中糧道絶え、雜草介魚より商品の革皮を喫し、或は母の子を殺して士に食はしむるに至りしも屈せず、終にフェラヽ、ロマニヤの援軍至り、クリスチャンの軍戰はずして退き、始めて安きを得たり。然るに五年間南下の機を得ざりしフリードリヒ紅髯帝は此年十月大兵を率ゐて復伊太利亞に臨み、スツアを燒き、アスチを降し、アレッサンドリア新市の泥壁完からざるを嘲り、「アレッサンドリアの藁城」(Alessandria della paglia) 一舉馬蹄に蹂躙す可しと曰ひて之を攻む。市民勇鬪善戰、攻圍四ケ月に亘りて降らず。千百七十五年ロムバルヂア同盟の援軍至り、帝圍を解きてパヴィアに退く。諸市皇帝の尊を憚りて敢て迫らず。帝も亦漸く諸市の侮り難きを思ひ、六委員を命じて和を議せしめしが、前世列皇の威權を持續せんとする帝の意は、從來の屈辱を雪がむとする諸市と合ふ可くもあらず。翌千百七十六年の春新徽の獨逸軍グリソンより出でゝコモに至りて皇師に會し、五月二十九日ミラノを距る六七里なるリニヤノ (Lignano) に於て同盟軍と戰ひ殆んど勝ちて敵のカロッチ"に迫りしに、ミラノ軍の精銳九百の決死隊奮鬪激戰して終に皇師を破り帝僅に身を以て遁れてパヴィアに入る。後敗報を聞きて帝崩ぜりと爲せしにてその大敗を推す可し。故に帝も到底和議の已むを得ざるを悟り、千百七十七年三月中立地ヴェチチアに會合して和を議し、帝はアレッサンドロの敎皇たるを認諾し、女伯マチルダの遺領を還附し、兩シチリア王との交誼を復し、帝權と市の獨立との讓歩に至りて最も難問と爲りしも、漸く六年の休戰に決し皇帝と伊太利亞人との爭戰は三十年に亘りて局を玆に結び、諸市は城市内に於ける諸權を得、法律宣戰媾和の自由を有し、執政は唯皇帝叙任の空名を存する耳。斯くて六年の歲華流るゝが如く、休戰の滿期ちしも、皇帝も諸市も抗爭の熱冷却してまた戰を欲せず、千百八十三年七月二十五日シュワベンのコンスタンス (Constance) 市に於て本條約を締結し、伊太利亞市府自治政の基礎此に完く成れり。

是より紅髯フリードリヒ皇帝は皇子ハインリヒの爲にシチリア王ロゼルの女コンスタンスを娶りて、教皇同盟者の隱匿地を除き、廣伊太利亞に巡幸してミラノ府民にも歡迎せられしが、十字軍エルサレムを陷るゝの報は歐洲の人心を激し、帝は親ら第三十字軍の元帥と爲りて東征し、千百九十年六月アルメニアのカリカドヌス (Calycadnus) 川に溺れて崩じ、皇子ハインリヒ四世即位して獨逸、伊太利亞の主と爲れり。然るにシチリア王グリエルモ(Gugielmo) 二世殂落せしかば、ハインリヒ帝は姻緣によりて其地に君臨す可きに、島民故ロゼル王の庶子タンクレド (Tancred) を奉じて之を拒まんとす。未だ幾ならずしてタンクレド父子歿し、千百九十四年北人の王統斷絶す。ハインリヒ帝乃ち其領土を得、恣に軍士を分封して公侯と爲し、女伯マチルダの故地に皇弟フィリップを封じ、横行逆施、太く民庶を窘迫し、千百九十七年九月暴に伊太利亞に崩ず。時に皇儲フリードリヒ二世年甫めて四歲。マルクワルド(Markwald)政を攝す。才學絶倫の教皇インノチェンツ三世之を見て自らロムバルヂア同盟、ツスカニア諸市の首魁と爲りて獨逸人を南方に逐ひ、翌年前帝の皇后コンスタンスの崩ずるに臨みて、自らナポリ、シチリアの主と爲りて幼帝の守護に

任じ、水師提督ワルテルをしてマルクワルドの引率せる獨逸サラケンの勇兵をシチリア島に討たしめ、互に勝敗ありて雌雄決せず。加ふるに獨逸の諸撰侯は前帝の崩去に乘じ、皇弟フィリップを奉じて帝と爲し、ゲルフ黨はサクゼン、バイエルン獅公ハインリヒの公子オットーを推して帝位を爭ひ亂離相踵ぐ。インノチェンツ教皇はもとバイエルン家の黨與なれば、此に於てオットーを助く。オットーは一度敗れしも、千二百九年フィリップの崩ずるに至りて帝位を得たり。北伊太利亞の諸市が相互の嫉視嫌忌の爲にロムバルヂア同盟結訂の美果を收め得ざりしと雖も、尙ほ能く自ら宣戰媾和を決し、着々として自主自立の實を擧ぐるに至りしは、斯く獨逸帝室の衰亂して威武半島に及ばざりしに因れり。

然りと雖も千百十三年コンスタンス條約は伊太利亞諸市に政治の自由を與へしのみにして、諸市府の黨爭はポヘンスタウフェン家の後援ある間は終に絶えず。貴族の地位も諸市府の勃興に伴ひて轉變し、黨爭の經緯と爲れり。抑伊太利亞の貴族、昔は領土采邑に君臨して自ら尊大なりしも、帝威陵夷せし今は、恃むところは唯自家の實力に過ぎざれば、名門右族に誇りし公侯伯家は漸く沈淪落魄し、ツスカニ

アアンコナ・フェルモ・カメリノ・イヴレア・ヱロ・ナトレ等ノ諸君公の系統殆んど斷絶し其遺墟殘壘に據守して舊名を存ずるものあるも、中世封建の制度によれる世襲繼承の結盟は夙に破れ、唯ゲルフ・ギベリン黨派の關係と爲れり。但嶮要に據りて地廣く衆多く、城固くして善く諸市府と對抗するに足る者はギベリン黨に屬し、城嶮ならず領土貧弱にして市府に近き者は、市府の勃興に由りて壓仆せられ、戰亂によりて負債を生じ、其政治兵馬に熟通せるより、移りて市府の顯要を占めて、自らゲルフ黨となり、其結果として平野の貴族は地を拂ひて失せ、山地の城壘に據る者は自ら獨立を稱するも、實は皇帝の爪牙に過ぎず。而して貴族の力むるところは政爭戰役に在るが故に、獨立貴族も屢諸共和府の黨首總督として迎へられ其一び市府に入るや富資と武力とに由りて權勢を張り、大厦高樓を起して城砦に擬し、動もすれば劍を拔きて相鬪爭し、屢衆を縱ちて人を殺し貨を奪ひ、市區忽にして變じて戰場と化するも執政の力禁遏する能はず。由りてフリードリヒ紅髯帝(バルバロッサ)設置の先例に倣ひて、コンシリオ・デ・クレデンツァ(親任會議)は毎年同盟市中より一騎士を撰拔してポデスタ Podestà 羅甸語ポテスタス (Potestas) より出づ、力の義)と爲して市政を總

管せしめ、民刑法の學者二三を擢でゝ之に隸屬して判官たらしめ、任期の終末にはポデスタは人民より撰出せし委員(シンダコ Sindaco)の前にて期間の政績を報告して責任を明にし、羅馬の十三區の如きは亦毎年代議士(カポリオニ Caporioni)を撰出して共和政を執らしめ、裁判權は他市府と同じく府外の將軍に委托して民事判官をして之を助けしむ。然もポデスタの最も統制に困せしは貴族の命を用ひざるに在り。今此等貴族の強盛なるものを擧ぐればゲルフ黨なるミラノ共和府に對してギベリン黨の井スコンチ(Visconti)家あり、サクゼン・バイエルンのゲルフ黨と氣脈を通ぜるエウガヲアー(Eugunei)城のエステ(Este)家はフェラヽ共和府に結び、チロル山下に采邑城池を有せるエチェリノ (Eccelino) 家はギベリン派に屬してヱロナ・井チェンサ共和府を助け、アベンニヲ山北の諸ギベリン貴族はピアチェンザ・パルマ・レジオ・モデナの謀徒を煽搖し、その山南のギベリン貴族は時にアレッゾ・フィレンゼ・ピストヤ・ルッカ諸府と相應じ時に相反く。教皇インノチェンツ三世治世の始に當り、パインリヒ四世帝はスポレト公、アンコナ伯を置きしに、教皇は其地方の諸市を誘ひてゲルフ市の二同盟を組織し、更に使節をツスカニアに派遣してサン・ジナシオ (San Dinasio) に會盟せしむ。歴世ホ

ヘンスダウフェン家の殊遇を蒙りしピサは之に應ぜざりしもフィレンゼ以下の諸市府は之に應じて教皇の保護を仰ぎ、貴族はゲルフ・ギベリンの別なく一樣に府民權を享有せんをを請へり。然るに黨爭の禍は亂階を惹き、千二百十五年アルノのゲルフ貴族ブオンデルモンテ(Buondelmonte)、フィレンゼのギベリン黨アミディイ(Amidei)家の女と結婚を約せしに、ゲルフ黨ドナチ(Donati)家の夫人之を要し、其女の美を示して婚を迫りしかば、フィレンゼのギベリン黨二十四家大に激昂してブオンデルモンテを要擊し、ゲルフ黨の四十二家會盟して其怨を復せんと謀り、新怨舊恨互に相累克して流血の慘禍相踵ぎて連年解けず。朋黨攻伐の憂は諸市に滿ちたり。此間に乘じて暇々として隆運に向ひしをエネチアと爲す。

是より先エヂチアは久しく伊太利亞半島利害の圈外に超脫して、獨り別に東羅馬皇帝の管下に有りしが、千百七十七年皇帝教皇の間に條約成るや、マヌエル・コムヂーノスはエヂチアが皇帝の敵たるシチリア島の北人(ノルマン)王家と和親せしを怒り、屢、海上にてエヂチアを迫害せり。然るにイサアク帝廢せられ、其皇子アレキシオス・アンゲロス(Alexios Angelos)は援助を西方の諸公王に求めん爲めに伊太利亞に至り、十字軍の大衆エヂチアに集りて水路より東征せんとするに會ひて之に說く。之によりて千二百三年府長(ドゼ)エンリコ・ダンドロ(Enrico Dandolo)はアレキシオス父子を位に復し、次でその下に弑せらるゝや、進んでコンスタンチノポリスを襲ひ、千二百四年四月十二日之を陷れ、フランドル伯バルドヰン(Baldwin)を皇帝と爲し、東帝國の地を割きてテサロニカ王國をモントフェラト侯に、帝國の一部をエヂチアに納む。是に於て伊太利亞諸市は十字軍に因りて富資を增殖せしのみならず、エヂチアは東方の技巧を傳承し領土を拓きしが、ビザンチオン政府の威令は僅にエペイロス(Epeiros)・ニカイア(Nikaia)・トラペゾウス(Trapezous)・(トレビゾンド(Trebizond)の三地方より外に出でず。後千二百六十一年ミカエル・パライオロゴス(Michael Palaiologos)ニカイアより出でゝコンスタンチノポリスを恢復して東帝國を復興したる時、ゼノヴ人は大に之を助けてエヂチア・ピサの商利貨權を削殺せんと謀りしも、志遂げずしてガラタの市外に移るに至れり。

然るにエヂチア興隆の後幾ならずして、伊太利亞にては教皇ギベリン族の後と結托するの奇事を生ぜり。抑インノチェンツ教皇とオットー皇帝と相輔けしは一時

の權謀に過ぎざるを以て、帝がロムバルヂア同盟と親和してマチルダ女伯の故地、シチリア島を併呑せんとするに至りては、到底教皇と相背かざるを得ず。シュワベン家に加擔せる獨逸の諸公は帝冠をシチリア島の幼主たるフリードリヒに捧げ、ゲルフ黨の首領たる皇帝は教皇の敵と爲り、半島の諸市府兩黨に分裂し、ミラノ以下はゲルフ黨なれどもフリードリヒ統を惡むの餘、オットー帝に向ひ教皇に背くわれば、バヰアの如きギベリン黨の諸市にして却つてフリードリヒ帝に從ふわりて、形勢茲に頓倒す。フリードリヒ帝乃ちゼノワ人に迎へられ、ピサ水師の張目警視の間を遁れてゼノワに至り、バヰアを經て北上し、ミラノ軍に要擊せられて大敗す。然も帝は年尙十八に滿たずして千二百十二年神聖羅馬帝國撰侯の爲にフランクフォルトに於て羅馬王に推撰せられ、次で千二百十四年オットー帝をブーヰン(Bouvines)に破る。されどミラノは尙屈せず撓まずして、ホヘンスタウフェン家の爲に戰ひしも、千二百十六年教皇インノチェンツォ崩じ、二年の後オットー四世亦崩じたるを以て、フリードリヒ帝は教皇オノリウス三世より帝冠を受け、伊太利亞、シチリア、サルヂニア、日耳曼、ブルグンヂア、エルサレム王を兼ねて世界の皇帝と爲り、フリードリヒ二世と號す。時に千二百二十年十一月なり。

年少の皇帝フリードリヒ二世は前諸列皇の如く純然たるチュトン種に非ずして伊太利亞に生れ、亞剌比亞學者の訓育を受け、文學哲理を愛して詩賦を善くし、羅甸、伊太利亞、獨逸、佛蘭西、希臘、亞剌比亞、諸國の語に通じ多趣多才、一代の偉材にして當世の奇傑と稱せられ、始めて廟堂に伊太利亞語を用ひ、ナポリ大學を擧め、ボロニヤ、サレルノ諸大學を保護し、サラケンの流賊を集めて守備軍を編成し、法令を嚴明にし、シチリア島は其治下に始めて前代未曾有の昌平を樂みたり。されど典雅明快の君主の常情として帝は深く宗教に執着拘泥せざりしかば、教皇の爲には悅ばれず、其命ずる儘に十字軍に盡瘁せざりしとて教皇グレゴリヨ九世に破門せられ、教皇の許諾を經ずして皇子ハインリヒを羅馬王に拜せしとて教皇オノリウスの怒に觸れたれば、遂に東征せしも、千二百廿九年武力を用ひず、智辯を折衝に用ひてエルサレムを克復したり。然るにミラノ、ボロニア、プラセンツァ、エロナ、ブレッシア、ファエンツァ、ヴェルセリ、ロヂ、パルガモ、トリノ、アレッサンドリア、ヰセンツァ、パヅア、トレヰソ等の諸市府は千二百二十六年ロムバルヂア同盟を復興し、皇帝東征の不在に乘じて、

教皇と結びて之に叛かんとせしも、事成らず。千二百三十年帝西に歸りて教皇とサン・ゼルマノ (San Germano) に和を約して同盟連合し、ロムバルヂアの異端の徒を擊つ。抑當時僧界の不德汚濁を惡みて教皇の施制に服せず、別に信教の道を求むる者甚だ多く、自ら稱してカターリ (Cathari)(清白派)若くばパテリニ (Parterini)(出世間派)と號す。インノチェンツォ三世の時宗教裁判 (Inquisizione) 始めて行はれしも、自由諸市府は未だ其施行を容るさゝりしが、此に於て之を施行して殘虐を極む。就中ミラノの如きは焚殺さるゝ者最も多し。且つサン・ドミニコ (San Dominico)、千二百十五年グッマンのドミニコが搬めし派にて、英吉利に所謂黑衣派、佛蘭西にジャコビヌといふもの是なり)サン・フランチスコ (San Francisco)(千二百八年アシヽのサン・フランチスコの始めし清貧を貴ぶ灰衣の一派なり)の二派確立して、教皇の威權增し、ドミニコ派のレオ・ダ・ペレゴ (Leo da Perego) は異端撲滅の殊功を奏し、井チェンツァのフラ・ジョヴには命を奉じて異端改宗の說教を爲して宣化の實を擧げ、甲はミラノ大僧正と爲り、乙は井チェンツァ・パヂア太守と爲る。但此際宗教に冷淡なるフリードリヒ皇帝の教皇の爲に力を異端撲滅に用ひしは、其亂の一變して政治上の變亂と爲らんを恐れたれば なり。然るに教皇は心窃に帝威の日に隆昌なるを忌み、密にミラノ人をして皇子羅馬王ハインリヒに、伊太利亞王の鐵冠を捧げ、之を煽搖して父帝と抗爭せしむ。時に千二百三十四年なり。帝乃ち急行して獨逸に歸り、ハインリヒをヴルムスに召して、王冠を奪ひ、之をアブリアに送り、幽閉して、動亂を鎭定し、千二百三十六年八月三萬騎を引率してエロナに至り、議院貴族を威嚇し、英傑の士ロマナのエッチェリノを擧げて市長と爲し、次で兵衆を擧げ之を授けて北に還る。エッチェリノ乃ち獨逸亞刺比亞兵を以て井チェンツァ・パヂアを取りて、ロムバルヂア同盟と拮抗對峙の勢を作り、大にゲルフ黨を威壓す。千二百三十七年フリードリヒ帝は再び南下して、サラケンの衆一萬をアブリアより徵し、十一月二十七日ミラノ執政の引率せるゲルフ同盟軍とコルテ・ヌオヴ (Corte Nuova) に戰ひ、斬獲一萬、カロッチョを奪ひ羅馬に送致して戰捷を證し、ミラノのポデスタ・ヂエボロ (Tiepolo) を捕殺す。ヴルサシナ (Valsassina) 太守パガノ・デラ・トレ (Pagano della Torre) 同盟軍の敗兵殘卒を收めて去る。チエボロはエネチア府長の子なりしかば、從來伊太利亞政爭の局外に超然たりしエネチアは之を聞きて憤怨して進んでロムバルヂア同盟に加はる。グレゴリヨ九世は

春秋高きも此大敗に屈せずして皇帝を破門し、基督教國總會の協贊を得んため、千二百四十一年總會を羅馬府に開く。佛蘭西英吉利の諸僧正乃ちゼノワ船ニ搭じて之に赴き、三月三日メロリア(Meloria)島附近に於てシチリア・ピサの水軍に遭ひて撃破せられ、僧正或は溺れ或は捕へられて總會遂に成らず。八月教皇崩じ、二年を經てインノチェンツォ四世教皇の位に即く、教皇はフリードリヒ皇帝と善からず。千二百四十五年六月會議をリオンに開きて、其罪條を數へ、スエサのタデウス(Thaddeus)大に帝の爲に辯疏せしも聽かれずして、帝は再び破門せられて身を容るゝ地莫く、エッチェリノは北伊太利亞に自利を營み且帝の爲に謀りて功なく、千二百四十七年六月パルマ帝に叛く。帝必ず之を平げんとを期し、子アンチオク王フリードリヒ、庶子サルデニア王エンジオ(Enzio)及びエッチェリノと與にパルマを攻めしも拔くと能はず。アンチオク王は去りてフィレンゼ府に、ギベリン・ゲルフの黨爭年を連ねて熄まざるに乘じて、之を襲ひ取りしも、サルデニア王は千二百四十九年五月ボロニヤのポデスタ・フィリッピ・ウゴニとフォサルタ(Fosalta)に戰ひ、敗れて俘囚と爲り、是より後幽居二十二年にして獄裡に殂し、前後三十年間獨逸、伊太利亞の抗爭に努力せしフリードリヒ二世皇帝は身勞し神倦み失意の極境に陷りて、千二百五十年十二月フィレンゼ城中に崩ず、年五十有六。伊太利亞に於ける帝室の威令權力は帝の崩去と共に滅盡し、北方伊太利亞の諸市府は益〻強大隆盛にして能く獨逸の南下を防遏し、南方伊太利亞の權勢は之に反し、羅馬帝國は復た振はず、諸帝も常に國事に營逐して、漸くアルプス山南の半島を捨つるに至れり。蓋し時世の一變、形勢の一頓なり。

第四章　ゲルフ黨の强盛

（千二百五十年乃至千三百三十年）

コンラッド帝。伊太利亞の倦怠。ファレンセの黨爭。ファリナタ。ギベリン黨の隆昌。エッチェリノ。貴族市府の權を竊攘す。アンジュのシャルル、ナポリを得。ゲルフ黨ギベリン黨に勝つ。グレゴリヨ十世、ニコラス三世兩教皇の兩黨均衡策。シャルト王のゲルフ黨復興の企圖。シチリア晩禱の變。攻守爭衡の紛亂。ピサの盛衰。（ギベリン黨、黑白兩黨）ツスカニアを分つ。エネチアの內政。ハインリヒ七世の南巡。伊太利亞の建築。彫刻。繪畫。伊太利亞の言文。ダンテ。殖産工藝。

千二百五十年十二月フリードリヒ二世皇帝崩ず。皇子コンラッドは、シチリア王國に即位し、教皇インノチェンツォ四世より帝冠を得たる和蘭のキリアムと、獨逸に於て抗對敵峙し、コンラッド帝の庶弟マンフレッドはシチリア王と爲りしも、教皇はナポリの亂を激成して王冠を英吉利王ヘンリー三世の王弟コルンヲール（Cornwall）伯リチャードに與へしも、リチャード辭して受けず、ヘンリーの王子エドムンド巨額の黃金を教皇に献納して此空位を購ひ得たり。然るにコンラッドは千二百五十四年五月暴にラヱロ（Lavello）に崩じ庶弟マンフレッドは幼皇子コンラヂンの爲に大政を攝す。蓋し教皇及びゲルフ黨はコンラッド帝の崩を見て、罪をマンフレッドに適くも、素より證憑なし。但帝室動搖して、シチリア王は幼冲に、ギベリン黨派には元首莫きが故に、ゲルフ黨虛に乘じて着々威信を張り、纔にリオン會議を召集して、フリードリヒ二世皇帝の罪を鳴らせしインノチェンツォ四世は、當時諸共和府の帝に抗敵せしを以て教皇の爲に出でたりと信じ、帝の崩後直ちに千二百五十一年伊太利亞に歸りしも、諸市府は亂後倦怠疲弊して、教皇の尊傲を悅ばず、羅馬の貴族は古帝陵、凱旋門、演戲場等に不逞の徒を嘯集して、良民を脅かし狂威を逞うせしかば、千二百五十三年ボロニヤのブランカレオネ・ダンドロ（Brancaleone d' Andolo）は羅馬府民よりセネトルに撰ばれて主權を委托せられ內武力を以て貴族を屈服し教皇を脅かして入府せしめ外シチリア攝政マンフレッドと結ぶ。故に一見すれば帝位空し

くして教皇の權增大せしが如きものありと雖も、實は市府の權重くして武力强迫相凌轢しッスカニア及び沿海諸市の外は悉く武斷の手に落ちたり。中に就きて獨りッスカニアに於けるフィレンゼの事最も見るに足るものあり。

フィレンゼ府は嚮にアンチオク王の援勢を假りてギベリン黨派隆なりしが、自由を愛し富資を積める府民は久しく屈すべからず。千二百五十年十月府民を五十部に分ちて軍隊區と定め、各部將を置きて部將會議を置き、次でポデスタ部將を並べ立てゝ相制肘せしめ、その上にシニョリア(Zignoria)を立てゝ府政を總掌せしめ、全府を六セスチエール(Sestier)に分ち、各セスチエールより任期二ヶ月のアンジアニ(Anziani)二人を撰出し、眠食を共にし、出入必ず相伴ひて府治に盡力せしめ、悉く堡壘を破壞して貴族を屈從す。既にしてフリードリヒ帝の訃音至りしかば、フィレンゼ府は千二百五十一年一月を以て嚮に放逐せしゲルフ黨を召還し、戰を近傍諸市に宣し、千二百四十五年ミラノ人ギスカルド・ピエトラ・サンタ(Guiscardo Pietra Santa)をポデスタと爲し、ヴルテラ(Volterra)ピストイアを取り、ピサ、シエナを風靡し、ピエトラ、サンタ壘を築きて年を『勝利の年』と號し、二十四カラド一ドラム重量の訃金(フロリン)を鑄行流通し、鑄貨の法紊亂せる當時の歐州にありて發行の保證、取引の信用を得て近世ながく貨幣の標準と爲れり。此に於てギベリン黨は衰勢挽回策を講じ、千二百五十八年コンラッド崩去の風聞ありて、マンフレッド、シチリア島王となりてギベリン派の勢一時に振ひ、辯力ッスカニア第一たるファリナタ・デリ・ユベルチ(Farinata degli Uberti)首謀と爲りて、ゲルフ黨の首領放逐を政府に迫り、マンフレッド王に說きて獨逸騎兵若干を得、シエナに隱遁せる同志に通じて、大に爲すあらんとす。フィレンゼのシニョリア衆をボロニヤ、ピストイア、等ゲルフ黨の諸市に募り、步三萬騎三千を得て、アルビア(Arbia)の附近モンテ・アペルト(Monte Apert)に營す。ファリナタはマンフレッド王の部將と兵一萬三千を併せて之と戰ふ。ゲルフ黨のボッカ・デリ・アバッチ(Bocca degli Abbati)叛きて之に應じ、ゲルフ黨は衆一萬を失ひて敗績し、殘衆故府を捨てゝルッカに遁集し、千二百六十年九月ギベリン黨フィレンゼに入府し、民政を廢して貴族政府を擁め、忠誠をシチリア王マンフレッドに誓ふ。然るに同派の諸市はエムポリ(Empoli)に會し、ピサ、シエナは宜しく勢に乘じてフィレンゼ府を毀ち、府民を四方に分散すべしと唱導す。ファリナタは事此に至らば府の爲に黨を脫し、部下

の精兵を提げてゲルフ黨の爲に戰はんと論ず。衆皆其勇を知るを以て復敢てフィレンゼ殘壞を口にせず。千載不朽の大詩人ダンテの詩は長く此ファリナタの公明を揚げて、反服恒なきボッカを誹れりと雖も、是に於てかギベリン派はッスカニアを風靡し、伊太利亞のゲルフ黨は爲に慴服してマンフレッド王の勢威隆々として盛なりき。

然りと雖も此と時を同くしてギベリン派の一星亦ロムバルヂアの地に隕ちたり。バッサノ・ビエモンテの太守エッチェリノはエロナ・ヰツェンツァ・バヅア・フェルトレ・ベルノの長を兼攝して裁斷軍政を總べ、苟も門地衆望高き者は忌除して横虐を擅にし、バヅア市のみにても八牢獄、千囚徒を有するに至り、トレヰソに居るその弟アルベリゴ(Alberigo)も亦阿兄にならひて失政太だ多きを以て、民庶怨嗟憂憤して、此僭逆の暴主を除かんとを欲すれども、適、此任に當る可きミラノ府は上下の疾視反目によりて内を慮りて未だ外を顧るに遑あらず。教皇アレッサンドロ四世之を視て十字軍を召集して僧主兄弟を除かんと謀り、兵をエネチアに觀、ラヱンナ大僧正フィリッポは衆を率ゐて、千二百五十六年六月バヅアに入りたるに、兵衆市中を剽略し、救援の軍却つて殘壞を逞くす。エッチェリノ之を聞きて軍中のバヅア人一萬一千を解隊して獄に下し、プレッシアのギベリン派貴族より市の權勢を得、四方よく其鋒に敵する者なく勢愈〻大なり。然るに千二百五十九年エッチェリノは更にミラノの貴族と通同して全府を奪はんとし、中部ロムバルヂアに至り、精勇を率てアッダ(Adda)河を渡りしに、エッチェリノに歸服結托し來りし諸市府は今や漸く其隆大を猜み、強横を憎み、窃にゲルフ黨と氣脈を通じて、エッチェリノの遠く本據の地を離れしに乘じて四方並び起り、九月十六日之をカッサノ(Cassano)橋畔に扼して走路を斷つ、エッチェリノ脚に傷きて囚虜となり、醫療を退けて自死す。享年六十有五。翌年弟アルベリゴ以下ロマノ家一族悉く殺され、ロムバルヂアはこゝに僧主專制の禍を免れたり。

此頃伊太利亞市府の貴族は益〻跳梁跋扈を極めて、政令に服せず、法規を守らず、浮浪を指嗾して良民と爭はしめ、剽略を恣にして庶〻民庶と街上に戰ひ、志を得ざれば退きて城壘を守りて民兵を拒み、其堅甲を蒙り長槍を揮ひて馬上にて馳騁するの巧は到底歩卒の民軍の敵に非ず。故に市府は已を得ずして、同主義の貴族を招聘するにあらざれば、武を賣りて四方に遊ぶ浮浪の壯士を傭使して騎衆と爲し、シニ

リアに屬して防衛たらしむ。ブルサシナの太守バガノ・デラ・トレは世々ゲルフ黨に屬し、始めてミラノの防衛總監と爲りしより、ノヴラ・コモ・エルチェリ・ベルガモ等ロムバルヂアの諸市皆また自家自由の氣年を經て之が爲に漸次氓滅せんことを慮らずして、之にならひしかば、教皇はトレ家の隆昌を憚りて、オト・ヴィスコンチ (Otho Visconti)を擧げてミラノ大僧正と爲し、是より後トレ・ヴィスコンチ兩家の抗爭は庶民貴族上下の爭に代るに至り、サン・ボニファチオ(San Bonifacio)伯はマンツア・エステ公はフェラヽの長と爲り、共にゲルフ派に出でヽ殆んど世襲君王の實を有し、エロナ共和市にてはギベリン派のエッチェリの殁落以後勢力の失墜せんとを恐れてスカラのマルチノ (Martino della Scala) を聘して民軍兩政を總攝せしめて、其後は世襲と爲り、クレモナはポー河全谷中最も强大なるギベリン派の領袖サン・ドンテ城主ペラヴィチノ (Pelavicino) 伯其友ブオソ・ダ・ドアラ (Buoso da Doara) をして互代して事に當らしめ、パヴィア・プラセンチア・ミラノ・ブレッシア・トルトナ・アレッサンドリア諸市府亦ペラヴィチノに倚賴し、ギベリン派はロムバルヂアを掩有して、ツスカニアを動搖し、トレ家の如きも稍之に傾き、千二百六十三年に至りては其爲に動かされざるは唯ルッカ一市を存するのみとなりはて、ツスカニアのゲルフ黨は悉く故郷を捨てヽ外に派れて雇兵と爲り、ロムバルヂアの數市に身を容るヽの地を求むるに至れり。

ギベリン黨の斯く旺盛なるより、半島はやがて同派の首長たる兩シチリア王マンフレッドに歸せんとの恐あり。教皇は之を未然に防止せんとすれども、國人の用う可きなく、又帝位は此時コルンヲールのリチャードと、カスチールのアルフォンゾとの相爭へるを以て、其何によりて皇帝の制を享くるをも欲せず、但此種の關係なき外國によらざる可からず。千二百六十一年五月教皇アレッサンドロ四世崩じ、後三ヶ月を經て佛蘭西の產ウルバノ四世教皇と爲りしかば佛王路易九世の助を請ふ。路易王は正統の繼承にあらずとして受けず。依て王弟アンジュー伯シャルヽを招きして、シャルヽは土地廣く資富みて大志あり、其夫人ベラトリはプロヴンス伯の女にして三姉妹の皆王妃たるに已れ獨り伯爵夫人たるを耻ぢ、夫に慫慂して伊太利亞に入らしめ、自ら珠玉を賣りて軍資に充て、兵三萬を募り、夫人自ら之を率て南征の途に上る。シャルヽ乃ち騎衆一千を提げて先づ海上より發し、千二百六十五年五月羅馬府に入り、ウルバノの繼嗣、教皇クレメント四世の歡迎を受け、共和府のセチトル

と爲り、己の繼嗣歿する時は兩シチリアを教皇に献ず可く、決して皇帝に献ぜず、自らシチリアの主と爲るも、教皇には臣禮を執りて貢献を缺かざる可しと約し、教皇爲に大軍を募りて十字軍と稱し、夏の末、伯夫人の軍亦至るを待ち得て、翌くれば千二百六十六年早春シャルゝ進んでナポリ王國に入る。二月二十六日マンフレッド王之をベチエント附近のグランデラ(Grandella)に邀へ戰ふ。ルセリア鎭屯のサラケンの軍は矢石を亂發し、獨逸の鐵騎は縱横突擊して、奮鬪よく佛蘭西兵に敵したるもギベリン黨の衆弱くして先づ潰崩し、全軍此土に覆りて、マンフレッド王は戰場に殘れ、遺屍はコンセンツァ大僧正の爲にマリノ坡上に遺棄せられ、シャルゝ伯は一擧して王國の主と爲る。依てシャルゝは多く敵人を斬殺し、サラケン鎭屯所を毀ちてシチリア島中一サラケン人を止めず、ギベリン黨を解散してゲルフ派再び世に出でミラノのトレ家はビトリスに應じ、フィレンゼのゲルフ派は歸りて、十一月府中の獨逸守備兵を逐ひて佛蘭西兵を招聘し、シャルゝ王をそのシニョルと爲せり。然るにヒサ・シエナは素よりホヘンスタウフェン家の股肱腹心たれば、斯くフィレンゼの復興するを忌み、千二百六十七年の暮コンラヂン年市めて十六にして一萬騎を將てシャルゝと伊太利亞を爭はんためにエロナに至りしを見て、大に悅びて之に加はり、羅馬府も教皇の措置に飽かずして門を開きてコンラヂンを迎ふ。コンラヂン進んで祖宗傳來の故國に討ち入り、千二百六十八年八月二十三日タリアコッツ(Tagliacozzo 220)の野にシャルゝ王と戰ひ、初は殆んど勝ちしも、終に敗れて、急に奔るを二十里、船を艤してシチリア島に入らんとして追兵の爲に獲られ、十月獨逸の諸公チギベリンの諸貴族等と與にナポリ府の市場に斬らる。是に於て伊太利亞半島のギベリン黨殆んど盡き、ゲルフ黨獨り盛なり。

コンラヂン誅死の後僅に一ヶ月にして教皇クレメント四世崩じて繼嗣定まらざるを殆ど三年。教皇莫く皇帝莫き伊太利亞にはシャルゝ王の威令獨り行はれ、千二百六十九年クレモナに開きしロムバルヂア諸市會議に於て、プラセンチア・クレモナ・パルマ・モデナ・フェラゝ・レヂオはみな王を以てシニョリアと爲し、ミラノ・コモ・エルチエリ・ノヴラ・アレッサンドリア・トルトナ・トリノ・バヂア・ベルガモ・ボロニヤは王を主長と仰がざるも、尙其好誼を求め聲望に服し、佛蘭西の力最も重し。然るに佛王路易の十字軍を興して亞非利加を伐つやシャルゝ召されて之に赴き加はり伊太利亞に

在らざること二年。半島は稍〻間を得て抑壓を免がる。千二百七十二年プラッセンツァのテバルド・井スコンチ(Tebaldo Visconti)撰ばれて教皇グレゴリー十世と爲り、基督教徒は協力して外異宗に當らざるを得ずと爲し、ギベリン、ギルフ兩派の均衡に盡力し、フィレンゼ・シエナをして獨に放ちしギベリン黨を召還せしめ、シャルヽ王に背きしエヂチア・ゼノヴを厚遇し、千二百七十年コルンヲールのリチャードの薨せしを機とし、獨逸撰侯に說きて、千二百七十三年アウストリア家の祖ハプスブルグのルドルフを皇帝に撰擧せしめ、切りに十字軍に盡瘁せしと雖も、千二百七十六年一月教皇崩去して志遂ぐるに及ばず。翌千二百七十七年ニコラス(Nicolas)三世教皇と爲り、グレゴリーの遺志を紹述し、更に明にシャルヽ王を屈し、ギベリン黨を助け、辯力兼用して、シャルヽの皇帝攝政羅馬のセネトル、諸市府のシニョル職を遞ひ、千二百七十八年オットー一世、ハインリヒ六世等諸先皇詔勅の謄寫をルドルフ帝に送示して巧にロマニャ『五城市』アンコナ附近、聖彼得寺領、羅馬郊外の野等、後の所謂教皇領の地を得、ミラノに於ては大僧正オットー、井スコンチ貴族を會合してゲルフ黨を破りて此地にもギベリン派起り、ボロニヤ、フィレンゼ、シエナも教皇の命を用ひ、前世以來の兩黨派の均勢殆んど成れり。

ギベリン黨の勢はかく再び盛なりしも、シャルヽ王は窃に時の至るを待ち、敢て之を爭はざりしが、千二百八十年八月教皇ニコラス崩ずるに及び、蹶然奮起して、星馳并テルボに赴き、千二百八十一年一月佛蘭西の一僧を立てゝ教皇マルチノ(Martino)四世と號せしめ、マルチノは王の意を迎へ、半島の主權、羅馬セネトルの職權をシャルヽ王に復し、教會領の政府をシャルヽ部下の諸官の手に委托し、諸市府に令して放逐のギベリン黨の人士を召還せしめ、力を悉くしてシャルヽ王の東帝國領有策を輔けて希臘帝ミカエル・パレオログス(Michael Paleologus)を破門し、シャルヽ王東征の軍は兩シチリア諸港に艤裝す。之を見て故フリードリヒ二世、マンフレッド王の親臣サレルの貴族ジョヴニ・デ・プロチダ(Giovanni di Procida)微服してシチリア島に入り古ギベリン派に說き、希臘西班牙に旅行してシャルヽ王の敵を煽搖鼓舞し、パレオログス帝及び故マンフレッド王の女にしてアラゴンのドン・ペドロの妃たるコンスタンスより若しシチリアの民にして起たば外其應援を爲す可きの約を得たり。シャルヽ王略之を偵知して漸く之に備へしも、禍は不測の間に暴發せり。千二百八十

二年三月三十日パレルモ城外に於て一佛蘭西兵、其地の一新婦を凌辱せしに、夙に佛人を疾める人民は大に憤激し、恰も晩禱の鐘聲寺院より鳴り渡るに和して佛人を殺す可しとの叫聲全市に滿ち、數時間にして城中在留の佛蘭西人四千を屠戮虐殺し、島中の諸市變報に接するや皆蜂起す。所謂シチリア晩禱の變是なり。シャルヽ王乃ちメッシナを圍む。ドン・ペドロ至り救ひて島王と爲る。千二百八十六年シャルヽ王殂落し、シチリア島終に敵手に歸せり。

此より前、伊太利亞半島の攻守爭衡紛々たりと雖も、尙は皆皇帝、教皇、諸市府權勢の爭奪によりて向背を決し、叛服離合の間に一貫の理を存せしも、今や形勢將に一變して、政略の因由は雜駁と爲り、利害の關係は廣く半島の革運革命に貫通する一代の思潮、一世の標識なく、教皇、皇帝、君公の力微弱にして諸共和市府の進退を左右し向背を決する能はず、爭亂は紛々として相綜錯し、地方の亂、割據の爭、毫も統率するところなきに至れり。此時に當つて最爾たる小地方を以て興り、自由の鼓吹と商業の繁榮とに因りて名を世に知らるゝに至りしはピサなり。ピサの旌旗を揭げし船舶は地中海上に相望み、便を十字軍の東航に借して、コンスタンチノプルを

を脅かし、サルヂニア・パレアル島を征服し、諸般の技術をツスカニアに輸入し、築建文物の盛、東西人の目を驚かしたり。然るに千二百六十六年以後屢々フィレンゼとリア(Meloria)島邊の海戰にて、七船覆沒し、二十八船を奪はれ、五千人は死し一萬一千人は囚虜と爲り、提管ユゴリノ・デラ・ゲーラデスカ(Ugolino della Gheradesca)は之より自利を營みて、市中のゲルフ・ギベリン兩黨を籠絡せしかば、千二百八十八年七月二子二孫と與に幽殺せられ、ピサ漸く衰ふ。ピサの衰勢に乘じて益興隆せしはフィレンゼなり。フィレンゼは千二百六十六年憲法を改定し、千二百八十二年再び之を更正しアンヂアニを廢し、職業によりて府民を十二種 Arti に分ち、每種に主司、總督議會あり、就中七大種强盛にして一判官と任期二ケ月のプリオル六人を撰びてシニョリアと爲して政令を掌らしめ、後十年を經てシニョリアの上に司法總督を置きゴンフアロヂ(國旗)を揭げて府民に政令の施行を助けしめたり。千二百九十二年に至りフィレンゼの貴族放縱にして街上に爭鬪し公安を害せしかば、ジャノ・デラ・ベラ(Giano della Bella)身を貴族に起じながら民黨の領袖と爲り、法令を以て强大なる貴族三十

七家を指定して貴族はプリオルたるを得ざらしめ、府政參與權を削り、若し鬪諍せば、二人以上の證明あれば直にポデスタに送附して罪を斷ぜしむるをと爲せり。シエナ、ピストイア、ルッカ皆傳承して之にならひ、此他ツスカニアの共和市府、ロムバルヂア共和市府の大數も亦爭援を事由として貴族の贊政權を停止したり。されど貴族は此等の排斥に挫屈するものにあらずして山城に退きて各臣隷の君主を以て居り、就中アペンニヂ山中耕耘山林の業最も進歩せるピストイア共和市の「山の手」には富資兵力共に全半島に冠絶せるゲルフ派のカンチェリエリ(Cancellieri)族ギベリン派のパンチァチキ(Panciatichi)家の堡砦多く、彼は當時ツスカニアを傾知せし故、ピストイアより遁れ來りし此を容れて勢力を扶植したるが、其中自ら黑(ネリ)(Neri)白(ビアンキ)(Bianchi)二黨を生じ、コルソ・ドナチ(Corso Donati)は激烈なるゲルフ派にて、白黨の推戴する所ろとなり、ヴェリ・デ・チェルキ(Vieri de Cerchi)は亦ゲルフ黨なれども、既にゲルフ・ギベリン兩黨の趣旨を沒却せる今、なほ二派の標目を立てゝ相鬪ぐの愚を嘲り、ギベリン黨パンチァチキ家を拒まずして自ら黑(ネリ)黨の領袖を以て居り、詩人ダンテ、史家ヂノ・コムパニ(Dino Compagni)など、フィレンゼにて文學上に頭角を顯はせし名士亦多く籍を此に列ね、ツスカニア全土は黑白兩黨に分裂したり。羅馬教皇ボニファチオ八世依て兩黨の間を調停せんと試みしが、自ら遂に白黨に傾き、佛蘭西王フィリップ四世の弟ヴロアのシャルヽを迎へ、千三百一年シャルヽは八百騎を將てフィレンゼ府に入り、コルソ・ドナチ及び白黨と合躰して黑黨を虐殘し、ダンテ、ペトラコ・デランチサ(Petracco dell' Ancisa)(詩人ペトラコの父以下數百人を放逐し金銀財物を剽略してシチリア征討の途に上りしも、よく爲すなくして和を講じ、後幾ならずして薨じ教皇ボニファキオは佛蘭西王と爭ひて敵のために幽殺せられたり。

以上の如く諸市の貴族は概ね市民と合はずして排斥せらるゝに當り、エチチアの貴族は盛に起れり。始めエチチア府長は撰公にして、政權は民會に制限せられしが千三十二年漸く議會を召集し始め、後一百四十年を經て、千百七十二年に至て大議會を開き、共和府の六區より各二人、通計十二人の撰主を撰び、撰主は毎年四百八十人の議員を任命し、別に大司法院を置き、一府長、六閣員を以てシニョリアを組織し六十議員より成る上院を立て、府長は決して越權私斷無きを誓ひ、其歿するや、委員施政の蹟を檢して、若し非越あれば繼嗣者其責に任じ、十三世紀末に至るまで、府長

の選擧は議院の手に出でしが、千二百八十九年始て人民の手に歸せり。然るに大議會は人民の撰出せる者を排し、貴族黨の領袖ピエトロ・グラデニゴ(PietroGradenigo)を以て之に代へしに、グラデニゴは人民の議員選擧に參與するを非とし、千二百九十七年二月有名なる大議會閉鎖案(Serrata del maggior Consiglio)を通過し、大貴族にあらざれば議員たるを得ずと爲し、事實上の世襲貴族制を施行して全歐州の耳目を驚かし、千三百十年更に黑衣の十議員を置き府長及び赤衣の六閣員とともに無限の權を有して、凡百の罪案を詮鑿裁斷せしめ、千三百十五年黃金簿を作り、嘗て議員と爲りし者の姓名を列載し、千三百十九年以後は議員たりし者の後にして二十五歲以上のものゝみ、大議會に列し得可きことゝなりぬ。

獨逸の皇室はルドルフ以後三世の君皆帝冠を得ずして、フリードリヒ二世の崩後五十八年間、皇帝の半島に至るもの絕へてなかりき。然るに千三百八年羅馬王アウストリアのアルベルト殂するや、ルキセムブルグ(Luxemburg)伯撰ばれて皇帝と爲り、ハインリヒ七世と號し、富强の資に乏しと雖も、天資英偉にして、皇子の爲めにベーメンを得て、他の冒嫉を受けし故、暫く獨逸を去るを利とし、兼ねて伊太利亞を服して國人の歡心を得んと志し、千三百十年九月僅に二千騎を將て半島に入る。此の如きの少兵は素より南方經略の用に足らずと雖も、敎皇クレメント五世は、時に佛蘭西王領に、時にボルドー地方に、時にアヴニョンに流落して、常に佛王の配下より逝れんことを希ひ、諸市府は朋黨の爭派に疲れて、或は無主政府の狀態に陷り居るも少からねば、ハインリヒ帝南下すと聞きて、ギベリン派は素よりゲルフ派も同じく敎皇の意を奉じて之を歡び迎へたり。ハインリヒ帝も亦兩派の別なく逐客放人を召還す。詩人ダンテの如きは帝を以て人間の運命を一轉し平和を克復し、公正を以て施政を爲す神使なりと謳歌し、時にミラノ府にありて富を擁し衆を蓄へて聲譽門地に賴りてギベリン派のマテオ・ヴィスコンチ(Matteo Visconti)と對抗せるバガノの後グイド・デラ・トレ(Guido della Torre)も速に來りて帝を迎へ、千三百十年基督降誕日ハインリヒ帝は寶玉を飾りし月桂樹葉の伊太利亞王の鐵冠を受け、兩黨を調停したり。然れども幸運は長からず。ハインリヒの資財を徵求するや、兩黨共に離れ叛き、マテオは異志を抱きてミラノの權を奪ひしも、グイドとゲルフ派は放逐せられ、他の諸市も皆帝を厭ひ、ピサ以下フィレンゼの敵たるッスカニア

の諸市は之を迎へしも、ゲルフ派の大府市はみなアンジューのシャルゝの孫たるナポリ王ロベルトに歸して帝に叛き、羅馬府もナポリ兵を屯して守備と爲すに至る。帝乃ちフィレンゼ及びナポリ王を皇敵と宣し、シチリア王たるアラゴンのフェデリコと連合し、千三百十三年八月騎兵四千、歩兵若干を率ゐてピサを發し羅馬を攻めんとし、途上シエナを距るを數里、ブオン・コンゼント(Buon Convento)に至り、サン・バルトロミュー祭を施行せんために留り、二十四日暴に崩ず。蓋し炎天熱地を冒して、疾病に殪れしならんも、事急なりしを以て、時人疑を挿みて僧侶の爲に毒弑せられたりと爲す。但帝の南侵は獨り平和と統一とを致さんがためなりきと認められ、帝の後また伊太利亞に入りて神命を遵奉し、アウグスツスの後として見られし者なく、帝は半島に於ける眞の帝皇の最後と云はれき。

茲に當時に於ける伊太利亞の建築、美術、文藝の一斑を略叙して、本章を結ばむ。

伊太利亞建築固有の特點は羅馬時代より傳はりし羅馬式の圓頂格なりしが、後希臘文明の感化を受くるに及び、柱冠を加へて柱の構造變遷し、スパラトのヂオクレチアヌス宮殿の如きは新式に據りしも、一般は十一世紀に至りても猶ほ角柱の上に圓頂格を用ひたり。此角柱は寧ろ古羅馬の遺風を傳へたる者にして、圓柱は希臘風の感化を受けたる者なり。羅馬の古寺は始め皆法院(バシリカ)(Basilica)風にして、長く高き本殿の外に、圓頂の連房ありて、狹き二廻廊を隔て、殊に守舊の風盛なる羅馬府は久しく改めざりしに、テオドリク王のラヱンナに據るや百般の技術皆一に羅馬に擬し、建築にも亦此風を採用したるも、ロムゴバルドの羅馬式建築は概ね長く低き本殿に前面を廣くし寺觀は十字形を爲せる者多く、其圓頂格を支ふるに花冠の大柱を以てせり。バヂアのサンタ・ミカエレ寺、ミラノのサンタ・アムブロセ寺の如き皆然り。是十一世紀前の建築の狀況なりき。然るに十一、二世紀に至りて復古的傾向を生じ、ラヱンナ風に倣ひてピサ、ルッカの寺觀は幾多の圓柱の上に圓頂格を支えしめて、柱冠の彫刻は他の裝飾と代謝し、前面は大理石、若くは奇石の圓頂連房と爲り、十二、三世紀に至りて、此前廊の裝置は益〻驕奢を衒ふに至りき。蓋しロムゴバルド建築の精華は夫の有名なる鐘樓(カムパニレ)(Campanile)にして、大抵方形の高樓にて壁柱なく、上方に登るに從つて繁褥なる裝飾を施し、本殿の外に孤立せり。又有名なるはピサの傾塔にして、こはラヱンナの鐘樓に肖て、特に圓塔なり。羅馬式は歐

洲諸國に傳派せしゆへ、諸國の古建築亦稍其狀形を存するもの少からず。然れども伊太利亞は曾に羅馬式のみならんや。東方との交通によりてビザンチオン式の影響を受けしを尠からずして、ラヴェンナのサン・ヰタル・エチチアのサン・マルコ・トルチェロ・アンコナの諸小院は其面影を示し、又パレルモ以下シチリア島諸市府の建築にはサラケン式の尖圓頂を用ひたるもあり。十三世紀にはゴト式を以て羅馬式に代用して尖頂の建築多く起りしも、もと是アルプス山北特種の樣式なるを以て太だ發達せず。斯くて伊太利亞の建築は畢竟圓頂、尖頂錯綜混用し、ゴト式の飾はロムバルド風の粧の美を損ぜり。但伊太利亞のゴト式の立派なる標本はミラノの大伽藍なれども、こは十四世紀末造のものにて、其他にはボロニヤの商館、シエナの公堂等最も見るに足る可し。

建築にゴト式の採用せらるゝや、彫刻漸く復興せり。其技に巧にして建築に兼通せる名匠には十三世紀の末造ピサにニコロ(Nicolo)あり。其門下よりアルヌルフ(Arnulfo)出でゝフィレンゼのサンタ・クロチェ(S.Croce)を造營し、其子アンドレア・ピサノ(Andrea Pisano)千二百七十年生、千三百四十五年歿)業を繼ぎて黃銅大理石の彫刻を爲して名を殘せり。繪畫は始め東方希臘の畫風を傳へてジウンタ・ピサノ(Giunta Pisano)、ブッファルマッコ(Buffalmacco)等ありしも、線剛澁に形不自然なりしが、フィレンゼのチマブエ(Cimabue 千二百四十年生、千三百二年歿)出でゝ自然の美を探求して始めてビザンチオン式の舊套を脫してフィレンゼ派を開きて半島繪畫の祖と稱せらる。その門下に出藍の譽を得し高足ヂオト(Giotto 千二百七十六年生、千三百三十六年歿)に至りて溫雅優美の筆致を以て伊太利亞の畫界に一新生面を開き、タデオ・ガヂ(Taddeo Gaddi 千三百年生、千三百六十六年歿)ステファノ・マソ及びペトラルカ・ラウラの像を描きて美名を得しメムミ(Memmi)の如き皆其業を受けたる者なり。

文辭言語は、前にも云ひし如く、羅甸語を傳承して、語格は既に變じたる後も、文字は依然羅甸文なりしに、シチリア王宮にて始めて國語を用ひて詩歌を作り、名けて宮廟語と云ひ、十二世紀の末、島人チウロ・ダルカモ(Ciullo d' Alcamo)始めて國詩の作あり。ホヘンスタウフェン家のフリードリヒ帝、皇子エンソ王、侍從ピエル・デレ・ヰニェ(Pier delle Vigne)等伊太利亞詩を唱述し、ジオヰナッゾ(Giovinazzo)のマテオ・スピネロ(Matteo Spinello 千二百四十七年頃歿)の帝及びマンフレッド王に關する記事も伊太利

亞語を用ひ、伊太利亞紀年史家の祖と稱せらるゝフィレンゼのリカルダノ・マラスピニ(Ricardano Malaspini)の史も、キケロを譯してマンフレッド王に進獻せしグイドト・ダ・ボロニヤ(Guidoto da Bologna)の文も皆此頃に出でゝ伊太利亞文の精華を發せり。而も南方に引かへて尙區々一定せざりし北伊太利亞の語法文法の一定せしは有名なる大詩人ダンテに始まれり。ダンテ・アリジエリ(Dante Aligheri)は千二百六十五年フィレンゼに生る。千古不出の大詩才を抱きて感軻落魄、エロナ公スカラのアン・グランデ(Can' Grande dlela Scala)の宮中に寄寓し、終に『神曲劇』(Divina Comedia)の雄篇を作り、地獄、黃泉、天國を巡歷して善惡諸人と會談せしとを作りて、世界文學史上に不朽の名を留めたり。又別に『王國』(De Monarchia)の著あり。享年五十有六にして千三百二十一年ラヱンナに逝く。歿後百年を經て名益〻高く、フィレンゼ其遺骸を求めしも、ラヱンナ惜みて與へざりきといふ。蓋し十四世紀の伊太利亞文學は國人の『三百』(Trecento)時代と稱するものにして、述作太だ多かりしも、今多く傳らず。而も其中に就きてダンテの詩篇は、ペトラルカの歌曲、ボッカチオの物語とともに千古に傳ふ可きもの、宜なり、カーライルがダンテを推して詩界の英雄となしたるや、

ペトラルカ、ボッカチオの事は尙下に說く可し。

終りに尙一言を加ふ可きは、當時殖產工藝の進步なり。ミラノ府は獨逸より織物製造術を學び、西班牙、英吉利諸國と多額の原料を賣買し、フィレンゼも之にならひ且精良なる染料を製造し、ルッカ、ゼノヴは絹布を織り出したるが、最も驚く可きは金錢取扱の業にして、ツスカニア、ロムバルヂアにては爲替貸借法によりて、西方の財貨を集散融通して、諸方君王の財政を管理し、鑄錢を請負ひ、フィレンゼの訝金貨は當時各國一般に通貨の價額標準となるに至れり。

第五章　ギベリン諸公

（千三百十四年乃至千四百二年）

ピサの禍亂。ナポリ王對ロムバルヂアのギベリン諸市府。ゲルフ黨の危殆。レヂス帝の南征。カストルチヨ。ミラノのヂスコンチ家。ベーメン王ヨハンの南下とフィレンゼの窮策。ゲルフ黨益〻微なり。フィレンゼのゴールチールの政變。伊太利亞の復古的風尚。羅馬のリエンジ。『バビロンの捕囚』ナポリ王室の難。疫癘の流行。浮浪の黨。ヂスコンチ家の盛大。セノヴ・エネチアの競爭。ベーメン王カールの南下。パヂアのヤコポ・デ・アラソリ。ミラノ・フィレンゼの抗爭。ヂスコンチの威伊太利亞を動かす。教皇の兩統分立。キオッヂアの海戰。フィレンゼの內亂。ジアン・ガレアソ・ヂスコンチ。伊太利亞の社會。『三百』時代の文學。ペトラルカとボカッチヨ。

ハインリヒ七世の南征によりてナポリ王ロベルトはゲルフ黨の首領と爲りしがミラノに於けるマテオ・ヂスコンチを始とし、北方諸市府のギベリン派の諸公も亦帝の南征によりて權力を扶植し、十四世紀の始より、或は權謀詐略を用ひ、或は武力を用ひて、他の喪亂隙釁に乘じてロムバルヂア諸市府の守公と爲る者多く生じ、互に抗敵對峙し、其志稍〻成るや、更に意をツスカニアに注ぎ、軍略政術に通曉せるギベリン黨は却つて徒に一人の野望に利用せられ、僭主興隆の地と爲るに反し、他の排除を蒙りて逆境に沈淪せるゲルフ派は、各一身の利害を捨てゝ勇を皷し慮を焦し國土に徇ずるの志士を生ず。此間獨り、ギベリンの情を以てなほ自由を尙ぶものは伊太利亞半島を通じて但一のピサ共和府あるのみ。

ピサはハインリヒ七世と始終を共にせしが、帝暴に崩じてツスカニアの諸ゲルフ並び起ちて怨を復せんとするに至り、ロマニア山地の一貴族ユグチヨネ・ダ・ファジュオラ（Uguccione da Faggiuola）を擧げて將軍に任じ、千三百十四年七月ルッカ市中にギベリン・ゲルフ鬪擾せる間に乘じて之を取り、八月フィレンゼ・ツスカニアのゲルフ及びナポリの同盟軍をモンテ・カチノ（Monte Catino）に擊破す。而も幾ならずしてファジュオラはピサの爲にせずして自利を圖り、事露はれて內訌起り、漸くにしてピサは將軍の專恣を脫せしも、領地サルヂニアに亂を起し、地を以てアラゴンの王子アル

フォンゾに降らんとする者ありて、戰ピサに利なく、千三百廿六年六月アラゴン、サルヂニアを得て、ピサ共和府殆んど衰頽せり。

然れども、ロムバルヂアのギベリンは隆昌にして、エロナにはロマノのエッチェリノ沒落後、スカラの一族榮え、此に至りて彼ダンテを保護せしカングラデ・デラ・スカラはエロナの主權を掌握して、ポチェンツァ、パヅアトレヴィソに勝ち、ミラノのマテオもパヴィア、トルトナ、アレッサンドリアの主を兼ね、フェデリゴ・ヂ・モンテフェルトロ(Federigo di Montefeltro)はウルビノ公と爲り、ルッカはファジュオラ侵略を蒙りし後、カストルチオ・カストラカニ(Castruccio Castracani)を奉戴し、ピサと連衡してフィレンゼに迫る。カストルチオは久しく海外に放逐せられしギベリン黨の一名家にして、英吉利、佛蘭西、ロムバルヂアに流寓し、富を蓄へ武を練りて歸り、驍勇にして將略に通じ、政術に明に、器量絕倫なりと雖も、惜む可し、誠實の心、仁恕の情薄くして屢〻部下を虐使して其怨を買へり。ゲルフの領袖ナポリ王ロベルトはインリヒ帝崩じて獨逸に皇帝撰擧競爭起るに乘じ、教皇ジョヴニ十二世と結托して伊太利亞王たらんと欲す。さきにゲルフ黨に放逐せられしドリア、スピノラ二大族の率統せるゼノヴのギベリンは、ロムバルヂアのギベリン政府、シチリア王フリードリヒと結び、來りてロベルト王に敵す。王乃ちフィレンゼと連りて之を防ぎ、ルッカに入りて、カストルチオの援軍を斷ち、教皇は後に佛蘭西王となりしヴロアのフィリッポを遣りてゲルフを助けしも、フィリッポはマテオ・ヂ・スコンチに敵する能はずしてアルプスを超えて退きたり。依て教皇はマテオを異教徒と宣して、其他多數のギベリン派の領袖と與に悉く破門を命じたり。

始めハインリヒ七世皇帝崩じて繼嗣なきこと十ヶ月。撰侯異見を挿て兩派に分れ、千三百十四年十月、一派はバイエルンのレヂス五世を推戴し、他派はアウストリアのフリードリヒ三世を撰び奉じて相當り、兩帝の權利勢望相下らず。教皇ジョヴニはアウストリア家を助け、フリードリヒの皇弟ハインリヒを招きて伊太利亞のゲルフを助けしむ。千三百二十二年兩帝の平和遂に破れ、九月廿八日ミュールドルフ(Mühldolf)に戰ひて、フリードリヒ帝破れて捕へられしかば、教皇の畫策畫餅に屬し、レヂス羅馬皇帝と爲る。是より先二ヶ月、マテオ・ヂ・スコンチ歿したるも、其子ガレアゾ(Galeazzo)亡父の志を紹ぎて教皇の黨とロムバルヂアに戰ひて勝ち、他の

ギベリン諸公と結びてレギスを助け、伊太利亞王たらんとするナポリ王ロベルトを防ぐ。教皇激怒してレギスを破門す。然るに此際カストルチョは連りにピサに迫り、千三百二十五年五月ピストイアを取る。フィレンゼ乃ちドン・ライモンド・デ・カルドナ (Don Raymond de Cardona) を聘して將軍に任じて之を拒がしむ。ライモンド將略を誤りて士を失ひ兵を勞し、九月廿三日アルト・バッショ (Alto Pascio) に於てカストルチョの爲に生擒せらる。次て十一月廿五日ボロニヤ軍は大にモンテ・エリオ (Montevegliо) に破れてゲルフ派の勢全く挫折し、フィレンゼは急を告げて救をナポリ王に乞ふ。ロベルト王よりて王子カラブリア公カルロスを十年間府長と爲さば救援す可しといふ。フィレンゼ之を患ひしも時恰もレギス五世悉く獨逸のアウストリア黨を撲滅して伊太利亞に侵入せんとすと聞きしかば已むを得ずしてロベルト王の言を諾す。果してレギス五世は千三百二十七年、六百騎を以て南下し、ミラノ、マンチュア、エロナ、フェラヽの衆を會して軍を組織し、五月三十日ミラノにて伊太利亞王の鐵冠を戴きたり。若し帝にして方策を誤るなくば勢半島を下ずに難からざりしならん。然るにレギス帝も亦ギベリン諸公と同じくガレアゾ・ヰスコンチの富强を忌み、讒を信じて、七月六日ヰスコンチ一家をミラノ宮中に捕へ、悉く城砦蓄積を致す可しと迫り、九月兵を進めてツスカニアに至り、六萬圓を献じて和を請ひしピサの使節を捕へて、十五萬圓を强請し、カストルチョの言に聽きて、カラブリア公の軍フィレンゼ附近に屯せるをも顧みずして、十一月カストルチョをルッカ・ピストイア・プルテラ・ルニジアナ公に封じ、相伴ひて羅馬に入りてセネトルと爲し、千三百廿八年一月レギス帝はヴチカン宮殿に於て皇帝加冠式を擧ぐ。但教皇はさきにレギスを破門したれば式に與らず。破門せられし二僧正、教皇に代りて冠を加ふ。レギス憤怒して教皇ジョヴニ二十二世を廢し、新教皇を立つ。偶〻フィレンゼ府ピストイアを取りしにぞ、カストルチョはツスカニアに召しかへされ、急に襲ふてピサを取り、八月またピストイアを復せしも、後一ケ月を出でずして病歿し、且カラブリア公も之と前後して薨ぜしかばフィレンゼは一方に危殆を免れ、一方には府長制御の禍を免れ得たり。而してレギス帝は羅馬に在りて民心日に漸く動きナポリ王の水師チベル河口に至りしを見て、退きてピサを取り千三百廿九年三月嚮には己の腹心たりしカストルチョの遺子よりルッカ市を奪ひ、ガレアゾ・ヰスコンチを釋放し、其歿

するやミラノ太守の職をその子アゾ(Azzo)に賣り、秋末遂に獨逸に還る。而してスカラのカングランデも亦歿したればギベリン派は悉く首領を失へり。

かくてロムバルヂアの諸市は信賴す可き元首なく、自立す可き意氣無く、空しく此年を送りしが、翌くれば千三百三十年の末、圖らずも獨逸のハインリヒ七世の子ベーメン王ヨハンはトレントに來れり。ヨハンは風采秀麗、辯論流るゝが如く、一見人をして敬慕の情に耐えざらしむるに加へて佛蘭西、獨逸に於て勇斷果行の逸事多く、自ら濟世の念あるが如きを以て、君王首領の非暴汚貪に嫌焉たる伊太利亞人は勢之に附かざるを得ず。ブレッシア劈頭率先使者をトレントに遣はして之を迎へ十二月晦ヨハンを推して市長と爲す。ベルガモ、クレモナ、パヂア、エルセリ、ノヴラ皆直にブレッシアに倣ふて之を奉じ、ミラノのアッゾ、井スコンチの如きすら、民望の向ふところを視て、己むを得ずヨハンを推戴す。ヨハン乃ちゲルフ、ギベリンの逐客を召還して和平を復し善政を布く。獨りフィレンゼは如何なる名君と雖も、一び專制の君公を奉ずれば、名君忽ちに僭主と變じて府民の自由爲に氓びんを憂へて敢て諸市に倣ふてヨハンを推さず、假令半島自立の風氣銷沈すとも、なほ多少氣慨ある

市府地方を糾合連和し、自ら、唱主と爲りて僭主專制に對峙抗敵せんとす。慨むらくは此時ナポリ王ロベルトは年既に老ひて兵疲れボロニヤ共和市は往昔の富强地を拂ひ、ベルジア、シエナは資力儉薄にして內窃にフィレンゼの强盛を猜み、ゲルフ諸市府一も力をフィレンゼに假して、ヨハンの黨に當らんとする者なし。故にフィレンゼは已を得ずして積年の敵に通じ、ヨハン王の爲に抑損せられて、心平ならざるギベリン派の諸公と、利を分ちて相侵さじとの約を結び、千三百三十二年九月、クレモナをギスコンチに、パルマをカングランデの姪マスチノ・デラ・スカラ(Mastino della Scala)に、レジオをゴンザガ(Gonzaga)に、モデナをエステ伯に、ルッカをフィレンゼ府に頒得して對外同盟を組織す。ヨハン事相忽ち大に變じ業成り難きを見て煩に耐えず、自己に歸服せし諸市府を諸公伯に沽却して、千三百三十三年十月巴里に至る。是に於て半島の亂はヨハン王南下の前に培せり。

ヨハン王既に去る。同盟諸市府豈其委棄の地を爭はで已む可き。千三百三十五年の夏に至り、ヨハン王の根據地たりしルッカはフィレンゼに屬す可き前約なるに、之を陷れしマスチノは約に背きて占領し、自らツスカニアを征服せんと揚言誇稱

しギベリン同盟を説きピサ、及びアペンニヂ山の獨立貴族と連和してフィレンゼに抗す。是に於て千三百三十六年六月フィレンゼはエヂチア共和國と同盟を約して之に當り、翌千三百三十七年八月パヅアを取りてカララ(Carrara)家に與ふれば、エヂチアも始めて地を大陸に拓き、トレ・ヂ・ソ・カステル・フランコ・チェヂダを得更に慾望を逞くして、千三百三十八年十二月フィレンゼを捨てゝマスチノと和す。かくしばゝ同盟の離反常なきを見てフィレンゼも太く困窮し、ナポリ王は齡已に七十有五に達して經略の勇失せ、教皇ジョヴニ二十二世は是より先、千三百三十四年アヴニョンに崩じ、後を承けたるベヂヂクト十二世は佛蘭西人なれば、伊太利亞の兩黨派には利害を感ぜず、ボロニア政府は千三百三十七年八月富豪タデオ・デ・ペポリ(Taddeo de Pepoli)に簒はれ、ゼノワはグルフ、ギベリンの內訌絕へず府民倦怠して、千三百三十九年九月共和政治を廢して府長政治と爲し、ボカヂグラ(Boccanegra)を以て府長に任じフィレンゼと絕ちたれば、グルフ派の勢は年と與に益〻衰微して振はず。然るにマルチノはルッカを以てフィレンゼに賣讓せんと欲す。若し此事にして成らん乎、ピサとロムバルヂアのギベリン派との連絡は忽ち絕へてピサの獨立最も危し

故にピサはミラノのルキノ・ヴィスコンチ(Luchino Visconti)等の援助を仰ぎて兵を出し、千三百四十一年十月二日大にフィレンゼ軍をルッカ城外に擊破して城市を奪ふ。フィレンゼ府民此の大敗を以て官吏の失に歸し、租稅府債に就きて非難し、徒に共和政の美名の下に實權の漸く富豪ポポラニ・グロシ(Popolani Grossi)の手に移るを憤り、半島第一の自由共和の府民も、時世の變に從ひ、此に至りて終に獨裁の君主を奉じてもなほ怨を一部の士人に報ゐんとするに至れり。始めコンスタンチノポリスを陷るや、モントフェラト伯の部下に雅典公と爲りし者あり。佛蘭西人ブリエヌのゴールチール(Gaultier de Brienne)結婚に因りて此公位を得しが、幾もなくして其下の逐ふ所ろとなり、公子ゴールチールは浮浪と爲りてカラブリアのシャルヽに隨身し功を立てゝ名を著はせり。是に於て困厄の極に達せしフィレンゼ府民援をナポリ王に乞ひしに、王は此ゴールチールを遣はす。ゴルチール至り、下民の情を察し意を迎へて、右門富豪を抑制して篤く民信を得、千三百四十二年八月府長と爲り、權謀術數を用て民心を煽搖し、九月終身フィレンゼ公に任ぜられ、騎兵を故國佛蘭西より招きて、悉く己に不利なる者を排斥して、專心自家の榮利を營み、毫も府民の爲に盡く

さず。是に於て貴族は益〻威力の削殺せらるゝを憤り、下民は苛酷なる裁斷を受け放縱なる僭主を得たるの外、寸毫の利なきを視て、共に皆ゴールチールを忌み、府民の中期せずして三謀徒を生ず。ゴールチールの之を知り、猜忌を以て下に臨み盛に疑獄を起し、千三百四十三年七月一日府民を捕へて三百人を連坐し、悉く之に死を命ず。府民亦備あり。處刑の日に至りて、全府「民よ自由よ」と叫びて蜂起し、鐵鎖を張り、街砦を築き、瓦礫を拋ちて佛蘭西騎兵を殺傷す。ゴールチール乃ち兵四百を將て宮城に據りしも、資糧の備なくして自ら支へず、奔りて大僧正の邸に隱れ、八月六日夜に乘じて遁れ、エヂチアより輕舟を艤してナポリに奔り、轉にフィレンゼより茲に輸送し置きし財貨を得たり。此に至りて屢〻云へるが如く、名實全く混亂し、ギベリン、ゲルフは最早皇帝、非皇帝派の名目に非ず。教皇、皇帝の尊號は重を半島に爲さず。ゲルフは自由派、ギベリンは專主派と變じて、一たび專主を仰がんと圖りしフィレンゼ府は再び自由政治の民と爲れり。

當時伊太利亞は學術風尚に於て、歐州大陸諸國と趣を異にし、彼諸國には思想哲學起るに當り、此半島には利害興亡の事相緊切なるものありて、自ら卑近なれども、實用に近き軍國の研究起り、學術にても醫藥の方先づ開け、議論話說に典故を用るの風尚ありて古學の研究生じ、復古文學はフィレンゼの產ペトラルコ、ボッカチヨ等を始とし、幾多の學者によりて唱導せられ、爲に却つて天才を沒し創作の見る可きものなかりしも、後世諸國が上代の遺光を仰ぎ得るは洵に其功を多しとなす。唯夫れ此の如き風尚は獨り學界に止らずして、引て政界に及び、尙古崇先の餘、復古政治を起さんとする學者の革命運動を生じたり。羅馬のコラ・デ・リエンジ(Cola di Rienzi)パヂアのヤコボ・デ・ブッソラリ(Jacopo de Bussolari)の企圖は此なり。

コラ・デ・リエンジは千三百十三年羅馬府の陋巷に生る。身賤族に出でたるも博學多識、よく古羅馬の遺事古典に通曉し、知已當世の學界に遍く、秀容雄辯、人をして轉〻敬慕の念を生ぜしむ。時に教皇は外アヂニヨンに在りて、羅馬は主なく、諸區より撰出せる十三頭目(カポリオニ)(Capporioni)と、教皇所任のセヂトルありて府政を掌れども、權勢微弱にして綱紀振はず。オルシニ(Orsini)・コロンナ(Colonna)・サヴェリ(Savelli)諸家は古羅馬の院宮、城壘の殘墟に據りて抗爭闘援す。リエンジ此間に出でしかば、深く古今盛衰の蹟に感慨して、太く世下り時亂れたるを嘆き、濟民救世の大志を抱き、自由

の克復、良政の復興を說き、强族コロンナの外に出でし虛に乘じて、千三百四十七年五月二十日羅馬の大堂に立ちて人民より護民官(Tribuno)に推立せられ、諸貴族を屈從して忽ち府政を奪へり。されどリエンジは素と辯才の學士にして、將略治術に乏しきが故に、一たび端を解きし改革を遂行する手腕なく、よく貴族の衆を擊退せしも、成業に驕りて虛儀空飾に心醉したれば、敎皇の爲には其勢の大ならんことを忌まれ、府民の爲には實蹟の美名に伴はざるを誹られ、數月の後貴族再び起るや、十二月出でゝ聖アンゼロ城に奔り、更にベーメン王カルゝ四世に倚り、千三百五十二年に至て敎皇の下に送らる。依て敎皇インノチェンツォ六世は翌千三百五十三年エジヂオ・アルボルノズ(Egidio Albornoz)を遣して諸僭主の手に落ちたる敎皇領を復せしむ。リエンジ之に伴ひて再び羅馬に至りセヂトルと爲りしが、敎皇の意を迎ふるを以て、施政府民に悅ばれずして騷亂起り、勢窮り容を變じて出奔せんとせしも能はず、千三百五十四年十月八日匪徒の爲に大堂の階前に殺さる。年四十有二。アルボルノズ依て亂後の處分を爲し、羅馬自立の企圖は一場の夢と化して、府民は敎皇を奉還して府の般盛を謀らんとし、伊太利亞諸市府も敎皇の外佛蘭西に在るを樂まず。後二十餘年を經てグレゴリ。十七世また伊太利亞に還れり。敎皇外に在ること前後七十年。稱して『バビロン捕囚』の時代と曰ふ。蓋し上古猶太人のヂブカドヂザル王の爲に巴比倫に移されてより、後居魯王の爲に放釋せらるゝまで七十年を經たる故事に採れり。

是より先、千三百四十三年一月ナポリ王ロベルト殂落す。壽八十。王孫女ヨアンナ(Joanna)位を嗣ぎ、ウンガルン(匈牙利)の王子アンドレアス(Andreas)を納れて駙馬王と爲す。アンドレアスはナポリのシャルゝ二世の子なれば、ナポリ王位に對しては寧ろロベルト王よりも正統の關係を有するも、天資殘忍酷薄なるに、ヨアンナ女王は美にして譎なれば、互に憎惡猜忌して、琴瑟和せず。千三百四十五年九月アンドレアス刺客の手に殪るゝや、世人の疑は忽ちヨアンナ女王と其情人トレントのレヰスの上に在り。ヨアンナ及び故アンドレアス王の從兄弟タレントのロベルト、ヅラッゾ(Durazzo)のカルロ依てナポリ府民を煽唆して女王を追ひ、ウンガルンのレヰス大王は兄アンドレアスの仇を復さん爲に、千三百四十七年伊太利亞に入り、ヨアンナ女王はアヰニョンに奔り、敎皇クレメント六世に投じて情人レヰスと結

婚す。此時恰も有名なる疫癘の流行あり。千三百四十五年伊太利亞に大霖あり て穀登らず。地方疲弊して餓莩路に充ち戸口凋落せしに、適勢猛烈なる疾疫東方より流行して漸次西に行れ、此に及びて伊太利亞に蔓延し、數月にして人民の三分の一之に斃れ、ナポリの府民死する者六萬、ピサは全口の十分の七を失ひ、シエナは舊觀を存せず、フィレンゼは十萬口を失ひて詞客ボッカチ[ヨ]靈筆を揮つて備にその慘狀を描寫せり。世に之をフィレンゼ疫といふ。レ并ス大王の兵また多く損ず。よりて大王は千三百五十一年ヨアンナ女王と和して國に還る。而して民皆死を期して生を圖らず、自利に急にして眼中邦家無く、人情道德地を拂ひ、上下の秩序爲に紛亂せり。然も此恐る可き疫疾よりも更に甚しき毒害を流したるは浮浪の自由結黨なり。半島の亂離久しくして蠻觸を爭ひて精鋭盡き、府市の民苟安を偸みて武に疎く、傭兵を用ひて攻守を決するに當り、北方の帝王侵するもの、毎に國兵を率ゐて至り、半島の借主は利害の關係なき外兵を招きて自家の用に充て、其殘衆剩兵到るところに散在して傭聘に應じ、終に群團を爲し隊伍を編み、傭將(コンドチエリ)(Condottieri)を奉じて剽刼を逞くし、神明を瀆し、倫常を沒し、貧婪殘忍情に任せナポリ浮浪の巨魁たる獨逸人エルチル(Werner)の如きは、自ら神明仁慈惠憐の敵と號し、ウンガルンのレ并ス大王北に還るや、獨逸人ランド(Lando)伯聖汝の僧兵フラ・モリアレ(Fra Moriale)浪士の首領と爲りて大黨と號して半島を横行せしが、千三百五十八年七月始てフィレンゼ兵の爲にスカレラ(Scalella)峠に壞破せられてより勢稍振はず、翌年大黨遂に分裂せり。

フィレンゼは雅典公ゴールチール遁れ去りて後、汲々としてミラノの并スコンチ家に當れり。千三百三十九年八月并スコンチのアッゾ暴に斃じて嗣子なく、姪ルキノ後を繼ぐ。ルキノは機智猾才に富み軍略に通じ、民に臨むを太だ嚴厲なりしが、千三百四十九年一月夫人の爲に毒弑せらる。弟ミラノ大僧正ジアン代りて事を視、前世には繁榮なる自由市府たりしロムバルヂアの十六市を合し、教皇クレメント六世を利用して、ロマニヤの諸市を併せ、千三百五十年十月ペポリ家の兄弟を刺殺して、教皇の代官ジレス・アルボルノッズとボロニヤ市を爭はしむ。教皇嚇怒し、ジアンに親ら來りて罪を謝す可しと命ぜしに、ジアンは將に騎一萬二千、卒六千を將て至らんと應へ威喝して遂に年額一萬二千畝の貢金を教皇に約して、ボロニヤの

收入を奪ひたり。時に千三百五十二年五月なり。蓋しマスチノは歿して後嗣弱く、ピサはギスコンチに通じ、シエナ、ペルジアは論ずるに足らず。獨立自由市府滅して、ギスコンチ家の勢北方に盛なり。千三百五十一年晩夏ギスコンチ家のボロ少ニャ鎮將大兵を率て急にッスカニアに入る。フィレンゼ人よく防ぎ、ムゲロ(Mugello)のスカルペリア(Scarperia)莊の如き、堡壘完からず、甲兵二百歩卒三百に過ぎざるもミラノ軍を扼すると二ヶ月に亘りて下らず。ボロニャの將乃ち退く。

情勢よりいへばエチチア、ゼノヴ兩共和府は此際フィレンゼの與國たる可し。而も兩府は海東商業の競爭によりて相抗敵してフィレンゼを助くるに遑あらず。ゼノヴ人はコンスタンチノポリスの郊外ペラ(Pera)、クリメア半島のカッファ(Caffa)に殖民地を設けその殷富母府に讓らずしてカンタクッェネ(Cantacuzene)帝と爭ひて帝都を圍み船艦を燒き、又クリメアの土耳古人と戰ひ、タナ(Tana)、タガンロク(Taganrok)にて羅甸人と通商するを禁ぜんとす。依てエチチア人は帝及びアラゴンのペトル四世と同盟して之に敵し、千三百五十二年二月十三日ゼノヴの水師提督バガニノ・ドリア(Paganino Doria)は六十四船を以てエチチア督ニコロ・ピサニ(Nicolo Pisani)の水師七十八艘とボスフォルス海峽に戰ふ。海狹く風暴れ怒濤湧涌、戰船蕩搖し、夜暗くして舷艫相摩ち、兩軍の損失太しく、天明に及びてピサニの師勞れて戰ふ能はず、カンヂア島に走りて和を請へり。然るに翌年八月二十九日兩府の水師復サルヂニアのロイエラ(Loiera)海上に激戰せしに、ドリア在らずしてゼノヴ軍敗れたれば報復の念に驅られて、十月府を舉げてミラノ公ジャン・ギスコンチに歸せり。ジャン乃ちドリアを擧げて水師を督せしめ、千三百五十四年十一月三日ドリア再びエネチア艦隊をモレアのサピエンッァ(Sapienza)灣に破る。ゼノヴ、エネチア抗戰の爲にジャンの注目を免れしはッスカニアにして、ゼノヴ報復の前一月ジャン斃し、三姪協議して之に代りて事を執りしも、長姪マテオ(Matteo)は無能にして、翌年毒弑せられ、二弟バルナバス(Barnabas)ガレアゾはロムバルヂアを分ちてミラノに共治し一族ボロニャ鎮將オレッヂョ(Oleggio)のギスコンチは自立しゼノヴ亦畔きて、千三百五十六年十一月ミラノ鎮兵を放逐したり。

始めヨハン王の子ベーメン王カールは一時伊太利亞ギベリン派の領袖たらんと志し、レギス帝在世中獨逸の撰侯より羅馬王に推されたり。エネチア人の大に

ゼノヴ人に破らるゝや使を遣してカール王を伊太利亞に迎へて非スコンチに抗せんとす。カール乃ち招に應じ、從者三百人を具して至りしも、王者の虚榮ありて實力はミラノ公に及ばざれば、其調停は非スコンチの爲に聽かれず。千三百五十五年カールはミラノにて王冠を加へ、次で羅馬にて皇帝の冠を受く。フィレンゼはカールの南するを見て、心安んぜず、五月十萬疇を献じて其干渉を絶ち、カストルチョの沒後賣買讓與攻圍の禍變交一踵き起りしルッカは帝にピサを屈して市民の自由を恢復せんとを請ひしも、帝は顧みずして伊太利亞を去れり。故にカール帝の南下は毫も伊太利亞の形勢を變ぜず。非スコンチ兄弟はモントフェラト伯バ非アの豪族ベカリア(Beccaria)と戰ふ。時にバ非アには復古的改革によりて名を羅馬のリエンジと均くせし聖アウグスツス派の僧ヤコポ・デ・プソラリあり。天資熱誠、學博く詩を善くしペトラルカの友たり。千三百五十六年五月非スコンチの軍來り攻むるやプソラリ自ら兵を指揮して之を擊退し命を發してベカリア族を市外に逐ふ。ベカリア族乃ち非スコンチに通じて、千三百五十九年又バ非アを圍む。バ非ア勢屈しプソラリは市政の自由、遂客の保護、守備の保存を約して市を非スコンチに致し、秋毫も自ら求むるところなくしてエルチェリ(Vercelli)の僧庵に幽死せり。

ピサはさきに海上の覇柄を失ひ、サルヂニア島を失ひて勢挫けしも、なほ武力を以て重を爲せしに、千三百四十二年雅典公との條約以後フィレンゼ人はピサに海關を設けて商業を營み、ピサ共和市に民主政黨の勢盛にして、豪商フランチェスコ・ガムバコルタ(Francesco Gambacorta)その領袖となりてフィレンゼに依頼せり。ベルゴリニ(Bergolini)黨是なり。ギベリン派の名族之を見てゲーラルデスカ(Gherardesca)伯を擁してラスパンチ(Raspanti)黨を組織し、商業政策を排斥して征略を主張し、非スコンチ家と通謀してフィレンゼの商業を妨害し、以てピサ市民の自由獨立の精神を抑壓せんと志し、千三百五十七年フィレンゼの海關商業を脅かす。フィレンゼ人その情勢を察知して戰を避け、貿易稅關をテラモネ(Telumone)港に移したれども、是より軋轢次第に加はり、千三百六十二年戰端終に開け、ミラノのベルナバス・非スコンチは兵力を以てピサを助く。是より先英佛兩國の交戰ありて浮浪の徒四方を横行せしが、恰も此際兩國の間に和約成りて浪士其地を逐はれしかば、英人サー・ジョン・ホークウード(Sir John Hawkwood)一團の浪士を率ゐて伊太利亞に入る。ガレアゾ、

ヰスコンチの子ジア・ガレアゾ・ヰスコンチは佛蘭西王ジョアンの女イサベラに尙しその妹ヰオランテは英吉利王エドワード三世の王子クラレンス公リオネル(Lionel)に歸ぎ、ヰスコンチ家は西歐兩大國の後援ありて勢大なれば、ボークウードは之に備聘せられて、ピサの援軍に加はり剽略を擅にし、疾疫亦之に伴ひて行はれ、害毒を流すこと十餘年前のそれに減ぜず。ピサ、フィレンゼともに疲弊し、千三百六十四年八月和約成れり。而もピサは三萬畝の償金を支拂ふを得ずして、ジョヴニ・アニェロ(Gio. Agnello)より其金を得て之を市長たらしめ、アニェロは陰にヰスコンチの意を奉ぜんことを約し、ピサも陽に僭主を戴くに至れり。

是に於てヰスコンチ公兄弟一家の威望は旭日の如く、內富を積み兵を足し、外英佛二王室と婚を連ねて援を引き、諸市府の僭主を隷督して專恣橫虐を敢て憚らず下民庶を虐げ、國事犯罪者の處刑期を四十日間に延長して、日毎に殘忍なる拷問を用ひ、連累を摘發して峻酷を極むれども、自家の朋黨に對しては極て寬大に、浮浪の士を遇するには頗る懇篤に其侵略剽掠を默許したりしかば、アペンニヲ山邊のギベリン貴族翕然として之に向ひ、ツスカニアも亦ロムバルヂアと同じく風靡せんとしゼノヴ・エヲチアは半島の利害を顧みず、通商を以て地歩を海外に作ればフィレンゼは殆んど孤立して外援なく、形勢岌々乎たり。教皇ウルバノ五世は羅馬に歸らざる可からず。皇帝カール四世は伊太利亞の浮浪の禍を斷ち僭主の專恣を制せざる可からず。千三百六十七年ウルバノ歸りて皇帝ウンガルン王、バヅア・プェラ、マンチェア諸公、ナポリ女王と同盟して、ヰスコンチに抗せしが、翌千三百六十八年五月カール帝の來るや、たゝ虛喝を以て巨額の黃金を誅求し、却つて、ヰスコンチと和し半島を巡幸して黃白を求むるに過ぎず。而も尙幸に自由の爲に機會を與へしことあり。九月帝ルッカに幸してジョヴニ・アニェロをピサ、ルッカの主と認め、翌千三百六十九年四月勅令を發してルッカ市の獨立を認可して黃金を要求し鎭兵を置きて去り、後一年を經てルッカはフィレンゼ其他の同盟市の援助により、三十萬畝を皇帝に獻納して獨逸鎭兵の撤去を得、斯に一ゴンファロニア、十アンチアニより成るシニ、ヨリアを置きて共和政治を復興したり。而して教皇ウルバノ五世も力を極めて、ヰスコンチの强大を挫かんとし、二使節を遣はしてバルナバスを破門せしも其効なかりしかば、皇帝去りて後、千三百七十一年九月自ら亦アヰニヨンに去り、次で其地に

崩ず。グレゴリヨ十一世其後を傳承しフィレンゼと連合してボスコンチ家と拮抗す。然るに教皇領の事を掌知せる僧官等は反つてッスカニアを奪はんと謀り、千三百七十五年バルナバスと休戰を約し、ホークヴードの部下白黨の浪士を遣りて急にフィレンゼを襲ふ。フィレンゼ已を得ずして假にバルナバスと連合しシエナ、ルッカ、ピサと同盟して教皇領諸市の自由自立の氣を煽揚し、八將を撰びて軍を督せしめ、旗上に自由の字を繡して徽號と爲して戰ふ。呼んで軍を自由軍、八將を八聖といふ。斯くて攻戰連年グレゴリヨ教皇羅馬に入りてバルナバスと通じ、千三百七十八年春サルザナ(Sarzana)に會合せしもバルナバス議長と爲りて償金をフィレンゼに要求し、議論紛出して決せず。適〻三月廿七日グレゴリヨ教皇崩じて議破れ、忽にして教皇分立の大問題起り、伊太利亞半島の大革命とは爲れり。

顧れば千三百五年以來羅馬教皇の羅馬に在らざるを前後七十年。基督教諸國は以て教界の汚辱と爲すも獨り、佛蘭西は教皇を管下に屈し得て甚だ揚々たりしに、今グレゴリヨ十一世羅馬に崩じて、君牧師の選擧會を教皇の崩地に開く先例なれば、佛蘭西大に驚きしも及ばず。千三百七十八年四月果然伊太利亞人バリ大僧正バルトロメオ・プリニアニ(Bartolomeo Prignani)撰に當たりて教皇と爲り、ウルバノ六世と號す。ウルバノ教皇は剛愎自尊君牧師を侮蔑し、ナポリ女王ヨアンナと和せず。君牧師等憤りて此選擧を無効と宣し、九月別にゼネヴ君牧師ロベルトを立てクレメント七世と號せしめ、教皇廳をナポリ府に置き、ヨアンナ女王の保護を受け、次でアヴニヨンに移りて羅馬と拮抗す。羅馬教皇ウルバノは之を怒りてクレメント教皇を擁立せし君牧師の職を遞ぎて欠員を補充し、ナポリ女王廢位の宣を下す。ヨアンナよりてブルンスキク(Brunsuwick)のオットーと婚し、佛蘭西王ジュアンの王子アンジューのルイを王嗣と爲し援を引きて教皇に抗對す。ウンガルン王ルドキヒは伊太利亞の亂るゝを見て、王弟アンドレアスの爲に怨を報ぬんと欲し、王姪にしてヨアンナ女王の爲には從弟なるヅラッゾ(Durazzo)のカールに兵を授けて伊太利亞に入りて羅馬教皇を助けしむ。カール乃ち南伐して向ふ所敵莫く、千三百八十一年七月ナポリ府に入りてヨアンナ女王を捕へ、幽囚九ヶ月の後之を毛褥の下に局殺し、次で千三百八十三年アンジューのルイ薨ぜしかば、ナポリ王國はカールの手に落ちたり。然るにウンガルン王ルドキヒも亦之と前後して殂落せしかば

カ！ルは北に還りて王位を爭ひ、ナポリ主なくして、また亂れ、教皇も一たび分離してより又合一せず。ウルバノ教皇は新ナポリ王カールと和せず、且羅馬府民にも忌まれてゼノヴァニ近れ、千三百八十九年十一月其地に崩じ、後五年を經てアヴィニョンの教皇クレメント七世崩ぜしも基督教界は一時裂崩して兩皇の分治に歸せり。

羅馬教皇、ナポリ王家の禍亂相纏綿せる間は、千三百七十九年皇帝カール四世崩じ翌年佛蘭西王シャルヽ殂落し、北方の强王なくして伊太利亞は幸に外患を免れしも、内憂忽ち起れり。北方伊太利亞に并スコンチ家の勢駸々として盛なるやエチチア、ゼノヴァ兩共和國は常に半島政爭の局外に立ちて東方の海島に競爭し、此に至りてキプルス島を爭ふ。初めゼノヴァ人島中に商業を營みしが、事を以て島人の怨を買ひて虐殺せらる。ゼノヴァ共和府變報を得て問罪の師を發し、千三百七十三年之に克つ。エネチア人機乘ず可しと爲し、嶋民を助けて千三百七十八年ファマゴスタ(Famagosta)を圍み、ウンガルンのルドヰヒ大王ハダルマチア海岸を克復せん爲に、パヅア公フランチェスコ・ダ・カララ(Francesco da Carrara)はエネチアの强大を抑損せんがために皆ゼノヴァと相應じ七月ゼノヴァ、エネチア兩共和府の水師狂風怒濤の間にアンチウム(Antium)に戰ふてゼノヴァ軍破れ戰端此に啓く。翌くれば千三百七十九年五月の末ゼノヴァの將ルチアノ・ドリア(Luciano Doria)報復の爲にアドリア海に入り、ポラ(Pola)に戰死せしも戰勝ち、エチチアの水師提督ヴィットリ・ピサニ(Vittri Pisani)は敗挫の罪を負ふて獄に下ださる。エチチアの鹹潮を擁する連島はアドリア海を防ぎて幾多の海門を爲し、由て以て潮中の諸地に達す可し。中に就きて其最南に在りてエチチア府の外門を爲すものをキオッヂア(Chioggia)°(Chiozza)海門となす。ゼノヴァ軍は主將戰沒せしも戰勝ちたれば、更にピエトロ・ドリアを推して將と爲し、直ちに進みて、八月六日キオッヂア海門に抵る。時にパヅア公フランチェスコ後より至り、ゼノヴァ軍と呼應し、海門の市を陷れ、エチチア海上の門戸爲に開く。よりてピエトロ・ドリアは聖マルコ寺前の銅馬に鞭たずんば已まずと誇り、エチチアの運は風前一穂の燈光に似たり。府民此を以て奮慨し、ヴィットリ・ピサニを獄中より徵して、再び新艦隊の總督と爲し、レバントに派遣せし船舶を回集してカルロ・ゼノ(Carlo Zeno)に授けて并ットリを助けしむ。千三百八十年一月ヴィットリの軍敵を迎へ進みて諸海門を鎖封し、ゼノヴァの船艦四十八艘水師一万四千をキオッヂア海門に

圍むゼノヴ乃ち船艦を增發し、バッファ公亦力を盡くして之を救はんとせしも、包圍密にして內外通ぜず。六月の末ゼノヴ軍和を請ひ、エチチアも陸戰に利を失てトレヂオンを奪はれしかば、翌千三百八十一年八月に至りて、兩共和府和を講じて、悉く舊態に復せり。唯此結果の最もエチチアに痛切なりしは、ダルマチア沿海のウンガルン王に割讓されしことにて、爲に共和府は悉く大陸方面の領地を失ひ再び湖灣群島の間に蟄せしも、翌年ウルガルン王殂落ありしかば、隙を得て復沿海を侵略し幾ならずして舊勢力を恢復せり。然るにゼノヴは此一役後內亂續き起り、ヂスコンチの詐略に陷りてまた振はず、佛蘭西王シャルル六世に依賴するに至れり。

さきに云ひし如く、フィレンゼは彼の軍中の八聖將を推し自由軍を起して外大にヂスコンチと抗敵せしが、千三百七十八年サルエストロ・デ・メヂチ(Salvestro de' Medici)撰ばれて、ゴンファロニエレと爲るや內訌破裂せり。抑廣云ふが如くフィレンゼ府は民主共和政なれども、ゲルフの大族右門政務に當りて激烈なるゲルフ黨と溫和なるゲルフ黨とに分裂し、後者は政權を削奪され居りしに、八聖將は此溫和黨より出で、今またサルエストロ之より出でゝ溫和黨の勢盛となり、其結果一面にはゲルフ黨を始め、アルビッヂ(Albizzi)ソデリニ(Soderini)等の舊貴族富庶の一黨起り、一面には八聖將、メヂチ等久しく政治以外に放逐され居たる不平家團結して一黨と爲りて、互に拮抗し、サルエストロは從來の寡頭政治に一痛擊を加へて、貴族を政治以外に放逐する新法案を提起し、種別議會に於ては失敗せしも、大議院は通過し、下民悅喜してサルエストロの改革意見を貫徹せんと圖れり。蓋し當時フィレンゼの民種は增加して七大種、十四小種、通じて廿一種ありて、獨り府政に參與し得るも、大多數の民は勞働者にして、一朝大事起り警鐘急を報じてバリアメントに召集せらるゝにあらざれば、政治に容喙する能はず。其多くは羊毛商の下職なり。此等の勞働者を汎稱してショムピ(Ciompi)といふ(佛蘭西語仲間(Compère)の訛轉ならん)。此に於て此ショムピは小種も大種と均しく政權を分つ可く、自己等も亦一種を作して府政參與權を得んと要請し、其密謀暴露してシニョリアの耳に入るや、且恐れ且奮ひ、七月二十三日忽ち蜂起して政廳を襲擊し、梳毛奴ミカエレ・ヂランド(Michaele di Lando)は弊衣跣足、ゴンファロニエレの旗を擁し、衆を麾きて進み、『政殿は卿等の政殿なり、府城は卿等の府城なり、卿等何をか爲さんと欲する』と叫べば、衆喝采して之に和し、

ミカエレを以てゴンファロニエレと爲す。八聖將は此變亂によりて舊政府顚覆したるを慶し、動亂に乘じて自黨中よりプリオルを出して新シニョリアを組織せんとす。ミカエレ聽かずして、自ら大種より二人、小種より二人、勞働者の新に組織せる新四種より四人のプリオルを撰出して府政に任ず。而もシュムピは尙ミカエレ豪右に媚附すと爲して悅ばざりしが、實にミカエレはサルヴェストロの一黨と氣脈を通じて好誼を結べるにて、其職に在る、よく下民勞働者を制御して一指をだも動かさしめず。政權は七大種十六小種の手に歸して勞働者の利は尙少く小商の得るところ多し。千三百八十二年に至り下民憲制改革の委員(Balìa)を擧げて、悉く革命以後の新制を廢停し、ミカエレ・デ・ランド以下を逐ひて、反つて貴民(Nobili popolani)政治の世に復したり。

千三百七十八年八月ガレアゾ・ヴィスコンチ薨じて、ミラノのヴィスコンチ家に內訌起りぬ。ガレアゾの子ジャン・ガレアゾは佛蘭西王女イサベラに尙して父の後をつぎしが、伯父バルナバスが窃に其領地を奪て已の諸子に分與せんとするを知り守衛を增して自ら護り、バヴィア城內に近隱し、僧侶を會し祭儀に耽り、深く韜晦して怯懦を粧ふ。バルナバスの心漸く弛み眯稍怠る。ジャン言を巡拜に托してミラノを橫ぎりてバルナバスに會し、捕て之れを幽殺し、代りてロムバルディアに君臨す。時に千三百八十五年十二月なり。ジャン乃ち伊太利亞征服の第一着として先づエロナのスカラ家、パヅアのカラヽ家を仆さんとす。スカラ家は衰ふるを已に久しきもカラヽ家はフランチェスコ英明にして隆運未だ傾かず。エネチアはカラヽ家の曩にゼノヴァと連合して來寇せしを怨み、ウンガルン王の殂後、エロナのアントニオ・デラ・スカラに資糧を給してパヅアを攻めしむ。フランチェスコ敵する能はずして救を呼應してパヅアを圍み、千三百八十八年十一月之を陷れ數日の內にトレヴィソを略し、ヴィスコンチ家の勢海に達し、ミラノの威ロムバルディアを掩ひ盡くし、ジャン・ガレアゾは將に進んでツスカニアに出でんとす。パヅアのフランチェスコは戰破れて獄中に毒死したるも、子フランチェスコ・ノヴェロ(Francesco Novello)はアスチの敵地を脫して獨逸に入り、故バルナバスの女婿たるバイエルン公の復讐の意を動かしてそ

の援助を得、千三百九十年六月パヴィアを復す。フィレンゼは兢々としてジアンの南下を恐れしが、パヴィアの北に起るを見て意を強くし、復、ジョン・ホークウードを擧げて將に任じ、ミラノの傭將ヤコボ・デル・ヴルメ(Jacopo del Verme)に敵せしめ、佛蘭西よりアルマナク(Armagnac)伯を招く。而も伯は千三百九十一年七月ヤコボの爲にアレッサンドリアに擊破せられて斃じ、フィレンゼ軍はホークウードの盡力によりて幸に全きを得たりしも、戰役久しく民、命に勞れしを以て、千三百九十二年一月和をジアンに求む。獨逸人はヴスコンチの勢、北伊太利亞に強く帝威を凌壓して貢献の道を絶塞するを恐れ、羅馬皇帝エンセスラウスに迫りて戰をジアンに宣せしむ。伊太利亞のゲルフ黨は帝の能く爲すなきを慮りて應ぜず。帝果して內訓をジアンに下し黃金十萬跡を受けて、千三百九十五年五月ミラノ以下二十五市府領を併せてミラノ公國と爲し、ジャン・ガレアッゾをミラノ公兼パヴィア伯と爲して、子孫世襲せしむ。パヴィアは伊太利亞の古都にして歷世ミラノの敵たりしゆへ、別に立てゝ伯領と爲せしにて、ミラノ公國は即ち三百年前光榮ありしロムバルヂア同盟の故地に外ならず。然るに星霜移り時變じてヴスコンチ家此遺地に據りて今や公然正統の君公と爲りたれば、昌隆の運益〻旺盛を極む。之に依りてゲルフ黨は佛蘭西王シャルゝ六世がゼノヴの君を兼ね、オルレアン家はアスチを領せる緣に依り、シャルゝ王を奉戴してミラノ公の對敵と爲さんとせしに、王は狂燥にして國中亂れ、千三百九十六年土耳古の樓里丹バジャセトとニコポリスに戰ふて大敗し、內外多事にして力を伊太利亞のゲルフ黨に假す能はず。千四百年八月皇帝の施政に平ならざる獨逸の撰侯はエンセスラウス帝を廢してルプレヒトを立つ。ルプレヒト立ちてフィレンゼ政府カラヽのフランチェスコを助けてミラノ公を伐ち千四百一年十月皇帝ミラノの將軍ヤコボの爲にブレッシア附近に破られ、帝身を以て遁れしより、ピサ。ルッカ、ペルジア。シエナ相率ゐてミラノ公に歸し、フィレンゼは海に至るの途を絶たれ、商業爲めに廢絶して、有名なる自由共和府も殆んど斯に亡びんとす。適〻疾疫また大に行はれて、半島知名の政治家名士多く斃れ、ミラノ公ジャン・ガレアッゾ之を恐れて、マリニャノ(Marignano)城に入りて自ら守りしも及ばず、千四百二年九月三日疫に感じて黃土の客となりたり。

十四世紀の伊太利亞は實に戰國分爭の世なりしと雖も、富奢の進步は洵に驚く

可きなり。蓋し英佛兩國の戰起りて伊太利亞の諸銀行は軍資を貸出し、其他諸國へも關稅を擔保として金幣を貸與し、富を積み、權勢を私し、奢侈豪華の風競ひ起りて、君公まづ外來舶載の美味佳釀に飲食し、新渡輸入の盛粧麗服を用ふれば、其下自ら靡然として慕傚す。故に素朴敢往の氣魄地を拂ひ、身兵を執りて家を守り國を防ぐの勇無く、加るに亂離年久しくして戰術進歩し、攻城野戰時に數月に亘れば市民は生業を營むの間を得ず、野夫は耕耘の田園を荒蕪に委し、僧主將公は能く其間の情實を知り、且外兵の政權爭奪に利害の關係なきを得として、頻りに傭兵を用ひて、費費を領内に課し、或は之を貯蓄し、支出の典保、息率の平均を維持し、後世の公債擔保の組織起る。而して始め傭兵は專ら外人なりしが、此世紀の末葉に及びては國人にして戰術闘法を以て職とする者生じ、有名なるバルビアノ(Barbiano)伯、アルベリゴの聖ジョルジョ(Giorgio)團起り、エルメのヤコポ以下神出鬼沒の軍師を出だし、又磁針、印刷と共に近世劈頭の三大發明の一なる火藥の發明使用起りて、戰法上に大革命を來たし、ジャン・ガレアゾの軍中には大小の野戰砲を具ふるに至れり。

また十四世紀の伊太利亞は文學史上の『三百』時代たるを忘る可からず。コンスタンチノポリスの朝廷、土耳古人の脅迫を受けしより東方の學者或は援助を乞はんが爲め、或は亂難を避けんが爲めに西する者尠からず。爲めに此世紀の中葉より伊太利亞には希臘の古文學復興し、中に就てフィレンゼの詩人フランチェスコ・ペトラルカ(Francesco Petrarca)千三百四年生、千三百七十四年歿最も力を復古學に用ひ、次で同府の詞客ジョヴァニ・ボッカチョ(Gio. Boccacio. 千三百十三年生、千三百七十五年歿)は更に一層の熱誠を以て希臘文學に盡せり。ペトラルカは其父、詩宗ダンテとフィレンゼを逐はれし時、ヅスカニアのアレッゾ(Arezzo)の獄中に生る。初め法學に志せしも年壯にして絶世の美人ラウラ(Laura)の艶容に心醉し、抒情の歌曲數十篇を作りて名を文學史上に留めたり。ボッカチョは初めナポリに遊びて航海術を修めんとせしも文學に耽りて志を變じ、其國王の公主アリアを慕ひて作り贈りし物語は純粹のヅスカニア語にて、當世の汚濁戾倫を描寫したる『十日物語(デカメロチ)』(Decameron)最も著はれ、文章を以てダンテの詩篇と對稱せらる。此二人最も篤く交りしかば、ペトラルカの歿するや、ボッカチョ亦哀傷して逝けり。蓋しダンテ及此二人の諸作は『三百(トレチエント)』時代伊太利亞文學に於ける三絶にして、又古今天下の珍たり。而して此三大家皆

フィレンゼに出で、此他伊太利亞紀年史家の祖たるマラスピニ、史家ジョヴニ・マテオ・フィリッポ・ヴラニ(Filippo Villani)の如き亦皆フィレンゼの人なり。是實にメヂチ家の保護によりて此盛を來たせしにて、此世紀の末葉コンスタンチノポリスの學者マヌエル・クリソロラス(Manuel Chrysoloras、千四百十五年頃歿)も此地に來り、帷を垂れて徒に授けバヴア、羅馬等に巡講せしより、希臘古文學の復興は益〻長足の進歩を爲せり。是伊太利亞『三百』(トレチエント)時代文學復興の概況なり。

第六章　諸强の角逐

(千四百三年乃至千四百九十二年)

衰運の推移。ジアン・ガレアッゾの歿後、ミラノ公國の分崩。パッアの落城。ピアの滅亡。ナポリ王ラヂスラウスと羅馬教皇分離問題。コンスタンツの宗教會議。フィリッポ・マリアの苛政復興とフランチエスコ、カルマニョラの進退。フィレンゼの内情とメヂチ家の興起。ナポリのアルフォンゾ大王。フランチエスコ・スフォルザのナポリ公位繼承。羅馬教皇領。アンジューのレネの失敗。メヂチ、スフォルザ兩家の盛衰。土耳古の西侵とエネチア及び伊太利亞。プラト、フェラヽ、セノヴの内亂。パジの陰謀。パジ變後の形勢。ナポリ。ミラノ。フィレンゼの鼎立。和平十二年。ロレンゾ・デ・メヂチの歿去。

畢て諸共和市府の競ひ起るや、人は自由の重んず可きを知りて戰ひ道の行ふ可きを論じて爭ひしが、時移り星換りて情勢變じぬ。十二世紀にナポリ・ガエタ・アマルフィの三共和府覆滅して以來、ナポリ王室の濫政に屈せし民は愛國の誠意少く、十

三世紀にゲルフ・ギベリン兩黨の爭激しく、貴族法令を蹂躙してより、ロムバルヂアの諸市府相尋で僭主の暴手に陷り、正邪の別なく朋黨の異を立てゝ相凌轢し、十四世紀に入りては權勢榮譽は凶惡奸猾の徒に私せられて、信に背き義を沒し、友を賣り骨肉を殘して慚ぢず、譎智詐略、唯利を射、勢に附きて後れんことを恐る。頽風衰勢の急、轉石の崖を下るが如し。此に至りて北方の重鎭たるミラノ公ジャン・ガレアッゾ・ヰスコンチ暴に病に斃る。十五世紀の運豈トし難しとせんや。

ジャン・ガレアッゾの薨ずるに臨み、長子ジャン・マリア、年甫めて十三、ミラノ公を襲ぎ、次子フィリッポ・マリアは年十二、バヰア伯を繼ぎしも、皆幼冲なるを以て、强武を賣りて地歩を作りしパンドルフォ・マラテスタ(Pandolpho Malatesta)。ファチノ・カチ(Facino Cane)。オトボノ・テルゾ(Ottobono Terzo)等に遺命して、夫人カタリナ、寵臣フランチェスコ・バルバヴラ(Fra. Barbavara)と與に二公子を輔翼せしむ。カタリナはバルナバスの女なり。フランチェスコ之に遵ず。諸將心服せず。ファチノはアレッサンドリアに、オトボノはパルマに、パンドルフォはブレッシアに據りて自立し、ヰスコンチ家に傾仆せられし諸家諸黨競ひ起りてカタリナに叛く。時に北伊太利亞に獨立せる君公はサヴォヤ伯、モントフェラト侯、バヅア、フェラヽ、マンチュアの三君あるのみ。中に就きてバヅア君フランチェスコ・ダ・カラヽは十餘年來ゲルフ派に屬して、フィレンゼの黨與たりしが、ミラノ公の薨後の亂に乘じて、アントニオ・デラ・スカラの一子グリエルモ(Guilielmo)を招きて、千四百四年四月、共にゼロナを取り、グイリエルモ暴に歿するや、フランチェスコは其二子を捕へて市城を奪ふ。ゼネチアは從來專ら心を商業航海に用ひて半島の政爭を度外視せしが、ロムバルヂアの亂るゝを見て、亦經略の志を起し舊敵バヅアの興隆を惡み、ミラノ公夫人を助けて之を伐たんとせしも、夫人顧みざりしかば、ゼネチアは自ら傭兵九千騎を發してバヅアを攻め悉く諸壘を陷れ、翌千四百五年六月フランチェスコをバヅアに圍み、次子ヤコポをゼロナに下す。士民亂を避けてバヅアに入る者多く、市中疫癘行はれて死者四萬に上り、フランチェスコ父子勢屈して出で降る。ゼネチア軍乃ちフランチェスコ父子三人を十評議員の手に委し、千四百六年一月之を獄裡に殺し、賞を懸けてカラヽの遺孽を求めて後日の禍根を剔くさんとし、且トレヰゾ・フェルトロ、ヰチェンザを服して、ゼネチアの勢大に振ふ。之に反してミラノ公夫人カタリナは殘虐意に任せ情を肆にし妄に士を害ひ民を

屠りて、衆の疾惡を受け、千四百四年十月獄裡に毒弑せられ、情郎バルバヴラは出奔し、ファチノはミラノの實權を掌握し、ジャン・マリア公の聲望地に墜ち、公國土崩瓦解し、シエナ、ペルジア、ボロニヤ相前後して自立し、ルッカは中立を守り、アペンニネの諸貴族はフィレンゼの威に服したり。獨りピサは故ジャアン・ガレアッゾの庶子ガブリエル・マリア(Gabriel Maria)の手に在りてフィレンゼに抗し、ゼノヴ駐在の佛蘭西代官ジュアン・ブシコールト(Jean Bucicault)の保護を受く。蓋しゼノヴはフィレンゼのピサを取りて海上權を爭はんことを恐れしも、フィレンゼは必ず之を得んと欲して爲にパヴアの覆滅を救ふに遑あらず。然るにブシコールトは四十萬詠にてピサをフィレンゼに賣り、利をガブリエルと分たんとす。ピサ市民驚きて蜂起し、鎭屯の兵を逐て自立せんとす。ブシコールト恐れ急に賣價を二十萬六千詠に低減して金を受けガブリエルを誅殺して利を專らにす。市民愈憤り、奮起して城を奪ひ、フィレンゼを拒ぎ嬰守一年に亘りしも、力盡き、千四百六年十一月城市陷りしも、尙ッスカニア最古の自由共和市の名を惜みて意氣屈せず、右族門閥はフィレンゼの厚遇優待を斥けて、ルッカ、ザルヂニア、シチリアに去り、壯年客氣の勇士は故地を捨てゝ浮浪の士と爲り所在の獨立戰爭に加はりて自適と爲し、ピサの獨立滅びて商業廢れ、民戸凋落して繁榮の昔は空しく夢と過ぎぬ。フィレンゼ乃ちピサの衰弊を救はんが爲に外人を此地に移し、宗教分離の終結會議を此に開かしむ。

始め、千三百八十六年ヅラッゾのカール三世の子ラヂスラウス(Ladislaus)年市めて十歳にして、ナポリ王位を繼ぐ。アンジュー皇ルイの子ルイ二世幼にして其黨に推されシチリア王の尊號を得て之と爭ひ、十四世紀の末葉南伊太利亞は二幼主の亂と爲り、ナポリ王國の勢漸く微なりしが、千三百九十九年佛蘭西統のルイ破れてラヂスラウス王南伊太利亞を得たり。然れども一たび分離せしシチリア島は尙王國に合せずして、王はシチリア王の空名を有するのみ。從て後來兩シチリアの奇名を生ずるに至れり。而も分裂はナポリ王國のみならず、教皇も兩統分立以來合一せず。基督教徒は之を耻ぢて頻に兩統の融和を圖れども、ラヂスラウス王は、若し佛蘭西人にして教皇と爲らば、ナポリ國境の亂れんことを慮りて、兩統の合一を妨げ千四百八年羅馬を取り次でペルジアを陷る。兩教皇も亦頑守して相下らず。君牧師等は遂に耐ふる能はずして、千四百九年六月新にフィレンゼに歸せしピサに

會集して、兩教皇ベネヂクト十三世、グレゴリー十二世を廢して別にアレッサンドロ五世を立つ。兩教皇之を認めずして、三教皇鼎立す。ラヂスラウス王其虛に乘じてツスカニアに入り、アレッゾ・シエナ附近を剽略し、コルトナを奪ふてフィレンゼを動かす。千四百九年フィレンゼ佛蘭西より、さきに破れかへりしルイ二世を迎へて、又ナポリ王國を爭はしめ、ブラッチー・ダ・モントネ(Braccio da Montone)を將とす。ブラッチーはペルジァの貴族にしてバルビアノ伯アルベリゴ門下の名將、剛强にして果斷、最も大兵を動かすに妙を得て、同門のロマニアの一農夫スフォルザ・アッテンドロ(Sforza Attendolo)が冷靜細心よく兵を用ふると並び稱せられ、半島の浮浪は皆二將の旗下に集る。稱して、ブラチェスキ(Bracceschi)スフォルゼスキ(Sforzeschi)といふ。ナポリ王ラヂスラウスよりてスフォルゼを聘してブラッチーに當らしむ。既にしてルイ二世は半島に入りてゼノヴ駐在の代官ブシコールトに賴りしも、九月市民叛きてナポリ王に應ぜしかば、北歸の途杜絕せんことを恐れて北にかへる。然れども將軍ブラッチーはナポリ軍に勝ち、千四百十年一月羅馬に入り、府民をしてアレッサンドロ教皇を奉認せしめ、教皇の分離を合一してナポリ王の横行を防止せんと力め、アレッサンドロ教皇遂に崩ぜしかば、更にジョヴァニ廿三世を立つ。アンジューのルイ二世は此に勢を得て、再び南下し、千四百十一年五月ラヂスラウス王をロッカセッカ(Roccasecca)に破りしも、スフォルザの鋭鋒に敵する能はず、フィレンゼの圍を受く。ラヂスラウス一たび敗れしも終に羅馬に入り、ジョヴァニ教皇は獨逸に奔りて救をシギスムンド(Sigismund)帝に請ふ。帝は廢帝エンケスラウスの皇子にて、アンジューのルイの女を妃としてウンガルン王なれば、自らウンガルンを爭はんとせしナポリ王ラヂスラウスの敵たればなり。然れども帝は教皇を救はんよりは寧ろ兩統の合一を謀らんと欲し、千四百十四年八月ラヂスラウス王急に病んで殂し、王姉ヨアンナ二世國を承けて內亂起るに乘じ、千四百十五年コンスタンツに宗教會議を開く。伊、獨、佛、英、西諸國のパトリアルフ五人、君牧師三十三人、大僧正二百人、僧正及諸侯伯より其從屬に至るまで來り會し、滯在の外人或は八萬人に及び、背教(カトリック、フィデイ)の鎭壓(Causa Fidei)分派(カトリック、ユニオニス)の廢止(Causa Unionis)教會の革新(カトリック、レフォルマチオニス)(Causa Reformationis)を議決し、ベネヂクト十三世、グレゴリー十二世兩教皇を廢し、ジョヴァニ廿三世をも退け、千四百十七年十一月に至りてマルチノ五世を撰擧し、宗界の教皇分離問題茲に始めて落着せり。

南方王國の英主病に斃れしに當り、北方の一公稍舊業を復するあり。ミラノ公國四分五裂して、カタリナ毒死せし後アレッザンドリアの僭主ファチノ・カネ、ミラノの實權を掌握す。先公の長子ジャン・マリアは淫虐横暴、人肉を以て狗を養ひ人を射殺して樂と爲すに至りしかば、諸方の貴族太く憂へ、千四百十二年五月之を弑す。ファチノ・カネ亦日を同うして卒す。公弟フィリッポ・マリア急に起ちて位を襲ぎ、ファチノの老寡婦ベアトリカ・テンダ (Beatrica Tenda) を納れて夫人と爲し、アレッザンドリアコモ、トルトナ等の地を得て、之を殺し、ピエモンテの勇士フランチェスコ・カルマニョラ (Fra Carmaniola) を拔擢して兵馬を總督せしむ。カルマニョラ乃ち十年を出でずして悉く離畔自立せし小僭主を討伐招降して殆んど故ジャン・ガレアッゾ當時の領土を恢復して、ゼノワを屈し、自ら府政に參與し、フィリッポ・マリアをしてロマニャ、ッスカニアに出でゝ亡父の志を爲さしむ。ナポリ女王ヨアン十二世は二夫に見へしも子無くして、嬖臣ジョヴニ・カラチョリ (Gio. Caraccioli) の言を聽きて王位をアラゴン、シチリア王アルフォンゾに讓らんとせしが、千四百廿三年之と絶ち、アンジューのルイ二世の子ルイ三世を立つ。ミラノ公フィリッポ・マリア。驍將スフォルザは女王に黨し、教皇フィレンゼ府、ブッラチョリミニ卿、カルロ・マラテスタはアラゴン王家を助け、王位繼承の亂は半島戰爭と爲れり。然るに千四百廿四年一月スフォルザはペスカラ (Pescara) に溺れ、子フランチェスコ代りて衆を領し、其六月ブラッチョはアキラの役に戰沒す。衆其子を捨てゝ部將ニコロ・ピッチニノ (Nicolo Piccinino) に歸せしかば、フィリッポ・マリアは時機を失はず、直ちに兵を進めてロマニャに至り、急にフィレンゼに迫り、六たび戰ひて六たび勝つ。フィレンゼ頻に兵を募り十將軍の一人にして有名なる政治家ロレンゾ・リドルフィ (Lorenzo Ridolfi) を遣して、エチチアに同盟を乞はしむ。エネチア應ぜず。ロレンゾ嘆じて曰く「恨むらくは速に圖らずしてフィリッポ・マリアをしてミラノ公たらしめぬ、卿等今フィレンゼを救はずんばミラノ公をして伊太利亞王たらしめんのみ」と。偶〻ミラノの將フランチェスコ・カルマニョラ功高く名盛にしてフィリッポ・マリア公に忌まれ、妻子を捕へられ資財を沒せられ、身を以て遁れ來りて怨を報ぜんといふに遭ふ。よりてエチチア府長フランチェスコ・フォスカリ (Fra. Foscari) 衆議を排してミラノ公を挫くに決し、フィレンゼに同盟す。フェラ、侯、マンチュア、シエナの君民、サヴォヤ公、アメデウス八世皆之に加はる。ナポリ王アルフォンゾは此報に接

して大に悅び、千四百二十六年一月戰をミラノ公に宣し、カルマニョラはマンチュアに甲士一萬六千、步卒八千を募り得てブレッシアを取る。ミラノ公フィリッポ・マリア戰船をポー河に浮べてマンチュア・フェラヽを襲んと謀りしも、千四百二十七年五月クレモナ附近にてエネチア軍の爲に擊破せられ戰船皆燒盡す。依て更にニコロ・ピチニノを司令官に任じ、プラチェスキの精銳を率て、七月カルマニョラをカサルセッコ(Casalseco)に擊たしめしも、天暑く砂塵起りて咫尺を辨ぜず、雌雄決せず。十月公またカルロ・マラテスタを總督と爲し、フランチェスコ・スフォルザ、ニコロ・ピチニノと與に三たびカルマニョラをマカロ(Macalo)附近に邀へしめしに、大に破られ、翌千四百二十八年四月遂に和を約して兵を休む。フィレンゼ其間に兵を出だしてルッカの君を拂ひ、市民内より之に應ず。ニコロ・ピチニノ之を見て、千四百三十年の募兵を將ゐてルッカを克復せしかば和平復破れたり。而して勝敗の運茲に一變して利運カルマニョラを去り、千四百三十一年五月十七日、カルマニョラはスフォルザの爲にソンチノ(Soncino)に破られ、千六百騎を失ひ、散卒を收めてポー河に至りエネチアの水師を援けんとせしに、水師對岸に破れて復た及ばず、馬匹病を得て騎兵用を爲さず。ニコロ・ピチニノはツスカニアに入寇し、ルッカはフィレンゼに叛く。エネチアは古來人民兵を執らずして牙壽に長じたれば、情勢を悉くさずして敗績を見てカルマニョラ異志を抱けりと爲し、陽に尊重厚遇し、言を軍議に托して詐りて召し還へし、捕へて獄に下し、二十日の後口を銜して引き出だし、サンタ・マルカ殿前に斬る。時に千四百三十二年五月五日なり。勁敵既に他手に斃れたり。ミラノ公また憂ふるところなし。久しく南方の喪亂を看過せしシギスムンド帝は伊太利亞に至り、ミラノ府に入りて王冠を得、シエナに留るを一年、フィレンゼと戰ひしも、ミラノ公の助なくして敵の圍むところとなり、千四百三十三年ミラノ公は同盟軍とフェラヽに和し、次でシギスムンド・シエナ・フィレンゼまた和約を結び、シギスムンド帝は羅馬府に入り教皇エウゼニウス四世より帝冠を受けて北に還れり。

此時に方り、伊太利亞半島の大國はナポリ王國、ミラノ公國、エネチア共和國の三にして、之に亞ぐものをフィレンゼと爲す。フィレンゼ府は產業盛大にして毛布絹布縷金繡布の製造を以て全歐に名高く、その賈人は歐州に於ける大資本家にして、到るところの商業市場に支店を有し、資本を下して巨大の利を收め、府外の地方は農

耕進歩し、千四百二十九年以後は財産臺簿を作りて賦課を平均し、豐富他に超えたりしかば、屢〻外寇内亂の禍ありしも、能く損害を回復して、民人の幸福エネチアに越ゆるも決して劣らず。千三百八十一年チョムピの變に民主黨勢を逞くして反つて政權を失ひしより、富豪政を執りて、トマソ・デリ・アルビジ (Tomaso degli Albizzi)・ニコロ・ダ・ウザノ (Nicolo da Uzano) 相次で事を執り、殷富餘ありてよく文學技術を興し、偉材を輩出して伊太利亞の自由を擁護し、ミラノのヴスコンチ父子、ナポリのラヂスラウス王に抗敵して、五十餘年間共和政治の盛を致せり。然るにトマソ・デリ・アルビジの子リナルド (Rinaldo) に至りて、メヂチのジョワニのゴンファロニエレとなり其子コスモ (Cosmo) のブリオルたるを妨ぐる能はず。抑メヂチ家は嘗て府中の小種の爲に富庶政府に反抗して起り、家は巨萬の資財を有して各國の市府に支店を有せる商社の首と爲り、其コスモは文學に精しく、詩人技匠を保護し、貧窮を救恤し、民衆の欣慕を受け、聲望全府を傾け、しば〳〵リナルドの施政方針を議し、陰然敵黨の領袖を以て居る。リナルド憤りて之を陷擠せんと欲す。千四百三十三年リナルドの黨人ベルナルド・グアダニ (Bernaldo Guadagni) のゴンファロニエレと爲るや、コスモを徵して政廳の高樓に幽し、警鐘を鳴らして民會を召集し、委員を指撰せしめて、コスモの罪案を斷じ放逐に處す。リナルドは之を誅除せんと欲したれば其後禍を殘すを悔ゆ。果して翌千四百三十四年九月ニコロ・ドナチ (Nicolo Donati) 總督となりて、新シニョリアを組織して、コスモの黨を召還し、リナルド及び其黨人を逐ひ、榮枯一年、忽ち地を代へ、コスモは國父の尊稱をうけてメヂチ家茲に隆運に會せりアルビジ黨ミラノに奔りフィリッポ・マリア公に説きて本國フィレンゼを伐たしむ。公乃ちニコロ・ピチニノを將としてッスカニアを侵さしむ。教皇エウゲニウス四世出でゝフィレンゼに奔り、フィレンゼのコスモはフランチェスコ・スフォルザを將軍に拜し、エネチアと連りて、連りにミラノを破る。フィリッポ・マリアよりてクレモナ、ポントレモリ (Pontremoli) の二地を粧資と爲し、庶出の女ビアンカ (Bianca) をスフォルザに與へて好誼を修め、其斡旋に由りてフィレンゼ、エネチアと和を爲せり。

千四百三十五年ナポリ女王の嗣と定まれるアンジューのルイ三世、女王ヨアンナ二世相次で殂したればアラゴン・シチリア王アルフォンゾは先に一たび女王の儲位に立ちしを名として後を繼がんとす。ゼノヴはミラノに屬せしが、之を見て、ルイ

三世の弟レネ(Réné)を助けて之を爭ひ、八月五日その水師アルフォンゾの海軍をポンザ(Ponza)島邊に破りて、アルフォンゾ兄弟、公子貴族等を擒にしてミラノに送る。

アルフォンゾはミラノに至りフィリッポ・マリアを見て佛蘭西若しナポリ王國を得ばミラノの地位危しと論じて其心を動かして放釋せられしのみならず、援助を得て再びナポリを爭はんとす。ゼノワ之を聞き戰功空しきを憤り、十二月ミラノの鎭兵を逐ひて自立せしも、アルフォンゾは進みてナポリを圍む。レネ遁れ奔りて佛蘭西に歸り、千四百四十二年六月ナポリ府陷りて、アルフォンゾ王位に即く。王よりてミラノを德として、外之と好を修め、內寬仁を以て民心を得、文學を嗜みて詞客を養ひ、またアラゴン、シチリアに歸らず、終生伊太利亞に留まれり。背戾暴逆相望める當時の伊太利亞半島に明君此の如きを得しは實にナポリの幸にして、民王德を頌して大王と尊稱せしは良に故ありと謂ふ可し。

ミラノ公フィリッポ・マリアは嚮に浪士の將フランチェスコ・スフォルザを女婿となせしも素より一時の權宜に出でたるにて、之に信賴せるにあらざれば、時を見て其地を奪はんと謀る。スフォルザ其意を知り、又たフィレンゼ、エネチアの軍に投じて勇公に敵せしが、千四百四十七年八月和を爲してミラノに趣く、途上フィリッポ・マリアの訃音に接す。初め非スコンチの皇帝よりミラノ公に封ぜらるゝや、男統にあらざれば相續するを得ずとの勅旨なりければ、フィリッポ・マリアに男子なく、佛蘭西王シャルヽ六世の弟オルレアン公夫人たる妹ワレンチア(Valentia)も、スフォルザの室たる女ビアンカも、父兄の後を繼ぎてミラノに君臨する能はず。故にフォルザは武力と遣命とに由りてミラノ公たらんと欲し、或はナポリ王アルフォンゾをして公位を兼ねしめんとするものあれども、府民は公家血統の斷絶を得易からざる好機となし、八月十四日共和政府を復し、久しく非スコンチ家の勢威に屈從せしパヂア、コモ、アレッサンドリア以下の諸市は相次で獨立を復しぬ。蓋し北伊太利亞の門戶を扼して、獨逸、佛蘭西入寇進略の途に當るものは、實にミラノ、エチチア、フィレンゼの三共和國なれば、若し三國交を修めて輔車相助けば、半島の民勃起するに難からざりしに、惜む可し計策此に出でず。エチチア府長フランチェスコ・フォスカリは只管戰功を立てんと欲してミラノの和を請ふを許さず。フィレンゼのコスモ・デ・メヂチは初めより自由を重んずるの念莫く、富資聲望を利用して府政を掌握し大にフィレンゼの勢力

を扶植せんとしエヂチア共和府の隆盛を忌み、ミラノ共和府の復興をも悅ばずして、却てスフォルザの隱謀を扶けんとす。時にスフォルザはブラチェンチアを荒らし、ミラノ軍と戰ひ、千四百四十八年七月敵艦をポー河に燒き、九月十五日大にカラヴヂオ(Caravaggio)に戰ひてエヂチアの全軍を潰にし、武勳によりてミラノ府纂奪の地を作り、窃に地をエヂチアに讓りて內助を得てミラノ公たらんと謀る。ミラノ共和府情を探り得て大に愕き、公國主なしと認めたる羅馬帝ヴレンチアの緣に繫るオルレアン公を始とし、苟くもヰスコンチ家に交誼ありしサヂャ公等の來援を請ひて之を防がんとす。而も其兵少なく且、エヂチアは敵にして、フィレンゼは救はヂ、ブラチェンチア、アレッサンドリアはスフォルザに應じ、パヂア、ロヂ、クレマは降りて、ミラノ日に危し。既にしてエヂチアは漸く先非を悟り、千四百四十九年九月ミラノと和し、其共和政府を認諾して四至を規定し、スフォルザにロムバルヂアの七市を割きたるも、スフォルザは功を一簣に缺くを憾み、ミラノを圍みて糧道を斷ち、十二月エヂチアの援軍を擊破す。城中食盡き、或は寧ろエヂチアに降らんといふものありしも、行はれず、千四百五十年二月門を開きてスフォルザを迎へてミラノ公と爲し、

僅に復興の名を認められし共和政治は槿花一朝の榮短くして早くも凋落し去れり。

ナポリ王國、ミラノ公國は王公の專制なり。エヂチア、フィレンゼは初め民政なりしも、今や名家民政の制に因りて實權を掌握せり。彼是施政に差ありといへども、皆伊太利亞の大國なり。而して今や敎皇の俗權增大して政治上の地步を占め、ロムバルヂア自由俠復の一舉空しく破れしと共に羅馬府民獨立の企圖も遂げず、敎皇領は前四國の外に第五國として起り來れり。抑敎皇擁護の盟誓を爲して府政を掌れる神聖不可侵の羅馬のセヂトルは素と人民より撰出せしが、敎皇アヂニョンが去りて、羅馬久しく主なく、貴族專橫に士氣萎縮して、頗る敎皇の治を樂まんをを願ひしが、次で宗敎分離の難起り、マルチノ敎皇統一の君となりしも、羅馬諸領地を服する能はずして、多くはフィレンゼに居りて世を終り、エウゲニウス四世の失政によりて敎皇領益、削平せられしが、千四百四十七年五月ニコラウス五世、フィレンゼより出でゝ敎皇と爲るや、恰も東方に土耳古勃興して希臘帝國の詞客騷人西に遁れ、古文學復興するに遭ひて盛に學術技藝を奬勵して和平を謀り、宮殿寺院堡壘を修

築し、聖彼得寺建立の計畫を爲し、ヴチカノ皇宮を造營し、散佚せし遺書を蒐輯して圖書館を設け、千四百五十二年帝冠をフリードリヒ三世に授けたり。然るに翌千四百五十三年ステファノ・ポルカロ (Stefano Porcaro) 羅馬自由の克復を名と爲し急に襲ふて府城を取らんとし、發するに臨んで事露はれ、其徒と共に誅に服し、嘗て世界の首都たりし羅馬の自由終に空し。適此年五月土耳古終にコンスタンチノポリスを陷れしかば、伊太利亞爲めに驚動し、教皇は基督教徒相合同して異教徒の西侵を防止せざる可からずとなし、千四百五十四年四月ナポリ王、ミラノ公、エヂチア以下の諸強をロヂに會して、平和會議を開き、ヘルガモ、プレッシアはエネチアに歸し、クレマはミラノ公國に屬し、十五世紀中葉の伊太利亞は一王國、一公國、一教國、二共和國の對立とはなれり。

エネチア府長フランチェスコ・フォスカリは三十四年間共和國の實權を掌握せしが、その子ヤコポ・フォスカリはミラノ公より賄賂を受けたりとて、無殘の拷問に遭ひて、三たび放逐せられ、フランチェスコも年老ひ職に耐えずとて、千四百五十七年十月廢せられて間もなく歿しぬ。ナポリ王アルフォンゾは弟ナバレ王にアラゴン・ヴレンチア・カタロニア・サルヂニア・バレアル・シチリア島を讓りしも、ナポリ王國は寵姫の庶出フェルナンドに讓り、フランチェスコの後を逐ふて、千四百五十八年六月ナポリに殂落す。年六十有四。フェルナンドは父王の望に添はず、猜忌殘忍下の怨むところとなり、貴族はアンジューのレネの子カラブリア公ジュアンが佛蘭西王の代官としてゼノヴに駐在せるを招き立てんとす。ジュアン以爲く、ミラノ公は嘗てアンジュー家のために戰へり、フィレンゼは佛蘭西の友なり、俱に來り援く可しと。乃ち之を諾せり。然るにスフォルザは佛蘭西既にゼノヴを領すれば、更にナポリを得ばミラノ爲に危からんとを懼れ、ロヂの和約を守りて動かず。フィレンゼのコスモはスフォルザの說に同じて應ぜず。佛蘭西王ルイ十一世すら外交の難を厭ひて援けず。カラブリア公四顧援助なく、且ゼノヴ大僧正パオロ・フレゴソ (Paolo Fregoso) 府民を挑搖して佛蘭西人、及び其黨派なる府長プロスペロ・アドルノ (Prospero Adorno) を逐ひレネを擁破せしを以て、カラブリア公勢屈し、ナポリ王位爭奪の念を斷ちて退く。時に千四百六十四年なり。斯くて、ゼノヴは佛蘭西の羈絆を脫せしかば、スフォルザの保護を仰ぎ、ルイ十一世王は公然之を讓與して、ミラノ公國の一部となし、伊太利亞半島

に於ける佛蘭西の望全く地に墜ちたり。

メヂチのコスモは大政を掌握して以來ネリ・カポニ(Neri Capponi)と連合して撰擧の結果危しと見れば、府民總會を開き委員(バリア)を命じて自黨を擧げしめ巧に憲法を利用して權勢の維持に力め、共和の空制を存して、寡頭政の實益を收め、巨萬の富を擁して宮殿寺觀を造營し、意に任じて政を執ること、茲に三十年。盛んに文學技術を興し、フィリッポ・ブルネレスキ(Filippo Brunelleschi、千三百七十七年生、千四百四十四年歿)は其庇護を受け、穹窿の大伽藍を造りて世を驚かし、トマソ・グイヂ(Tommaso Guidi、世に稱してマサチオ(Massaccio)と呼ぶ、千四百二年生、千四百四十四年歿)は自然派の畫をブランカチ(Brancacci)院、カルメリテス(Carmelites)寺に殘して、後人ミカエル・アンゼロ以下模倣の師表と爲り、ポジオ・ブラチオリニ(Poggio Bracciolini、千三百八十年生、千四百五十九年歿)等の學者はコスモの命を受けて、西東の遺書殘典を探り、フィレンゼは古來傳承の自由、共和の精神を削殺されしも、政綱振張し、文物粲然として見る可く、内康安を得、外聲威を揚げたるは洵にコスモの力に賴れり。

然るにコスモはカラブリア公失敗の後數月を出でず、千四百六十四年八月、不歸の客と爲る。年七十五。次子ジオヴニは機慧にして望を負ひしも、父に先ちて歿し長子ピエトロは才幹あるも痛風を患ひて歩騎意に任せず、貸附金を引上げ事業を縮少して、晉にフィレンゼのみならず、半島全般の財界を紊亂せし爲め、商賈の望を失ひしも屈せず、常に政敵を壓仆して重きを爲せしが、數年にして健康益〻損じたれば、政治をトマソ・ソデリニ(Tommaso Soderini)等五六の市人に委托す。然るにソデリニ等皆各私を營みしかば、ピエトロ太く忠へて、千四百六十九年十二月遂に病んで卒す。二子ロレンゾ(Lorenzo)、ジウリアノ(Giuliano)年尚壯にして聲色に耽り、政治上の野心なく、ソデリニ等五人メヂチ家に代りて一時フィレンゼの政權を得たり。是より先數年ミラノ亦同一の非運に會し、アンジュー家の爲にナポリと戰ひし名將ヤコポ・ピチニノはミラノに遁れてスフォルザの女婿となりしに、ナポリ王フェルナンドに欺かれて、千四百六十五年六月ナポリ宮裡に誘殺せられ、翌年三月その男ミラノ公フランチェスコ・スフォルザ歿して、英傑の後不肖多く、子ガレアッゾ豪華を誇り、放殘にして民心を失ひ、十五世紀の奇傑相踵で逝き半島の人物殆んど空し。

伊太利亞人物の凋落秋末の木葉より繁き に方り、新月の旌旗アドリア海を隔て

て飄り、豫言者の聖訓を守りて現世地上の榮華を求めんよりは、未來天上の樂果を得る爲めに、一死を辭せざる土耳古人の東より來寇するに遭ふ。豈膽寒く氣怖かざらむ。況や其兵は新軍(ヨニチエリ) (Yeni Tscheri) の衆、慓悍にして騎馬の進退巧妙に、偃月刀を舞はし巨礮砲を放ちて向ふところ敵なき軍隊組織に加ふるに、商業技工を保護して利を收め益を謀る文明の智巧を以てするに於てをや。而して先づ此勁敵の衝に當るはエネチアなり。エネチアは夙に通商貿易の利を東方に獲て、イルリア沿海の領地希臘に抵りて甚だ廣く、地豐に形勢固く、慓悍善鬪の技工優秀の民多し。若しエネチア人の東帝國に受くる待遇ロムバルド領に於けるが如くならしめば東帝國の文明氓びず、昌榮期す可く、アルバニア、イルリアの健兒を招きて水陸の師を編制せば雄を海東に稱せしや必せり。然るに帝國の策は此に出でず、殘暴冷酷を以て生産巧智の良民を遇し、蠻野の俗を以て勇健の衆を拒みしは最も失計なりき。されば コンスタンチノポリス陷るや、千四百五十四年四月エチチアの使者櫻里丹ムハメッド二世に謁して捕囚の還付を求め、使節にしてレバントのエネチア臣民の判官を兼ぬるバイレ (Baile) を其地に置きて和を約し好を修む。櫻里丹ムハメッドは其間に順次イルリア、希臘の不逞の徒を討ち、千四百五十八年ラスキア、セルヴィア王國を滅ぼし、雅典公を殺し、千四百六十年モレアの僧主を廢し、千四百六十二年尙黑海附近に自立せるシノペ、ケラスヽ、トレビゾンドに勝ち、翌年ワラキア (Wallachia)、モルダヴィア (Moldavia) を降す。然るにコロン (Coron)、モドン (Modon)、アルゴス (Argos) 等は久しくエチチア領にして、コロンの太守、雅典の土耳古太守の財寶を竊みたる奴隸を庇護して還附せざりしより戰起り、エチチアの總督ルイジ・ロレダノ (Luigi Loredano) はペロポンネソスの希臘人を煽動して與にコリント峽に拒ぎしも敗れて退く。エチチア挫屈せずして千四百六十三年九月ウンガルンの浪士マチアス・コルヴィヌス (Mathias Corvinus) と同盟を約す。教皇ピウス二世は十字軍をアンコナに召集して、ブルグンヂア公と與に回教徒に當らんとす。而も兵衆怯懦鬪志なく、只錢穀を貪り、得ればやがて四方に散じ、翌年八月教皇遂に其地に崩じて、殘兵悉く背く。嗣ぎ立ちし教皇パオロ二世は回教徒を防がずして、マチアスをベーメンに遣りて宗教改革者を伐たしむ。土耳古隙に乘じて、千四百六十九年クロアチアを屠り、翌年海上に戰ひてエチチア艦隊を希臘近海より追ふ。恰も此時ハッサン・ベグ

(Hassan Beg) 波斯を服して土耳古を侵さんとす。ヱヂチア人は東西諸國に通商して之を知りしかば、其姻族カテリノ・ゼノ (Catterino Zeno) を使者として、波斯に至りて同盟を結ばしむ。次でヨサファト・バルバロ (Josaphat Barbaro)、アムブロシオ・コンタリニ (Ambrosio Contarini) を遣はす。道路擁塞して通ぜず。或は埃及よりマメリュク隊商に伴ひて志利亞に出でゝ、波斯灣に至り、或は獨逸、波蘭を經て黑海を渡り漸く波斯に達すと雖も、土地遼遠にして謀計合期せざれば、利便論ずるに足らず。ピエトロ・モチェニゴ連りに諸方を攻略せしも、ハッサン・ベグの敗報を聞きて退き、內亂に乘じてキプルス島を下す。千四百七十五年ムハメッド二世はクリメア半島のゼノヴ殖民地カファを取り、千四百七十七年以後其兵テラ・フィルマに迫り、伊太利亞に入りてタリアメント (Tagliamento) を渡り、虐殺生檎を逞うして、翌年六月クロイア (Croia) を取り、スクタリ (Scutari) を圍む。ヱヂチアは師既に老ひ兵勞れ、事急にして基督教國の救援至らざるを見て、スクタリ及びイルリアの諸城を割讓し、千四百七十九年二月和を櫻里丹に講ず。翌年七月土耳古の大宰相アーメド・ケヅク (Ahmed Keduk) オトラントの堅城を拔きて民を屠りしが櫻里丹ムハメッド二世殂して土耳古に內亂起り、伊太利亞は是に於て遂に回教徒侵略の害を免れたるは、誠に天幸と謂つ可きなり。

奸雄政を竊めば民庶蜂起して自由の爲に鬪ひし時は去れり。僭主專制年久しくして、其治下に生れし民は其堵に安んじ、盲從妄動、英雄の奴隸となりて悟らず。古を懷ひ今を慨くの識者ありて救濟經倫を企つるも、無智の民衆は君公に寵蓋せられて力敵せず。是に於て乎、隱謀密計を畫圖して、政府を顚覆せんとし、刺客を放ちて君王を暗弑せんとし、從て君公は警護を密にして自ら衛り、誅罰を酷にして不臣を求むること急に、謀殺と疑獄の起る、十五世紀より甚しきは莫し。ピエトロ・デメヂチに放逐せられしフィレンゼ府民ベルナルド・ナルヂ (Bernardo Nardi) は逐客百人を將て、千四百七十年四月、急に襲ひてプラト (Prato) 市を奪ひ、在留のフィレンゼのポデスタを捕へ市民を激して自由の爲に起たしめ、メヂチ家を滅ぼさんとせしも、市中應ずる者なく、フィレンゼ政府の追討軍に捕へ殺され、企圖畫餅に歸せり。尋いでフェラヽゼノヴまた小變あり。フェラヽのエステ家はニコラウス三世の後、千四百四十一年より千四百七十年に至るまで二庶子リオネル (Lionel)、ボルソ (Borso) 相

次で政を執ること三十年。寛仁大量よく下を撫で、エステ歴世中の明主にして、殊にボルゾはフリードリヒ三世よりモデナ・レジョ公に、パオロ二世よりはフェラヽ公に任ぜられ、祖先が人民より簒奪せし主權も、今は皇帝教皇の聖認を得て、堂々たる君公となりたれば、次で嫡出の弟ヘルクレス一世の立つや、リオネル、ボルソ兩先公に奉仕せし僧罷はリオネルの遺子ニコロを奉じ、千四百七十六年九月、六百人を以てフェラヽに入り、市民を勸誘して亂を作し、ヘルクレスを廢せんとす。ヘルクレス之れを聞て大に愕きしが、市民戸を鎖して隱れ出でヽ暴舉に應ずる者なきを見て初めて心を安んじ、衆を發して暴徒を破り、ニコロ以下二十五人の首を懸けて亂平ぐ。ゼノヴのジロラモ・ゼンチレ (Girolamo Gentile) も此年亂を作してミラノ公の羈絆を脱せんとせしが、同じく民の應ずるなくして事破る。然るにフェラヽ・ゼノヴの敗亡に懲りずしてミラノにも刺客の變起れり。ミラノはガレアゾ・スフォルザ公の淫虐日に甚しく、母公を毒弑し、貴紳の淑女を姦し、慘刑を擅めて下耐ゆる能はず。二十二歳の青年ジロラモ・オルジャチ (Girolamo Olgiati) 師父の訓言に感じ、時事の非を憤り、若しスフォルザを亡ぼさば府民必ず蜂起して自由共和の盛復見るを得可しと思料し、二友と與に死を決して此年十二月二十六日サンタ・ステファノ祭に當り、ガレアゾ公を參拜の道に要して刺殺す。二少年亦衛兵の爲に斬らる。オルジャチ且走り且叫びて府民の蜂起を促せしも、全府應ずる者なく、政府の爲に捕へられて慘刑に死し、志遂に成らず。ガレアゾ公の未亡人サヴォイアのボナは幼兒ジャン・ガレアゾ、マリアを立てヽ自ら政を攝しぬ。

プラトの陷落、フェラヽ、ゼノヴの隱謀、オルジャチの暗殺皆志を得ず。隱謀刺客の擧は殆んど何等の成算なきが如しと雖も、事相更に大にして關係錯綜せるバジ (Pazzi) の隱謀起り、羅馬教皇の黨爲に其張本を爲し、教皇領擴大の端を啓く。教皇シスト (Sisto) 四世はもとゼノヴのロヴェレ (Rovere) 家に出で、二姪ジウリアノ (Giuliano)、ピエトロ・リアリオ (Pietro Riario) を君牧師と爲し、一姪ガレアゾ・デラ・ロヴェレの爲にナポリ王フェルナンドの女を娶りてソラ (Sora) 公と爲し、一姪ジロラモ・リアリオにガレアゾ・スフォルザの女を娶り、爲にイモラ市を買收して與へ、諸姪を教俗兩界に樹立して親姻增大策を講じ、教皇領を擴張し、共和政を鼓吹して伊太利亞統一を夢想し、遂に又メヂチ家と相忌む。メヂチ家は襁きにピエトロ歿してトマソ・ソデリニ。

アンドレア・デ・パジ等五人事を用ひしが、ピエトロの二子ロレンゾ、ジウリアノ既に長じて權勢を復し、パジ族の富强にして政治に參與するを拒み、富豪ボロメオの殁するや男系相續法を發して、女婿ジョヴニ・デ・パジの資財を繼承するを妨ぐ。ジョヴニの弟フランチェスコ憤怨して羅馬に奔り、教皇シストの財務を司りて親任を蒙り、ミラノの刺客の志知られずして空しく死せしを憾み、大に教皇の一黨と結び、ピサ大僧正フランチェスコ・サルヴィアチ(Frc. Salviati)以下多數の徒黨を作り、ピサ大學に在りし君牧師リアリオをしてフィレンゼに入らしめ、其饗應の宴に乘じてメヂチ兄弟を刺さんと謀る。千四百七十八年四月リアリオ至り、パジのヤコポ之を饗す。メヂチ兄弟も廿六日を期してリアリオを饗せんとせしに、前日に至りてジウリアノ至らずとの報あり。謀徒望を失ひしも、騎虎の勢已むを得ずして兄弟の大伽藍に參詣するを待ち、パジのフランチェスコはベルナルド・バンヂニ(Bernardo Bandini)と與にジウリアノを、二僧アントニオ・ステファノは別にロレンゾを刺さんと期す。ジウリアノ出でず。パジのヤコポとベルナルドと其邸に就きて誘ひ詣る。詣者麕集してジウリアノ兄弟は刺客のあるを知らず。鐘聲を號報と爲してベルナルドはジウリアノを刺し、フランチェスコ猛進して之を亂刺せしも、二僧はロレンゾを逸し、ピサ大僧正等は奔りて政廳に至りてプリオル等を殺さんとせしも能はず。ヤコポは廳前に至りて『自由よ、府民よ』と連呼せしも、全府只メヂチ家の黄白に心醉したれば、一人も自由の爲に蹶起して之に應ずる者なく、却つて『パレ・パレ』(球の義、メヂチ家の徽號なり)と叫びて謀徒を撲殺し、法衣を着けしピサ大僧正、パジのフランチェスコは政廳の窓より吊下せられ、連累して死する者二百餘人。パジの謀全く破れたり。

パジの隱謀破るゝや、弟を失ひしメヂチのロレンゾは却つて太くフィレンゼ府民の同情を博し、護衛を附せられ權望愈〻高く、大に國威を張り、學術を振興し、府資を以て私慾を果行し、メヂチ家の第邸善美を盡くして自由の元氣全く地を拂へり。之に反してシスト教皇はパジ隱謀の失顛を憤り、先づフィレンゼ府民を破門し、大僧正を殺せし罪を問ひ、ロレンゾを始としゴンファロニエレ・プリオル・八委員(バリア)の逐付を命じ、ナポリ王フェルナンド、シエナ共和府と連合し、ウルビノ公フェデリゴ・ダ・モンテフェルトロ(Federigo da Montefeltro)を連合軍司令官に任じて、ツスカニアを伐たしむ。メ

ヂチのロレンゾは自ら戰術に通せざるを以て、エステのヘルクレスを將と爲せしに、ヘルクレスは敵に通じたり。ミラノ公國の攝政サヅイヤのボナはメヂチ家を助けんとせしも、ゼノヴ人、フェルナンドの指嗾を受けて叛きし故、フィレンゼを救ふに遑あらず。獨に國外に逐はれし前公の弟ルドヰコ(Ludovico)歸り來りて、年甫めて十二なる姪ジアン・ガレアゾを成年に達せりと云ひて推立し、自ら實權を簒ふ。千四百七十九年九月カラブリア公はボジオ・イムペリアレに於てフィレンゼ軍を壞破し、ロレンゾは進退殆んど谷まり、ウルビノ公の言によりて、十二月自らナポリに赴きてフェルナンド王に見え、若し戰亂久しきに亘らば佛蘭西王ルイ十一世、ロレイン公レヲ二世南下して、ナポリを爭に至らんと云ひ、地を割きて和を講ず。偶〻土耳古兵オトラントを陷る。シスト教皇爲に寒心し、千四百八十年十二月終にロレンゾと和す。然るに翌年八月ナポリ王子アルフォンゾはオトラントの土耳古兵を攘ひしかば、教皇は姪ジロラモ・リアリオの爲にエヂチアと謀りてフェラヽを得んと欲し、ナポリ王、ミラノ公、フィレンゼは皆之を拒みて和平忽ち破る。教皇事の成り難きを知り、俄にエヂチアを破門して其領土を沒收しフェラヽに代へんとす。同盟依てエヂチアと和を爲す。教皇望を失ひ、千四百八十五年八月病んで崩ず。インノチンツオ八世繼ぎて教皇と爲り、尙ナポリ、フィレンゼと戰ひしが一年を經て、千四百八十六年八月和を約し、子フランチェスケト・チボ(Francescheto Cibo)の爲にメヂチのロレンゾの女を納れ、ロレンゾの子ジョヴニを君牧師と爲す。ジョヴニ後教皇と爲る。レオ十世即ち是なり。

新月の旌旗オトマントに飜りて、土耳古の侵略は偶〻伊太利亞擾亂の結末を促し千四百八十年の和議成りて後尙幾多の動搖は免れざりしも、十二年間伊太利亞は稀有の太平を見たり。蓋し伊太利亞半島內の動亂は局外に立ちて、機の乘ず可く利の奪ふ可きを覘へるエネチアの利なれば、其强大隆盛を恐るヽフェルナンド王ルドヰコ・ロレンゾ豊漁夫の爲に鷸蚌の爭を爲すの愚を戒めざらむ。且フェルナンドの患は外、佛蘭西に在り。半島の風雲急にして兵禍久しきに亘らば、ナポリ王位に要求の權ある佛蘭西は幸機乘ず可しとなして南下す可し。ジアン・ガレアゾ・スフォルザの夫人はナポリ王子アルフォンゾの女なり、母ボナは佛蘭西王シャルヽ八世の叔母なれば、擾亂久しければ、ミラノの公國は北佛蘭西の容喙あり、南ナポリの干涉を受け

て、ルドボコの權勢地に墜つ可し。又ロレンゾの立地より見れば伊太利亞諸州權勢の均衡を保ちて敎皇インノッェンツォとの連立を維持し、ミラノを安んじて北の方外人の侵入に備へ、南の方ナポリを控制し、東の方エネチアを防がしめざる可からず。乃ちナポリ、ミラノ、フィレンゼ三國が鼎立の均衡を守りて和平を保續するの旨意見る可し。

斯くて半島の戰雲晴れ、太平の光輝きて、耕耘進み田園拓け、農夫は他國に比して衣食住の安樂を得、諸市豐富にして、毛織絹布の產額增大し、金錢貸借の利益多く、メヂチのロレンゾは建築文學を保護せり。但當時の文學美術は概ね模古、擬古にして、新生命を得、新局面を開くもの少く、僭主專制の世とて德義の美は微に、國富み民安きまゝに快樂に耽り不倫失行多く、ジロラモ・サヴナロラ (Giolamo Savonarola) の泣派 (Piagnoni) の如きは力を極めて基督敎會の世界的なる可く、墮風汚俗の救濟す可きを說きたりと雖も、滔々たる頹勢の流は奢安の世を通じて已まず。不德非ゝ行は到るところに風を爲したりき。

千四百九十二年四月ロレンゾ・デ・メヂチ歿して、半島は佛蘭西の侵略を蒙り、獨立の風氣全く地を拂ふに至る。十五、六世紀の過渡は實に此國史上の一段落なり。請ふ章を改めて其四十年間に於ける轉局を叙せゞ。

第七章　外强の侵寇、獨立の滅亡。

（千四百九十二年乃至千五百三十年）

伊太利亞内外形勢の變。半島均衡の破綻と佛蘭西王シャルヽ八世の大志。ミラノヽ王の南征。メヂチ家の沒落。シャルヽ王ナポリを得。シャルヽ王の失敗。ジロラモ・サヴォナロラ。ボスコンチのルドヴィコ。ナポリ王國西班牙に入る。チエザーレ・ボルジヤの末路。セノヴ、ピサの滅亡。カムブレー同盟、神聖同盟。メヂチ家の復興。教皇レオ十世。文藝の復興。フィレンセ（ミカエル・アンゼロ）、羅馬（ラファエロ）、エネチア（チヽアノ）ロムバルヂア諸派の美術。「五百」時代の文學。フランソア一世の南征。宗教改革の起原とカール五世皇帝。フランソア一世再征の失敗。フランソア一世の三征。羅馬の陷落。パルセロナ、カムブレー二條約。カール帝伊太利亞を服す。伊太利亞王の空名。

三百年前半島至るところに見し共和民政は今や全く衰頽し、僅に其迹を存するフィレンゼ政府はメヂチ家三世の專制を甘んじ、エネチアは寡頭政治と爲り、シエナ。ルッカ皆一部の市人に政權を窃攘せられ、共和の舊名徒に美なるも民庶參政の實亡ぶ。況やスフォルザの手に歸せるゼノヴの若き、ベンチヴリオの下に屈從せるボロニヤの若き、其他王國の如き、教國の如き、一として民衆の志仲ぶるの地莫きかや。半島の騎兵强しと雖も、强場に馳聘してはよく外敵に當る能はず。内既に衰亡の機熟して外列國の强あり。シャルヽ十三世王佛蘭西に君臨して國内離叛の徒なく、アラゴンのフェルナンドはカスチラのイサベラと婚を結びて、グラナダのムーア王朝に克ちて西歐に對立し、墺太利のマキシミリアン皇帝は、荷蘭、ブルグンヂアを併呑して中歐に雄視し、瑞西は山間に介在して勇健武强を以て漸く聞へ、土耳古はアドリア海陬を略して漸く西し、五十年前は殆んど論ずるに足らざりし四方諸國の民、五十年後の今は皆半島の外憂たるに至れり。學藝を復し殖産を興せし伊太利亞の内既に衰ふるを以て此に當る。四强の爲に俎上の肉たらざらんとするも豈得べけんや。伊太利亞の侵略蹂躙を蒙るは十五世紀末に始まり、半島は列强爭衡の戰區と化し、更に下りて外諸君王の下に屈辱し、最近十九世紀に至るまで一統自由

の望なき暗々たる至慘の境に轉落し、去れり。其端緒は實に內メヂチのロレンゾ歿し、外佛蘭西王シャルヽ十三世の南下に起れり。

ロレンゾ・デ・メヂチの歿せし翌、千四百九十三年、ロデリゴ・ボルジア(Roderigo Borgia)インノッェンツォ八世に代りて教皇と爲り、アレッサンドロ六世と稱す。アレッサンドロは貪婪不德友に信なく敵に酷に、資產を愛み權略に富み、賄賂を行ひて法器を得秕政虐施行はざるなし。ロレンゾの長子ピエトロは之を見て亡父の遺業を紹ぎて半島權勢の均衡を維持するに力めず。却つてフェルナンド王と連合して教皇及びミラノのルドヰコ、スフォルザに當る。ルドヰコは形勢急に變ぜしに驚き獨り教皇エヂチアと相助くるのみならず、使を佛蘭西に馳せてシャルヽ八世にナポリ征略を說く。蓋し其志自らミラノ公たらんと欲するに在りて、既に羅馬皇帝マキシミリアンより公爵を得、夙に公國の實權を握れるも、外ミラノ公の外祖たるナポリ王を憚り、內ミラノ人の已を惡めるを恐れて、敢て公と稱せずして遂に此策に出でたるなり。初めレヲ一世の逝くや、佛領プロヴンス及びナポリの領知權を姪マインのシャルヽより佛蘭西王ルイ十一世に傳へたり。然るにシャルヽ一世の時シチリアアラゴン王領とプロヴンスは離す可からずと定めしに、シチリアは當時夙くアラゴン王家に入り、後ナポリは同家のアルフォンゾに得られてフェルナンド王に傳はれり。故に今やルドヰコより援助を請はれしシャルヽ八世は年紀正に廿四、雄心倒し難く、自ら器略の小、身材の弱きを顧みずして、慨然としてシャルマンニュの遺圖を慕ひ、適レヲ一世の孫ロレーン公レヲ二世が祖父の舊地たるプロヴンスを請ひしを拒みて與へず、親ら一擧してナポリを略し直ちに海を渡りて希臘に出で、東の方土耳古人を攘ひて新羅馬に克ち、聖墳を復し、赫々たる偉勳を立てんと欲し、英吉利王ヘンリー八世、西班牙王フェルヂナンド、イサベラ、羅馬皇帝マキシミリアン父子と和を約して後患を斷ち、府庫の蓄積を傾け、ゼノヴ銀行ルドヰコの手より軍資を輸せしめ、瑞西の强兵獨逸の浮浪を募り、衆をヰンに會し船舶をゼノヴに艤し、老宰宿將の諫諍を聽かず、盛んに南下の準備を爲せり。

ナポリ王フェルナンドは佛蘭西王の遠略を聞きて太く驚き、利を羅馬教皇に啖はして之と連合し、百方禍亂を避けんと謀りしが、事功を見ずして、千四百九十四年一月殂落し、王子アルフォンゾ位を繼ぎて兵禍忽ち起れり。アルフォンゾ王は負剛頑牢民

意を用ひずして下怨を買ひ、教皇と與に佛蘭西王南伐東征の遠略を企耳古樓里丹バジャセット二世に告げて連合同盟を求めしも樓里丹は以て杞憂と爲して應ぜず。アルフォンゾの王子ドン・フェデリゴはゼノワを掠たんとしてオルレアン公ルイの瑞西兵とラポッロ (Rapollo) に戰ひて破らる。烽火既に揚る。元首豈動かざらむ。八月二十三日シャルヽ王騎三千六百歩二萬瑞西軍八千を率てポエッを發し、アルプス山を越えてアスチに至る。サヴイヤ公、モントフェラト侯皆幼にして、母公王威を恐れて歸伏す。王進んでパヴアに至り、從弟ミラノ公ジャン・ガレアゾと相見ゆ。夫人王に說きて公父子及び父王ナポリ家の爲めに哀を請ふと甚だ切、王意大に動く。幾くならずして公俄に薨ず。皆叔父ルドヴヰコを疑ひしも王を恐れて敢て言はず。王はアルゼントン卿フィリッポ・デ・コミンを使者としてエヂチアを招かしめしにエヂチアは中立を守りて動かず。王よりて先づフィレンゼに迫る。ルドヴヰコ其勢を假りて自らピサを取らんとす。フィレンゼのメヂチ家は是より前二年ロレンゾ歿して三子あり。巨子をジュリアノ (Giuliano) といひ仲子をジョヴニといひ、長子をピエトロといふ。ピエトロ時に年二十一、父に代りてフィレンゼの事を視しが、此に於て亡父の遺約を守りて、ナポリ王家の爲に佛蘭西兵を防がんとす。フィレンゼは素とゲルフ黨に屬し佛蘭西と善かりしかば、府民皆佛蘭西軍一たび至らばメヂチ家は忽ち仆れんとを期す。既にして佛蘭西王師ポントレモリ (Poutremoli) よりツスカニアに入り、サルザナ (Sarzana) を圍み、フィレンゼの援兵三百騎を粉齏せしかば、ピエトロ内外の勢已に不利なるを恐れ、自ら行きてシャルヽ王に見え、ピサ、レゴルン (Leghorn)、ピエトラ・サンタ (Pietra Santa)、リブラファッタ (Librafatta) を献ぜんとを約し、十一月府に歸る。シニョリア廳門を領して納れず、府民警鐘を亂打して蜂起蟻集し勢當り難し。ピエトロ乃ち兄弟一族と出でヽボロニヤに奔り、六十年來威權を奮ひしメヂチ家は一朝にして沒落し了れり。然るにピサはフィレンゼに屈するを茲に至りて九十年。秕政虐施の論ず可きはなけれども、昔は繁榮フィレンゼに超え、中頃は之と相拮抗せしを想へば、商業の利を奪はれ、土地の價低下するを見て市民は慨嘆措かず。メヂチ沒落の時に至りて市民王にフィレンゼの繫扼を脱せんとを哀訴す。王之を許るす。フィレンゼ府民依つて甚だ王に平ならず。王の府に入るや只敬意を表して之を迎へしも、素より王に降れりと爲さず。王怒りてピエトロの約を聲言して、メヂ

チ家を復す可しと唱すれば、府民は憤りて、全力を盡くし、之に抗せんと云ひ互に相讓らず。一日王の記室最終の約書を朗讀するや、ピエトロ・カッポニ (Pietro Capponi) 書を奪ひて之を裂きて曰く『聖意此の如くんば乞ふ喇叭を鳴らせ、臣等亦警鐘を鼓ちて府兵を募らんのみ』と。辭色甚だ勵む。王心窃に禍の忽ち起らんを恐れて、フィレンゼの貢賦を納れ、ナポリを下すの後ピサ及び襁にメヂチが致せし諸壘を還附せんことを約し、數日の後去りて羅馬に向へり。時にカラブリア公はナポリ兵を擁せしも、戰はずして退き、十二月の末シャルヽ王は羅馬に入る。教皇アレッサンドロは諸僧の爲に忌まれしかば、王の爲に廢せられんとを患ひしが、王は之を問はずして却つて樓里丹の位を得んとして得ざりしバジャセットの弟ジジム (Zizim) の教皇に倚れるを求め以て後日土耳古征討の用に備へんとす。ジジム暴かに歿す。皆以て教皇の毒弑に由ると爲す。而してアルフォンゾ王はシャルヽ羅馬に入るを見て困窮し國を捨てゝシチリア島に遁れ、位を王子フェルナンドに讓る。其將ジャニアコポ・ダ・トリウルジ (Gianiacopo da Triulzi) カプアを以てシャルヽ王に降らんとせしも衆應ぜずしてイスキア (Ischia) に奔りシャルヽは兵を勞せずしてナポリ王國を得たり。

滿盈至るを晩く欠損速に生ずるは人事の常なり。シャルヽ王得意の日久しからずして伊太利亞内外早くも幾多の敵を生ぜり。則ち北伊太利亞の諸雄は皆猜忌の情を生じオルレアン公ルイは祖母ヴレンチナ・ヴスコンチの系統によりて自らミラノ公と稱し、ミラノ新公ルドヴヂコは佛蘭西王を招きしを悔ひ、フィレンゼ共和府はピサの獨立を以てシャルヽを怨み、ヱヂチア教皇亦之を忌憚し羅馬の君牧師は暴教皇を除かざるを以て、オルシニ家は佛蘭西が其敵コロンナに私せるを以て、皆王を非議せり。加ふるに外にはアラゴンのフェルナンド、カスチラのイサベラはシチリア、ザルヂニアの禍を受けんことを恐れ、マキシミリアン皇帝はシャルヽの皇位を得んとするを惡むありて、教皇、ヱヂチア等と連合して、ルドヴヂコを助けてオルレアン公に當らしめ、ナポリの民は佛兵の横暴を厭ひ、貴族も亦王と善からず。シャルヽ四方の形勢を察して、自ら安んぜず、遂に大事をモントペンシール (Montpensier) 伯に托して千四百九十五年五月二十日ナポリを發し北歸の途に上りしが、フィレンゼを避けて入らず、又前約に背きてピサ以下の諸壘を復せず、ポントレモリよりアペンニヂ山

を越ゆ。マンチュア侯フランチェスコ・デ・ゴンザラ(Francesco de Gonzaga)之をフォルノヴ(Fornovo)に要擊す。シャルヽ王之を破りて敵兵三千五百を斬る。然るにオルレアン公はルドヴィコの爲にノヴァラに圍まれて糧道絶へしかば、王已を得ずしてルドヴィコと和を約し、十月下旬アルプス山を越えて佛蘭西に入れり。佛蘭西王一たび去りてナポリの民心動搖す。シチリア王フェルナンドはゴンサルヴォ・デ・コルドヴァ(Gonsalvo de Cordova)羅馬教皇、エヂチア及びルドヴィコの內助を得て還り、一年を出でずして、殆んど父王の失ひしところを復す。シャルヽ王乃ち兵を西班牙に擁へ大に再征を圖り、オルレアン公はフィレンゼ、フェララ公、マンチュア侯等と連合してミラノ公に當らんとせしも、皆功を奏せず。千四百九十七年佛西兩國の和成りて、伊太利亞の兩敵も相和し、佛蘭西王が當初の雄圖は水泡に歸して、南征の結果は單にルドヴィコ・スフォルザの計策を成せしに過ぎず。然れどもシャルヽ王は前約を食みてフィレンゼの諸壘をゼノヴァ、ルッカに賣り、ピサは自立してエヂチアに倚りフィレンゼと戰はんとす。ルドヴィコ、ピサの己に倚らざるを怒り、ピエトロを故地に復し、フィレンゼと連和して佛蘭西と絶たしめ、自らピサを收めてエヂチアの力を殺がんとせしも、フィレンゼは

終にピエトロを納れず。ミラノ公の企圖も亦空し。

抑メヂチ家の沒落後、フィレンゼ共和府には三堂相對峙す。一はジロラモ・サヴォナロラの率ゐるピアニニ(涕泣派)にして、古民政主義を奉じて佛蘭西の後援を頼み、二はメヂチ家に代りて權勢を私せんとする狂熱派(Arrabiati)、三は私にメヂチ家の爲にするも、公然旗色を明かにせざる灰色派(Bigi)なり。千四百九十四年末には、三派均衡を保ちしが、サヴォナロラ大に力を自黨の張勢に用ひて、翌年七月府民千八百人を會し、教會宗法の改革を論じて政治の改更に及び、狂熱の餘冥示を信じ「フィレンゼの元首は基督なり、シャルヽ八世は神意を行ふものなり」と揚言して、到る處に教を說く。府民響應し、ヴィヴァ・クリスト(Viva Cristo)の聲全府に滿つ。然れどもシャルヽ王は復た南せず、ピサ屈せず、教皇アレッサンドロ一家はサヴォナロラの非難を怒りて之を破門し、フランチェスコ派の僧侶はサヴォナロラのドメニコ派たるを以て、教皇を助けて之に當り、忽ち教界兩派の確執と爲り、遂に神裁を請はんをを求む。依て千四百九十八年四月七日薪を府廳の前に積むこと十數間、內に一條の道を通じ、兩派の僧をして火中に入らしむ。府中集り觀る者雲の如し。然るにフランチェスコ派は

サヴナロラの代理ドメニコの僧衣神併を着けて火中に入るを難じ、論駁時を費せしかば、觀衆倦怠し、忽にして驟雨大に至りて式遂に已む。府民之を以てサヴナロラ神裁を避くと爲して皆信ぜず。翌日狂熱派の暴徒サヴナロラを捕へて獄に下し、其拷問の苦痛に耐へずして、前説皆自己の一家言なりといふや、異端狂妄の罪を論じ、五月二十三日之を誅す。蓋しジロラモ・サヴナロラは當世得難き正實公明の士にして、實に獨逸のルーテルに先つ二十年、夙くも教界の汚流を清めんとせしも、政議黨爭の間に雜りしを以て、純潔の志行却つて他の擠排を招き、遂に誅滅の禍を免がれ得ざりき。

シャルヽ八世王のナポリを征せしより、西歐の列强は端なく眼を伊太利亞の富土沃野に屬し、皆以爲く、乘じて以て奪ふ可しと。乃ち續々として言を半島の政爭に挿む者を生じぬ。蓋し皆ルドヰコ一たび佛蘭西を招きしの致す所なり。千四百九十八年四月シャルル八世殂す。オルレアン公後を繼ぎてルイ十三世と稱し直にルドヰコの公位を簒ひて、自らミラノ公と稱す。羅馬教皇アレッサンドロは皇子チェザーレ・ボルジャ (Cezare Borgia) の爲めにドフィニーのヴレンスを得て、ヴレンチノ公 (Duca Valentino) と稱して王と連り、獨逸皇帝マキシミリアンはルドヰコの姪を后と爲せども、瑞西を伐つ爲めに好をルイ王に修め、エヂチアは棧里丹バジャセト二世の爲にザラ (Zara) を攻められ、ボスニアのスカンデル・バシャウ (Scander Bashaw) にイ・ソンゾ河外を侵略せられしかば、千四百九十九年四月ルイ王と和したり。八月佛將ルイ・ド・リニ (Luise de Ligni)、エヂラルドビニ (Everard d' Aubigni)、ジャニャコポ・ダ・トリウルジ (Gianiacopo da Triulzi) 伊太利亞を伐つ。是より前三年フェルナンドに代りてナポリ王と爲りしフェデリゴは兵亂の後を受けて外を顧るに遑あらず、フィレンゼはピサの回復に汲々として、四方一も力をルドヰコに借す者なし。ルドヰコ子弟と共にミラノを出でヽ獨逸に奔る。十月上旬ルイ十二世ミラノに入りジャニャコポを府長と爲し、外フィレンゼの爲にピサを復せんとす。ミラノ府民服せず。ルドヰコ瑞西兵を得て還り、コモ、ミラノ、パヰア以下を回復せしも、エヂチア、フィレンゼ傍觀して助けず、部下の傭兵に捕へられてリヨンに送らる。ルイ王は之をロッセ (Loches) 城中に幽閉し、千五百年遂にミラノを降す。後十年を經てルドヰコ遂に異域に死せり。

ルイ王のミラノを畧ぐるや、ナポリ王國爲に風動せしも、王フェデリコは西班牙宗家の後援を期したり。然るに此年冬佛蘭西、西班牙二王はグレナダにてナポリ分割の密約を結び、翌千五百一年六月ネムア公佛蘭西軍を將て羅馬に至り、西班牙の將ゴンツァルゾはカラブリアに上陸す。フェデリコ王之を見て大に西班牙宗家の無情を怨み、出でゝ佛蘭西王ルイに降る。西佛兩軍よりて恰も無人の境に入るが如く、進んで所約の地境に至るや、兩軍界域を爭ふて戰端を啓き、佛軍連りに破れ、千五百三年八月敎皇アレッサンドロ六世崩じて、新豪の佛蘭西軍はダムボア (d'Amboise) 君牧師擁立のために羅馬に延滯せしが、十二月二十七日モラ (Mola) に戰ひて全軍覆滅し、軍に從ひしメヂチのピエトロはガリリアノ (Garigliano) 河に溺れ、ナポリ王國は全く西班牙王家の有に歸せり。

ルイ王の南征に乘じて私利を營みしはアレッサンドロ敎皇ヴレンチノ公父子なり。ヴレンチノ公は身幹長大風丰典雅にして魁偉頗る權數に富む。抑ゝマニヤは素と敎皇領にして、其地方の領主は皆羅馬副敎師の名を帶べるも、實は獨立自治の小君公にして各政令を擅にせるが故に、敎皇父子はルイ王に說き、王師の一部を借りて地方を征し、千五百一年ロマニア公と稱し、翌千五百二年ウルビノを取り、西班牙王の勢振ふに及びては、內佛蘭西王の黨オルシニ家と爭ひ、外ピサを併せんとし、勢望太だ熾なり。然るに敎皇アレッサンドロ暴に崩じ、ピウス三世位に在るを僅に數月にして、ユリウス二世立つ。オルシニ蜂起し、ロマニヤ反し、エチチア機に乘じて諸市を拔きしかば、ヴレンチノ公はユリウス敎皇の爲に捕へられて獄に下る。次で千五百四年公釋るされて西將ゴンサルヂに投じ西班牙に送致せられ、フェルナンド王の爲にメヂナ・デル・カムポ (Medina del Campo) 城中に禁錮せらるゝこと二年遁れてナヴレ王に歸し、軍に從ひて井アナ城下に死せり。是をチェザーレ・ボルジアの末路と爲す。

十六世紀の始に當りて、伊太利亞半島中僅に獨立の餘喘を維持せるは、敎皇領、ッスカニア諸州とエチチア共和府のみ。且其諸州と雖も實は外强の迫壓を受け、茂々たる殆勢支へ難く、前後相次で傾倒の運に會し、ゼノヴの沒落を見るに至れり。フィリッポ・マリアの後ゼノヴは屢主を代へ、此に至りてルドヰコ・スフォルザより佛蘭西王に歸せしが、其間政府は毫も他の干涉を受けず、民自ら共和府を以て居りしに、ル

イ王約を破りて内治に容喙し、貴族之に媚附して下を虐げしかば、千五百七年二月下民蜂起して貴族を逐ひ、護民官(トリブン)を置く。ルイ王大兵を發して南伐して其亂を平げ、二巨魁を斬り、租賦を課し府制を恩典と爲し、王の像を貨幣に鑄て服屬を證せしむ。之に亞ぎてピサの勢も亦日に盛まれり。始めフィレンゼは頻りにピサの克復を圖りしもゼノワ、シエナ、ルッカ等皆フィレンゼの強大を恐れてピサを助け且フィレンゼはシニョリア屢〻交替代謝して方針爲に一定せず秘事漏れ易くして志遂げず。此を以てフィレンゼ法制を改革して終身の長官ゴンファロニエレを置き、ピエトロ・ソデリニを以て之に任じ、五判事より成れるルオタ(Ruota)を設けて其專權を制せしめ、此に至りてゼノワ滅びてピサ益〻困窮せるに乘じて之を謀る。ルイ、フェルナンド二王機を見て、自家の利を謀る爲に窃にピサを擁護し、重償をフィレンゼに求め、以てピサを購はしむ。フィレンゼ依て佛蘭西王に十萬跡、西班牙王に五萬跡を與へて千五百九年六月始めてピサを復するを得たり。顧ふにエヂチアの形勢夫れ如何に。

紛々たる半島興廢起仆の史上に於て、終始利害を異にせるは、東北隅のエヂチア共和府なり。十五、六世紀過渡の際、半島は西佛二王の手に繰弄せらるゝに當り、共和府は東土耳古と戰を交へ、麻繪末教徒の水師强盛にして敵し難く、レパント、ピロス、モドン、コロン相次で櫻里丹に降りしかば、千五百三年十一月伊囚アンドレア、グリッチ(Andrea Gritti)ペロポンチソスの地を割き、占領せしサンタ、マウラ島を還附して和を土耳古と約す。時恰も教皇アレッサンドロの崩去に會せしかば、エヂチアは亂に乘じて地を半島に拓き、東海島の間に失ひし所を償はんと欲し、ヴレンチノ公のロマニヤの諸地を奪ひ、千五百八年ラルヴアノ(l'Alviano)は獨逸皇帝マキシミリアンをカドロ(Cadoro)に擊破し、領土の大、東はアキレイアより西はアダに至り、南はラエンナ、リミニに抵り、ダルマチア沿海、キプルス、クレテ諸島、ナポリ領の諸市を下し、四方爲に震駭す。是より先四年、佛蘭西王ルイ、ナポリを失ふや、獨逸皇帝とブロア(Blois)條約を結びてエヂチアを分たんとを約せしが、又カールのアラゴン、ブルグンヂア、カスチア諸系を一身に合して、後來必ず强大と爲らんを恐れて、躊躇約を踐まず。然るに今やエヂチア大に起りしかば、佛蘭西王は大に愕き、此年十二月十日更にカムブレー(Cambray)同盟を結びて、嚮に約せし分割論を履行し、西班牙はアフリカ諸城市を、教皇はロマニヤを、サヂイヤはキプルス島を得んが爲に皆同盟に加はり、翌

くれば千五百九年佛蘭西先づ戰を宣し、教皇次で、エヂチア府長を破門せり。エヂチアの之に應じ、兵四萬二千を起せしも、二將バルトロメオ・ダルヂアノ(Bartolomeo d'Alviano)・ピチリアノ(Pitigliano)議合はずして、五月十四日佛兵三萬とアニャデロ(Agnadello)に戰ひて破れ、佛軍進んで所約の境に達し、皇帝、教皇、西班牙王、フェラヽ公マンチュア侯等四方より來り迫りしかは、共和府は防敵し難きを知り、普く將校吏員に命して、ヂェンツァ・エロナ・パッツァ以下の領土を拋たしめ、退きて唯發祥の本地たる海隅のエヂチア城府を守る。佛、獨、西の外兵は過る所殘害剽略せざるなく、九月皇帝は諸同盟軍を會し、衆十萬、砲一百門を以てパッツァを圍ひ。若しパッツァ一び拔けばエヂチアは粉齏し、半島は極北極南外人の蹂躙に委せらる可し。然るに皇帝の疎懶なる此の大軍を以て一小城を拔く能はず。カムブレー同盟は忽ち土崩瓦解せり。

羅馬教皇ユリウス二世は、性猛烈、大志ありて、善く酷虐を斷行す。今や帝王の師半島を席卷するを見、嘗てシャルヽ王南征の日わりしを想ひ、轉寒心に耐へず。既にロマニャを復せしかば我事成れりと爲し、密に同盟の崩解を謀り、千五百十年エヂチアの破門を赦し、シオン僧正をして、唇破れて齒寒く、伊太利亞共和府滅びば瑞西亦殆しと云ひて瑞西人を動かさしめ、諸伊太利亞人と與に並び起ちて、一時に半島の佛蘭西兵を攘はんとす。謀漏れ戰連りに利を失ひしも教皇屈せず。ルイ王は君牧師をピサに會し、宗教會議を開きて、教皇の罪を鳴らさんとせしも、教皇は其の地を假さず。フィレンゼ・ピサ府民は宗教分離の源を開くを惡みて、君牧師を逐ひ、會場をミラノに移せしも、民服せずして騷擾を極む。教皇ユリウス人心の動搖するを機と爲し、厚く皇帝に賄ひて、エヂチアと和せしめ、西班牙王フェルヂナンド、英吉利王ヘンリー八世を說きて、千五百十一年十月五日神聖同盟を起し、翌千五百十二年一月西兵を以てボロニャを圍む。佛蘭西王の姪ヂュール公ガストン・ド・フォア(Gaston de Foix duca de Nemours)之を擊退し、エヂチア兵の爲に陷られしブレッシアを復し、ルイ王の困厄を救はん爲め、四月十一日教皇の將ファブリチオ・コロンナ(Fabrizio Colonna)西班牙の將レモンド・デ・カルドナ(Raymond de Cardona)とラヴェンナ城下に激戰し、兩軍の死者二萬人、佛軍終に勝ち、故ロレンゾの仲子ジョヴニ・デ・メヂチ以下捕獲太だ多かりしも、ガストン奮鬪戰死し、佛軍是より復た振はず。マキシミリアン皇帝は佛蘭西王に絕ちて兵を撤し、英吉利、西班牙二王の師は佛蘭西の邊を侵したれば、佛蘭西

兵は國難を救はんが爲めに還り、瑞西軍はロムバルヂアに亂入し、六月ミラノは其手に落ち、ルドヰコの子マッシミリアノ・スフォルザ(Massimiliano Sforza)ミラノ公と爲り、教皇はボロニヤ・フェラヽを復し又パルマ・ピアチェンザを圖りゼノヴは自立し、佛國の旌旗を存するものは二三の小市に過ぎず。然れども是が爲めに伊太利亞は何の得る所なし。斯くてレーモンド・デーカルドナは西班牙の事を代攝し、神聖同盟の議を以て佛蘭西王の約を背かず、固く中立を守りしフィレンゼのゴンファロニエレを廢し、メヂチ家を復歸せしめんとす。府民メヂチを納るゝを聽きてゴンファロニエレを能むるを聽かず。レーモンド乃ち千五百十二年八月ブラトを襲ひ、市民數千を虐殺して之を威喝す。フィレンゼ府中慘禍を聞きて大に驚き、年少の貴族相謀りてゴンファロニエレ・ピエトロ・ソデリニを能めてレーモンドを迎ふ。九月上旬故ロレンゾの季子ジュリアノ、故ピエトロの遺子ロレンゾと與に府に入り、次で中旬其兄君牧師ジョヴニ甲兵を率ゐて來りて公廳を奪ひ、警鐘を鳴らして府民を集め、之を强迫して、悉く千四百九十四年以後の新法令を廢棄して舊制度を復し、十八年間江湖に沒落せしメヂチ家は再びフィレンゼの權勢を復し得たるのみならず、後數月を經て教皇ユリアヌス二世崩じ、千五百十三年三月君牧師ジョヴニ法燈を繼ぎて教皇と爲れり。レオ十世是なり。

此時に當りてミラノ公國はマッシミリアノ・スフォルザの治と稱するも、瑞西兵の左右する所なれば、全半島中獨立の名あるは僅に東にゼヂチア共和府あり、西に羅馬教皇あるのみ。羅馬教皇レオ十世は奢安苟息の人にして、前皇ユリウス二世が外人討攘、伊太利亞振興を標目して志遂げざりしも尙教皇領を擴張せしに似ず、專ら文藝美術を保護し、メヂチ家を復興してその昌榮を謀り、多く名士を誅除し、中央伊太利亞四百萬の蒼生に君臨せるも、其疾苦を問はず。民を勞し財を枯らし、法令紊亂し、正義地を拂ひ、教皇の虛名尙歐州の僻遠に震ふも、其力は空し。而して地狹くして民少きも、積蓄富豐にして良治蹟を擧げしゼヂチアはカムブレー同盟の爲に蹂躪せられて悉く地を失ひ、神聖同盟起りしも恢復せられず。乃ちミラノ克復の念ある佛蘭西王ルイと結托し、教皇及び西班牙王に對せんと企つ。ミラノは之を聞て平ならず、アントニオ・アドルノ(Antonio Adorno)亂をゼノヴに作す。佛蘭西軍直に南下してミラノに入りマッシミリアノ公はノヴラに奔りて瑞西軍に投ず。然る

に千五百十三年六月六日佛軍は瑞西兵に破られて北に歸り、アドルノはゼノヴを追はれ、西班牙代王はオッタヴアノ・フレゴソ(Ottaviano Fregoso)をゼノヴ市長と爲す。教皇乃ち代王とエヂチアの神聖同盟の約に背くを責め、エヂチアの境を侵掠し瑞西、英吉利の兵は佛蘭西を侵して佛軍屢破れしかば王ルイ已を得ず、教皇皇帝、英西兩王と和し、ピサ會議に上りし宗教分派の爭茲に已みぬ。獨り其和を守らざるものは瑞西なり。斯くてルイ王の南征復挫折し、次で千五百十五年一月王殂落し、フランソア一世位を繼ぐ。唯此際最もレオの名をなせしものは內治にあらず、外交にあらず、奢安に伴ふ藝苑文界の昌隆なりき。

苟も西歐文藝の來由を論ずる者誰かルヂッサンス(Renaissance)文藝復興を曰はざらむ。ゲルフ、ギベリン黨爭の世は過ぎたり。羅馬皇帝の名は存すれども、獨逸の利にして半島の敵なり。教皇獨りエヂチア共和府と獨立の體面を維持するもまた昔往の慨無く、半島を通じて一の主義なく定見なき此時に方りて文藝の復興を見る。蓋し伊太利亞國民感念の斯方面に於て始て發生せるを證す可きのみ。抑上世宗教思潮の盛にして信念の篤きや、文藝自ら固陋頑執の風ありしが、星移り物

變ずるに從ひ、氣運漸く移りて新進の生面を開展せんとするや久し。マサッチオ(Massaccio、千四百二年生、千四百四十三年歿)初めて木板壁上に油繪を描き、其技を振ひし寺院は門下後進出藍の偉材を出し、ロレンゾの蒐輯はフィレンゼ藝苑の種を培ひたりと雖も、其大に起りしは實に教皇ユリウスの世、千五百六年チッス皇帝混堂の廢墟よりラオコーン(Laocoon)像を發見せしに由れり。昔者寺刹教會の建築美術は宗教の儀禮を重しとして、世俗の風を隔離せしも、今や世降りて亦た法俗の別を藝苑に立てず。ユリウス教皇はブラマンテ(Bramante)と號せしドナト・ラッファリ(Donato Lazzari、千四百四十四年生、千五百十四年歿)を用ひて宏壯偉大なる羅馬の聖彼得寺の改築を企て、成るに及ばずしてドナト歿したるも、諸般の技巧は此建設に用ひられ、レオ十世は爲に淨財を諸國に募り彼世界史上の一大事變、宗教改革の導火となりし贖罪金を課して資費に宛つと稱するに至る。是に於て乎四方の名匠良工羅馬に集る者多く中にフィレンゼ派の大美術家ミカエル・アンゼロ・ブオナロチ(Michael Angelo Buonarotti、千四百七十四年生、千五百六十四年歿)あり。抑此頃伊太利亞の美術界は數派に分れしが嘗てアンゼロの先輩として名を爭ひしレオ

ナルド・ダ・ヴンチ (Leonardo da Vinci)、千四百五十四年生、千五百十九年歿)は名作終餐の畫をグラチエ(Grazie)のマドンナ寺壁に殘し、又有名なる『繪畫論』を著はし形象の割合、光暗の法則を定めて、フィレンゼ一派莊重沈着なる畫風を創め、其後フラ・バルトロメオ (Fra Bartolommeo) の名を以て著はれたるバチオ・デラ・ポルタ (Baccio Della Porta、千四百六十九年生、千五百十七年歿)出でゝ熱誠を盡くし鮮彩を用ひ、アンドレア・デル・サルト (Andrea Del Salto、千四百八十八年生、千五百三十年歿)出でゝ明晰なる筆致と温雅なる表情とを以て聞え、バルタサル・ペルヂ (Balbasar Peruzzi)・ラヂ (Razzi) 等を經て、ミカエル・アンゼロに到りて此派は大成せり。アンゼロは繪畫、彫刻、建築等諸般の美術に兼通し、年十七にしてロレンゾに招かれてフィレンゼに用ひられ、二十三にして羅馬に赴き、後教皇の爲にシスツス院の壁畫を作りて摸範を後世に垂れ、年七十に餘りて聖彼得寺の建築掛と爲りたり。然るに其諸作の光彩ある、解體の理に合せる、地位斜寫の奇拔なる、よく之に競ふ者なくして、其極或は後の摸倣者をして誇大を學び畸矯に陷らしむるに至る。蓋し作者が目的は寧ろ美に在らずして偉偉に在り、氣魄に在りしなり。ロン・デ・ロシ (Rossi de Rossi)・サルヴアチ (Salviati)・アンゼロ・ブロンチノ (Angelo Bronzino)・アレッサンドロ・アロリ (Allessandro Allori) 等は皆アンゼロの門に出で、アンゼロの流を汲む者なりしが、十六世紀の末葉、ルドヴヰコ・チゴリ (Ludov. Cigoli、千五百五十九年生、千六百十三年歿)・グレゴリオ・パガニ (Greg. Pagani) 等出づるに及びて漸く自然に復歸してキアロ・オスクロ (Chiaro Oscuro 自然の光暗を描寫するを)に心を專らにせり。アンゼロと略ゝ時世を同うして名を不朽に傳へし稀世の名匠は羅馬派のラファエロ・サンチオ・ダ・ウルビノ (Raffaello Sanzio di Urbino、千四百八十三年生、千五百二十年歿)なり。羅馬派は十三世紀よりペルジアを本據として起り、十五、六世紀の際ペルジノ (Perugino) の號を以て知られたるピエトロ・ヴヌチ (Pietro Vannucci、千四百四十六年生、千五百二十四年歿)優雅を以て著はれ、ラファエロは實に其門に出でゝ出藍の才あり。教皇ユリウス二世に拔擢せられて、羅馬ヴチカノ宮中セニャツラ殿 (Camera della Segnatura) に神學、哲學、詩學、法學を表現せる奇作を描き、又レオ十世教皇の命によりては、幾多の青年畫家を使役監督して歷史畫を作り畫廊 (Lozzia) を創め、彫刻、繪畫、鑄金を以て之を粉飾し、意匠をフランドルの職工に授けて使徒の行狀を氈布に織り出さしめ、畫高を以て畫界に

新生面を開きて羅馬派を大成し、粗大の傾あるフィレンゼ派、精美なるエネチア派と對抗す。ラファエロの繼承者にはジュリオ・ロマノ（Giulio Romano 千四百九十三年生、千五百四十六年歿）の大膽なる、フランチェスコ・ペニ・イル・ファトレ（Fran. Penni il Fattore, 千四百八十八年生、千五百二十八年歿）の陰欝なる、バルトロメオ・ラメンギ（Bartolomeo Ramenghi）の嵩大なるありて各名を博せしも、漸くラファエロの精神を沒却して式樣の弊に陷らんとするに至り、フェデリコ・バロチ（Federico Barocio、千五百二十一年生、千六百十二年歿）出でゝ優雅の表情を力めて此弊を救はんとせり。山水に巧なるムヂアノ（Muziano）、肖像に妙なるニガリ（Nigali）、プルゾネ（Pulzone）、ファケッチ（Facchetti）は皆此羅馬派の末流に出でたり。フィレンゼ、羅馬兩派と鼎立の勢を爲せしエネチアの畫風は夙に東方より傳承するところにして、ゼンチレ・ベリニ（Gentile Bellini、千四百二十一年生、千五百八年歿）は始めコンスタンチノポリスに在りて、ムハメッド二世に仕へ、弟ジョヴニ・ベリニ（千四百二十六年生、千五百十六年歿）と共に鮮麗なる彩色を傳へ、アンドレア・マンテニャ（Andrea Mantegna、千四百三十一年生、千五百六年歿）始めて古畫風を模し、ペレグリノ（Pellegrino）、ポルデノネ（Pordenone）諸人を

經て、此派の二名家ジョルヂョネ・バルバレリ（Giorgione Barbarelli、千四百七十七年生、千五百十一年歿）、チチアノ・エルチェリ（Tiziano Vercelli 千四百七十七年生、千五百七十六年歿）出づ。前者は肖像畫に精妙を極め、神采生けるが如く、後者は史畫、像畫兼ね秀でゝ亦山水の大家と稱せらる。此他スキアボネ（Schiavone）の畫は彩色豐富にして、キアロ・オスクロは精緻なるを以て著はれ、バッサノ（Bassano）の號を以て知られたるジャコモ・ダ・ポント（Giacomo da Ponto）の作は眞に迫りて人をして畫にあらざるかを疑はしめ、イル・チントレト（Il Tintoleto）の名に著はれしヤコポ・ロブスチ（Jacopo Robusti 千五百十二年生、千五百九十四年歿）は其技チチアノの娟むところとなりて破門せられ、パオロ・カリアニ（Paolo Cigliani、千五百二十八年生、千五百八十八年歿）はチチアノ、チントレトと三名家に數へられ、又ヱロネセ（Veronese）の稱ありて、皆此派の名家たり。以上三派の外別に又ロムバルヂア派あり。此派に屬するものはフェラヽにガラショ（Galasio、千二百二十年生）、アリギエリ（Aligieri）、アルギシ（Alghisi）、コシモ・ツラ（Cosimo Tura）、エルコレ・グランヂ（Ercole Grandi）、ドソ・ドシ（Dosso Dossi、千四百七十九年生、千五百六十年歿）ありてドソ・ドシの彩色はチチアノと並稱せられ、又ボロニャ

には建築に兼通せる名匠ブラマンテ (Bramante、千四百四十四年生、千五百十四年歿)、リッポ・ダルマシ (Lippo Dalmasi)、フランチェスコ・ライボリノ (Francesco Raibolino、千四百五十年生)ありしが、此派の始めて起りしは實にアントニオ・アレグリ・ダ・コレヂオ (Antonio Allegri da Correggio) (千四百九十四年生千五百三十四年歿)の力なり。コレヂオの特長は彩色の調和と形象の優美なるにありて、名ラファエロに亞ぐ。其流を汲む者はフランチェスコ・ロンダニ (Fran. Rondani)、ガッチ (Gatti)、レリオ・ペシ (Lelio Pesi.) 及びフランチェスコ・マゾラ・イル・パルメジャニノ (Fran. Mazzola il Parmegianino、千五百三年生、千五百四十年歿)等あり。ミラノには山水の名家ラヂザリオ (Lnvizzario) ありてミラノのチャアノの名を得、繪畫と音樂を兼ぬるものにクレモナのソフォニスバ アンゴシラ (Sofonisba Angosciola) 女史ありて西班牙王室に聘せられてドン・カルロス一家の肖像を描き、名を西歐に藉かしたり。

更に轉りて文學の方面を顧みればペトラルカ、ボッカチオが奬勵せし希臘羅典の復古文學は十五世紀の末に至るまで伊太利亞文學の發達を閑却せしが、ロヂチのロレンゾ出づるに及びて伊太利文學復興したり。詩賦は敎皇レオの世を盛時と爲せしルドヂコ・アリオスト (L. Ariosto、千四百七十四年生、千五百三十二年歿)は雄篇『オルランド・フリオソ』(Orlando Furioso) 以下の諸作あり。トルクアト・タッソ (Torquato Tasso、千五百四十四年生、千五百九十四年歿)はカール大帝の遺事を詠ぜる『リナルド』(Rinaldo) を處女作として、名篇『ゼルサレムメ・リベラタ (Gersalemme Liberata エルサレム救助の作あり。ピエトロ・ベムボ (P. Bembo、千四百七十年生、千五百四十七年歿)は緇流に出でゝ賦騈に巧に、ジョヴニ・ルチェライ (Gio. Rucellai、千四百七十五年生、千五百二十六年歿)は敎賦訓詩の作多く、ルイジ・アラマンニ (Luigi Alamanni 千四百九十五年生、千五百五十六年歿)、ベルナルヂノ・バルヂ (Bernaltino Baldi、千五百五十三年生、千六百十七年歿)亦詩を善くせしが、中に就きて羅甸古詩の摸倣者は最もレオ敎皇の保護を受けたり。散文の大家中白眉と稱せられしはニコロ・マキアヴェリ (Niccolo Machiavelli、千四百六十九年生、千五百三十年歿)にして、マキアヴェリは力をフィレンゼニ用ひてメヂチ家と抗爭し、メヂチ家歸府の後は退きて政論『プリンチプ』を著はして權謀術數を盡くせる政客の性情言動を精寫して、所謂マキアヴェリ流政策の名を殘し、又別に『フィレンゼ共和府史』の著あり。フランチェスコ・グイチャルヂ

ニ(Fran. Guicciardini、千四百八十五年生、千五百四十年歿)も亦フィレンゼの產にして、業をマキアヴェリに受けて法令に通じ千四百九十四年乃至千五百二十六年の『伊太利亞現代史』の著あり。ヤコポ・ナルヂ(J. Nardi、千四百七十六年生、千五百五十六年歿)、ベネデット・ヴルキ(Benedetto Varchi、千五百二年生、千五百六十年歿)、カミロ・ポルジョ(Camillo Porzio、千五百二十年生、千五百八十年歿)の歷史に於ける、ジョルジョ・ワサリ(Giorzio Vasari、千四百七十四年生、千五百三十三年歿)の『畫人傳』フィレンゼ有名の金工ベンヴェヌト・チェリニ(Benvenuto Cellini、千五百年生、千五百七十年歿)の自傳に於ける、アニョロ・フィレンツオラ(Aguolo Firenzuola、千四百九十三年生、千五百四十八年歿)、アンニバル・カロ(Annibal Caro、千五百七年生、千五百六十六年歿)、アントンフランチェスコ・グラヂニ(Antonfrancesco Grazzini、千五百三年生、千五百八十三年歿)の諸作に於ける名家一時に郭出して所謂『五百』(Cinquecento)時代の文學欝然として隆昌を極めたり。之を伊太利亞に於ける中世文藝復興の梗概と爲す。

文藝の復興は此の如く盛なりと雖も、伊太利亞半島は既に殆んど其民の有にあらず。擅に佛蘭西の南下ありて、西歐列强は伊太利亞侵食の易きを知り、ルドヰコの謀策成りて、諸市諸豪は政爭に外援を借るを利とし、且內外共に羅馬教皇の名を假りて以て衆强を連和糾合するに便なるを曉り、從つて教皇の他と扶托せざらんを力めしに、之に由りて教皇は却つて俗權を弄び、重きを帝王諸豪の間に成さんと試み、角逐營々自利を圖り、其結果は佛蘭西のミラノに於ける、佛西兩國のナポリに於ける、近くは佛西獨瑞のエヂチアに於ける、三大爭亂を經て、半島を擧げて外人爭抗の戰區と爲れり。

千五百十五年、佛蘭西の新王フランソア一世南征の師を興し、エヂチアは爲に兵をクレモナに出し、黑黨の賊首マルクのロベルト亦之に應ず。教皇レオ十世は之によりてフィレンゼを失はんをを恐れ、兵をコロンナのプロスペロ(Prospero)に授け姪メヂチのロレンゾ、西班牙代王と與に北進して王師を邀へしむ。プロスペロはヰラフランカに至りて虜と爲り、南北の和議殆んど成らんとす。適ヅリヒの新兵至りしかば、九月十三日瑞西軍ミラノを發し、二倍の王師をマリニャノ(Marignano)に襲ひ、兩軍酣鬪夜に入りて輸贏決せず。翌日午响エヂチア軍後瑞西軍を擊ちしに瑞西軍退きしも、隊伍整然として亂れず、佛軍尾擊する能はず。軍に從ひしジャニャ

コボ後日語りて曰く「一生戰に臨むを十八回、之をマリニャノの激戰に比すれば、悉く兒戲のみ」と。以て其激烈なりしを知る可し。而して瑞西軍はミラノを去り、始めて佛蘭西王と和して爾後復伊太利亞の事に與らず。王は其去るを待ちて始めてミラノに入り、ロムバルヂアを得たり。レオ教皇之を聞きて嗟嘆し、バルマ・ピアチェンツァを割きて王に獻じて和を爲せり。然るに教皇は佛蘭西兵の去りし後、ウルビノ公の地を奪ひてロレンゾに與ふ。後千五百十九年ロレンゾ歿しジュリアノの庶子君牧師ジュリオ、フィレンゼの事を視、ロレンゾの女カタリナは後佛蘭西王アンリ七世の妃と爲れり。

伊太利亞は南方既に西班牙の手に陷ぬり、北方は屢佛蘭西に制せられ、佛西兩强の鋒動もすれば半島に撞突せんとし、フランソア王前世の志に酬ひてミラノを得しも、今や政教上に恐る可き一事變を生ぜり。獨逸のマキシミリアン皇帝の皇后はブルグンヂア公荷蘭君カールの女にして、其出たる皇儲フィリップの妃はアラゴンのフェルナンド王とカスチラのイサベル(Isabel)女王の間に生れし、西班牙王女ヨアンナなれば、ヨアンナの出たる皇孫カールは實に四王公の正統たり。千五百十六年一月西班牙王フェルナンド殂するや、フェルナンドの爲に王孫に當るカールは王位を踐み、後三年を經て、千五百十九年一月マキシミリアン帝の崩ずるや、獨逸の撰侯はフランソアを立てずして西班牙王カルロス(カール)を奉じて、カール五世と爲す。故にカール五世帝はアウストリア、ブルグンヂア、荷蘭、西班牙、兩シチリア及び西班牙領米國の元首を兼ねて、羅馬王、撰擧皇帝の尊位に在り、全歐爲めに畏縮せざるは莫し。時に羅馬教皇の弛政年を重ね、羅馬教會の積弊太しくして教義頽れ、教界亂れ、歐州の人士皆改革を想ふ。よりて獨逸のアウグスト派の一僧マルチン・ルーテル(Martin Luther)千五百十七年レオ十世の贖罪淨金を賦課せしを導火と爲して、宗教改革の旌旗を飜へし、サクゼン侯以下國内の諸豪族多く之に應じ、所謂抗抵(プロテスタント)派の亂列國を震撼動搖せり。實に政教史上の大事變にして、教皇たるレオ十世は之を看過傍觀す可きにあらず。羅馬皇帝は羅馬教會を擁護す可く、獨逸王は獨逸の離亂を平定す可く、西班牙王は加特力の熱誠を國是と爲し、伊太利亞に於ては當に佛蘭西の敵たる可きなり。故に此數國の帝王を兼たるカール五世は新教を排し、佛蘭西に抗する教皇の爲には、勢必ずや空前無上の恩主たらざる可からず。果